厚生労働省 令和４年度看護職員確保対策特別事業
看護基礎教育における地域住民と連携した教育事例収集事業

＼ 地域は教育の宝箱！ ／

# 地域と学校が共に作る 連携教育展開の手引き

一般社団法人日本看護学校協議会／厚生労働省

厚生労働省 令和４年度看護職員確保対策特別事業
看護基礎教育における地域住民と連携した教育事例収集事業

＼ 地域は教育の宝箱！ ／

# 地域と学校が共に作る 連携教育展開の手引き

一般社団法人日本看護学校協議会／厚生労働省

# はじめに

2022（令和4）年度から保健師助産師看護師法施行規則が改正され、3年課程および准看護師養成課程の看護師等養成所・学校では2022（令和4）年4月から、2年課程では2023（令和5）年4月から、新しい指定規則での看護基礎教育が始まります。この教育は、病院完結型から地域完結型へと軸足を移し、地域包括ケアシステムの中で活躍ができる看護師の育成を目指すものです。具体的には、「在宅看護論」が「地域・在宅看護論」に名称を変え、「統合分野」から「専門分野」に移動し基礎看護学の次に位置づけられました。これは、「地域」や「在宅」での看護は“看護の基盤である”ことを示しています。

団塊の世代が後期高齢者に入る2025年問題に代表されるように、日本全体としては超高齢化・人口減少時代に入っていますが、そのありようは地域によって大きく異なります。そのため、看護師等養成所・学校がある地域や社会のニーズに応えられるように、その地域に根づいた看護基礎教育が求められています。しかしながら、近年は家族背景の複雑化や家族構成の縮小化に伴い、小さい子どもや高齢者との接触経験を持たない学生も多く在籍しています。そのようなことから、学内での限られた環境だけでは十分な教育効果が得らないことも懸念されています。

このような背景を踏まえ、この冊子は、学内外で地域住民と交流する看護基礎教育に取り組むことで、学生たちの視野を広げ看護師へと向かう姿勢を後押ししている好事例を集めたものです。地域の方たちから人生や生活を教えていただくことで、学生が飛躍的に成長・成熟していく姿は教員冥利につきます。本冊子が、地域住民の方と看護師等養成所・学校が交流し、地域の健康を守る看護師を育成する一助になれば幸いです。

一般社団法人日本看護学校協議会　会長　水方 智子

今回のカリキュラム改正においては、看護師等養成所・学校が「地域とは何か」「人々の暮らしの中で看護を提供する能力とは何か」など、十分な議論をされ、その方略が形となり、動き出したと思います。しかし、看護師等養成所・学校においても地域やそこで生活する人々とどう協力して何をつくりだしていくのか、多くの構想があっても実現までにはいくつかのハードルがあり、現時点でも困難さを感じられていることもあるのではないかと推察します。

今回、ここに掲載した18校20事例には、その困難さを解決するヒントが多くあり、さらに、そこに関わられた地域住民の方や先生方の熱いお気持ちも伝わってくることと思います。看護師等養成所・学校が自校の特徴に応じて、この事例を活用され、地域との連携教育の充実を図ることができれば幸いです。

一般社団法人日本看護学校協議会　常任理事／
看護基礎教育における地域住民と連携した教育事例収集事業　調査班委員長　恒﨑 康子

# 目次

目次と事例紹介 MAP では、どの分野の教育内容であるかを次のように色分けしています

| | |
|---|---|
| 橙 | 基礎分野 |
| 青 | 専門分野 |
| 緑 | 統合カリキュラム |
| 赤 | 科目外 |


はじめに …… 2

事例紹介 MAP …… 4

看護基礎教育における地域住民と連携した教育の手引き …… 6

看護基礎教育における地域住民と連携した教育事例集

| 事例 | | 年次 | | |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 近隣団地に居住する独居高齢者宅の定期訪問<br>～地域の高齢者とつながり、理解し、暮らしに寄り添う看護を学ぶ～ | 1 | | |
| 2 | 独居高齢者宅の継続訪問活動に結び付けたプロジェクト学習<br>～住み慣れた地域での“その人らしい生活”のための提案～ | 2 | 上尾市医師会<br>上尾看護専門学校 | …… 18 |
| 3 | 地域住民が避難者役を務める避難所設営・運営訓練<br>～“地域住民のもしも”に備える～ | 3 | | |
| 4 | 相馬の暮らしと人を知る「市内バスツアー」と「談話会」<br>～相馬に伝承される“至誠（まごころ）”を持った看護実践者の育成～ | 1 | 相馬看護専門学校 | …… 22 |
| 5 | 泉州で活躍する7人のプロフェッショナルから学ぶ「泉州地域学」<br>～地域を支える人から地域の誇りを学ぶ～ | 1 | 泉佐野泉南医師会<br>看護専門学校 | …… 24 |
| 6 | 地域を多角的に捉えるための14カ所のフィールドワーク<br>～地域住民の多様な活動に加わり、地域の暮らしを理解する～ | 1 | 福岡水巻看護助産学校 | …… 26 |
| 7 | 学生が地域とつながる“まつかん地域貢献プロジェクト”<br>～思考力・判断力を培い、連携を模索する～ | 1 | 松下看護専門学校 | …… 28 |
| 8 | 先生は島人（シマンチュ）！　地域住民の生活を“知る”のではなく“共有する”<br>～散策して見聞きし、集落（シマ）の活動に加わって学ぶ「参加活動型学習」～ | 1 | 日章学園<br>奄美看護福祉専門学校 | …… 30 |
| 9 | 「田植え」実習の指導者は、地元農家の方々<br>～農家の暮らしぶり・人生観・健康観を学び、郷土愛・郷土への誇りを育む～ | 1 | 竹田看護専門学校 | …… 32 |
| 10 | 敬老会の企画・運営を通して地域の高齢者に寄り添う心を育む<br>～学校所在地の自治会との連携～ | 1 | 厚木看護専門学校 | …… 34 |
| 11 | 地域社会の実態から学ぶ密着型「地域フィールド学習」<br>～命・健康・生活・労働を守る医療・看護の理解を深める～ | 2 | 勤医会<br>東葛看護専門学校 | …… 36 |
| 12 | 避難所設営・運営のノウハウを培う「図上シミュレーション訓練」<br>～市役所地域福祉課と連携して災害発生時の対応を学ぶ～ | 3 | 鹿児島県医療法人協会立<br>看護専門学校 | …… 38 |
| 13 | 地域の高齢者が模擬患者として参加する看護技術演習<br>～地元老人会の協力を得て～ | 1 | 獨協医科大学附属<br>看護専門学校三郷校 | …… 40 |
| 14 | 障がいを有する小児とその家族との「遊び」を介した交流<br>～子どもの成長発達を支える看護実践のために～ | 2 | 島田市立看護専門学校 | …… 41 |
| 15 | 小・中学生対象の看護体験ツアーと進路相談交流会<br>～子どものキャリア教育に参画して子どもと地域を深く理解する～ | 2 | 京都中部総合医療<br>センター看護専門学校 | …… 42 |
| 16 | 「丹波 OB 大学」「いきいき100歳体操」に参加<br>～地域でいきいきと生活する高齢者を知る～ | 2 | 丹波市立看護専門学校 | …… 43 |
| 17 | 児童館・学童保育での健康教育<br>～児童に「手洗い」などを指導して、地域の健康水準の向上に寄与する～ | 3 | (専)京都中央<br>看護保健大学校 | …… 44 |
| 18 | 「認知症カフェ」の企画・運営<br>～認知症を知り、学び、考え、つながる場をつくる～ | 3 | 函館看護専門学校 | …… 45 |
| 19 | 駅近レンタルスペースで「スチューデントサロン」を開催<br>～小山市民が健康で幸福に暮らす提案に取り組む～ | 3 | 国際ティビィシィ<br>小山看護専門学校 | …… 46 |
| 20 | 学生機能別団員として地域の防災活動に貢献<br>～能代（のしろ）市消防団との連携～ | 科目外 | 秋田しらかみ看護学院 | …… 47 |

協力校・協力者名一覧／調査委員会構成 …… 48

# 事例紹介MAP

**発想は自由！**

**こたえは地域の中にありました。地域は教育の宝箱です！**
地域住民と連携した看護基礎教育は実にカラフル！
全国各地でそれぞれの地域性を踏まえた教育事例が展開されています。

## 1 [1年次] 近隣団地の独居高齢者宅の定期訪問

学外

p.18

## 2 [2年次] 定期訪問継続とプロジェクト学習

生活に関する提案

学内外

## 3 [3年次] 避難所設営・運営訓練

地域住民が避難者役

学内外

## 4 相馬市内バスツアー＆シルバー塾会員との談話会

相馬を知り
至誠(まごころ)
を交わす

学内外

p.22

## 5 地域のプロフェッショナルから学ぶ泉州地域学

地場産業・文化・暮らし
地域の誇り

学内外

p.24

## 6 14カ所でのフィールドワーク

地域の多様な暮らしを知る
多角的視点の育成

学外

p.26

## 7 まつかん地域貢献プロジェクト

学生主体の探究活動
地域のためにできることを！

学内外

p.28

## 8 先生は島人（シマンチュ）！参加活動型学習

集落（シマ）の活動に加わって学ぶ

学内外

p.30

## 9 田植え実習で農家の暮らしぶりを学ぶ

指導者は農家の方々

学外

p.32

## 10 敬老会の開催

自治会と連携
地域高齢者との交流

学内

p.34

## 11 密着型地域フィールド学習

命・健康・生活・労働を学ぶ

学外

p.36

学習年次　1年次　2年次　3年次

学習の場　学内　学外　学内外

学習行動　見学　話を聴く　参加

## 12 学校が避難所 図上シミュレーション訓練
市役所職員との連携

学内

p.38

## 13 老人会の高齢者が模擬患者
基礎看護技術演習

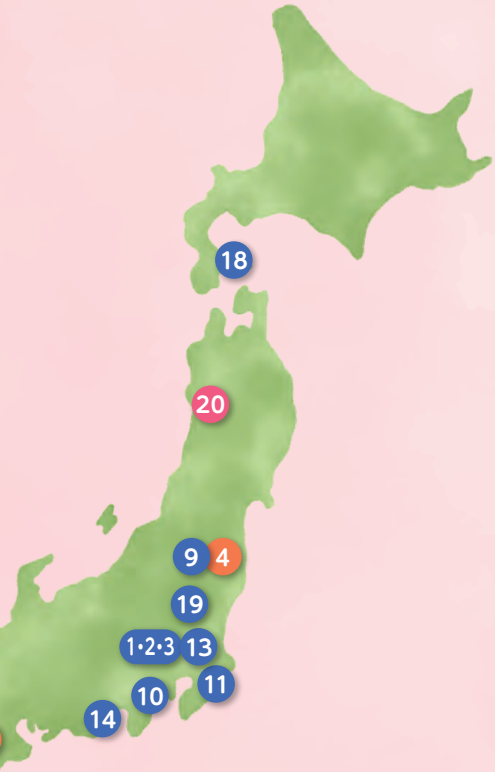
学内

p.40

## 14 障がいを持つ小児と“遊び”で交流
子どもと家族の支援
＆子どもの発達を学ぶ

学外

p.41




## 15 小・中学生対象 看護体験ツアー
子どものキャリア教育に参画

学内外

p.42

## 16 丹波 OB 大学 いきいき100歳体操
地域でいきいきと暮らす
高齢者

学内外

p.43

## 17 児童館・学童クラブで健康教室
テーマは「手洗い」など

学外

p.44

## 18 認知症カフェの企画・運営
認知症を知って学んで
考えてつながる

学外

p.45

## 19 スチューデントサロン開催
悩みや相談に寄り添う提案

学外

p.46

## 20 学生機能別団員
地域の一員として
消防団の活動に参加

学外

p.47

地域の誰とつながりどんな協力をしていただき学生に何を学ばせるか。この MAP を片手に事例集を旅してご検討ください！

イラスト原案／福嶌松代

# 看護基礎教育における地域住民と連携した教育の手引き

地域包括ケアシステム構築の推進に向け、看護職員には多様な場において多職種と協働して看護ケアを提供することが期待されていますが、少子高齢化、核家族化、地域の結びつきの低下等の影響で子どもや高齢者との交流機会や接点が少ない看護学生が多く、従来型の講義中心の授業と限られた場面設定での教員や学生同士での学内演習と臨地実習では、コミュニケーション能力をはじめとした看護実践能力の習得に影響しかねない状況です。

冒頭に記載しているように、今後看護職には様々な役割が求められているところであり、看護師等養成所（以下、学校）は社会のニーズに即した質の高い看護職員を養成することを求められています。看護学生の看護実践能力向上に資する持続可能な教育を行うためには、地域資源を活用した教育、特に地域住民に看護基礎教育に携わっていただくことが重要であると考えます。

このたび、一般社団法人日本看護学校協議会会員校の中で「地域住民と連携した教育」（以下、連携教育）を実施している学校にヒアリング調査（調査期間：2022年7～8月）を行い、その導入経緯、目的、具体的な教育方法および教育の効果等を整理しました。各校の事例は、本冊子18ページ以降の好事例集に詳しくまとめてありますので、ぜひご覧ください。

この手引（6~17ページ）は、これから、連携教育を導入したいと考える学校、すでに導入しているがさらに質向上をねらいたい学校、さらに多様な展開を模索する学校の教員に、ガイドとしてご活用いただけるよう、下調べ、計画、実施、評価、修正までを9つのSTEP（図1）に沿って解説します。ぜひ、好事例集と合わせてご覧ください。

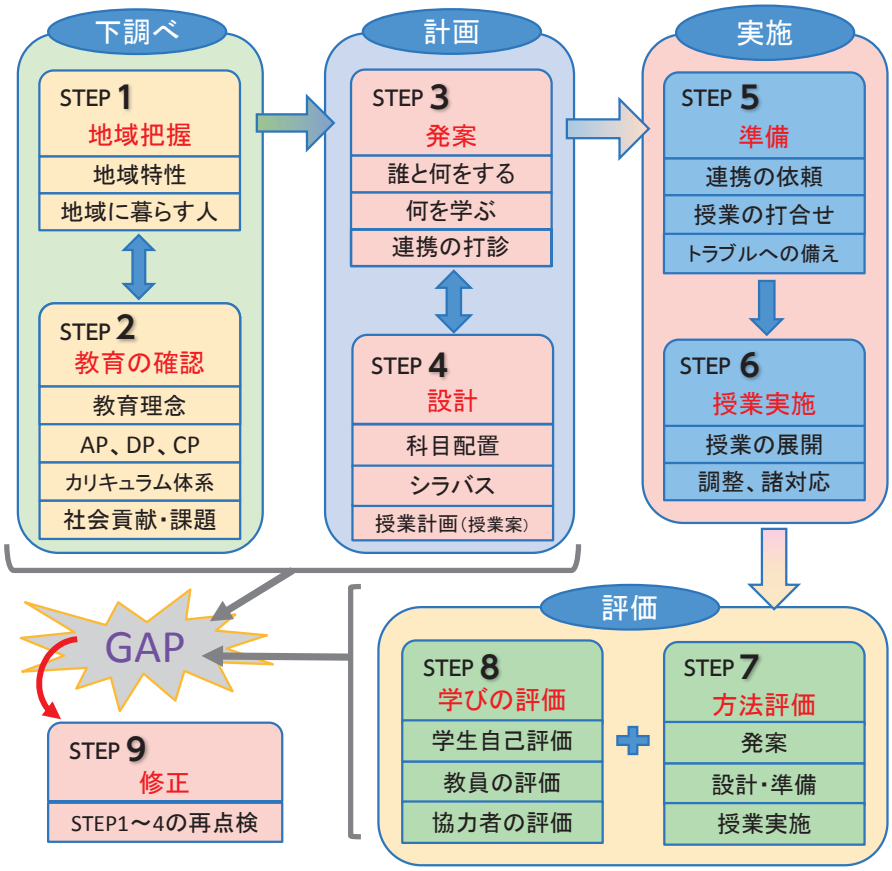



図1　地域住民との連携教育展開の基本プロセス

下調べ
STEP 1

## 地域把握 ～学校所在地域の特性を把握し、地域に暮らす人を知る～

連携教育は**誰（どこ）と繋がり、何をするか**によって学習成果が様々です。まず、学校所在地の市区町村のウェブサイト等から地勢、人口構造、産業関連情報、暮らしの情報、医療・福祉・介護の情報、教育施設や教育課題への取り組みに関する情報、防災情報、防犯情報、文化・歴史等といった地域特性と自治体の取り組みを把

握することから始めるとよいでしょう。市区町村長から地域住民へのメッセージ、伝統行事・祭り・各種イベント等の案内、町づくり・ボランティア・趣味に関する活動の情報、観光案内等、**地域特性の把握**に役立つ新旧情報が多々掲載されています。近年の行政計画、実施した調査の速報や報告書、委員会資料等は、地域の網羅的把握に最適な資料です。また、市区町村役所の組織図を確認し、設置課ごとの役割を把握しておくと、連携先に関する相談をする際に活用できます。

市区町村単位で地域特性を把握した次は、地区あるいは集落といった一定の範囲（以下、地区）での**人々の暮らし**を把握しましょう。市区町村のウェブサイトには、公民館のような地区の暮らしの延長にある施設の情報、自治会や地区の自主活動・ボランティア活動情報、社会福祉協議会関連情報、文化継承や親睦を目的とした地区行事等の情報が数多く掲載されています。こういった地区情報を収集し、地区の人々の暮らしぶりを知ることで、学校所在地域での連携教育のアイデアが生まれることがあるでしょう。

学校所在地域についてある程度詳しくなった次は、そこで暮らす地域住民（図2）の理解を深めましょう。どのような年代で、どのような労働、学習、余暇活動等をする人が暮らしているか。どのような団体があり、その団体はどういった機能を担っているか。どのような保健・医療・福祉等を利用する人が暮らしているか。地域特有の祭事、自然環境、特産物、郷土料理、ソウルフード、地場産業等、地域の誇るものを理解するには机上探索だけでは不十分です。地図を片手に**実際に歩く、見る、聞く、触れる、参加する、食す、感じる**、すなわち五感を使った情報収集をお勧めします。地域にはそこで暮らす人々の**多様な考え方、価値観、望み**が存在します。特産品があるならば実際に味わい、生産者、販売者からそれにまつわる話をお聞きしましょう。産業製品や工芸品は入手し、それらが生まれた背景や歴史を知り、生産に携わる**人の思い**や**暮らしぶり**を知りましょう。地域の伝統行事や祭りに参加して、地域住民の**活気**や**思い**に触れましょう。

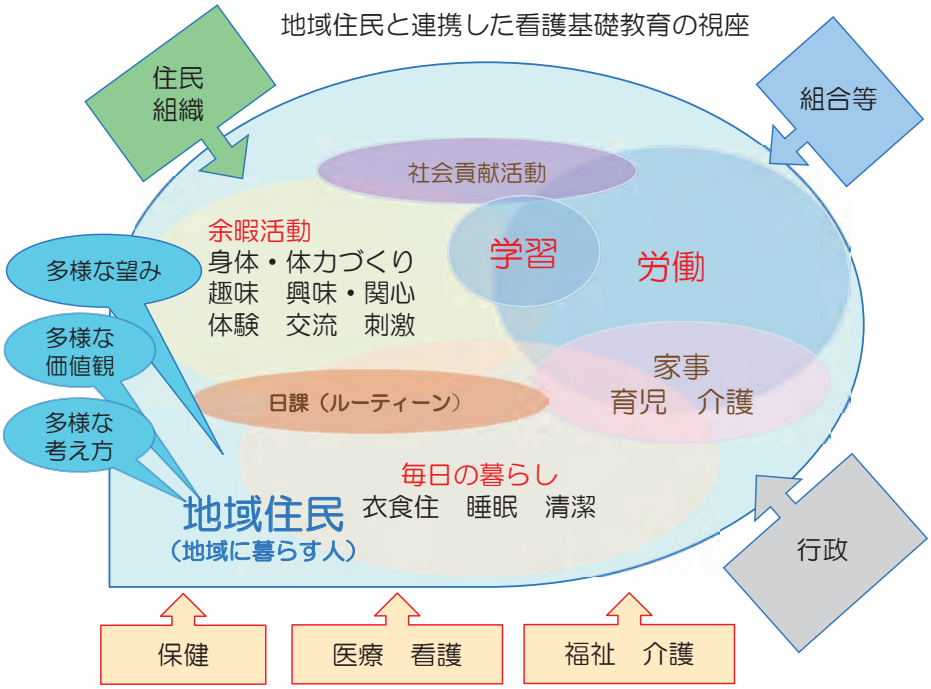


図2　地域住民と連携した看護基礎教育を展開する際の視座～地域に暮らす人として視る～

教員が人々の健康と幸せを支える看護の視点を携えて地域・地区を巡ると、『地域は教育の宝箱』であることに気付くことでしょう。具体的には、高齢者の移動手段に関連した課題、子どもの遊びあるいは安全に関連した課題等々、**看護学生に学習させたくなる題材**を多々見つけることができます。看護基礎教育の教育題材は課題に限りません。“郷土料理を作って食べる親睦行事”が開催されていたとしましょう。これも教材化が可能です。食材、料理の特徴、調理法、保存法等を**地域住民から直接教えていただく**、**一緒に調理をして食す**体験をすることで、地域住民の**暮らしぶりや心情等に触れる**ことができます。教員が集まりに参加することで地域住民と**顔なじみになる**こともできますし、対話や協同活動によって**関係性や信頼関係を構築する**こともできます。対人関係は相互理解の上に形成されるものですので、地域住民も徐々に教員および学校の教育に関心を寄せてくださるでしょう。後にこれらの関係性、信頼関係が、看護基礎教育での地域住民との連携教育に繋がることが多いようです。

下調べ
STEP 2

## 教育の確認 ～自校の教育の全体像を確認する～

地域把握ができた段階で、一度、自校の教育を確認しましょう（図3）。設立経緯、建学の精神、教育理念、教育目的、教育目標、アドミッションポリシー（AP）、ディプロマポリシー（DP）、カリキュラムポリシー（CP）、学校の社会貢献等といった自校の教育の全体を確認しましょう。学校の使命、学校に対して社会が期待することは何か、学校はどういう人材を育てようとしているか、そのためにどのような教育設計をしているのか、教育の全体像を確認しましょう。カリキュラムマップやカリキュラムツリー等でカリキュラムの体系を一望するとよいでしょう。その次にシラバスに目を通しましょう。シラバスは科目数分ありますので、全部に目を通すには時間が必要ですが、担当講師、概要、到達目標、授業計画（進行予定、内容、方法等）、教材、評価方法等を確認することで、発案（STEP3）を設計（STEP4）する際に、見通しをつけやすくすることができます。

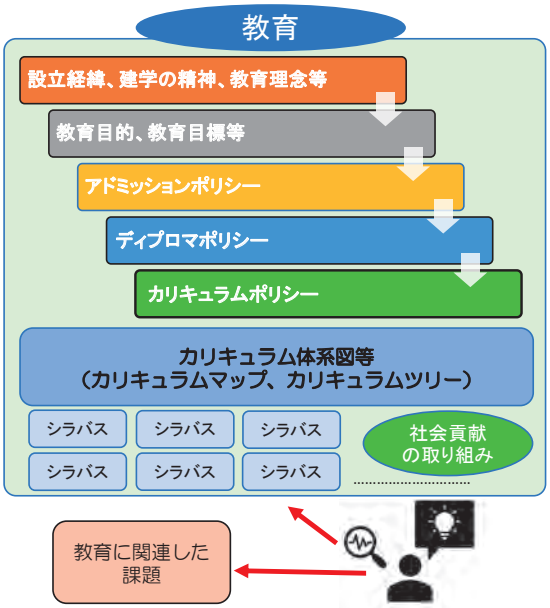


図3　自校の教育の全体像の確認

最後に、自己点検・自己評価、学校関係者評価等が示す自校の教育課題も確認しましょう。学生のどういった能力を伸ばすことができていないでしょうか。教育課題は多々あると思いますが、地域住民との連携を活用することで奏功する可能性が高い課題はないでしょうか。考えを様々巡らせましょう。

計画
STEP 3

## 発案 ～誰と繋がり、どんな協力をしていただき、学生に何を学ばせるかのアイデアを形成する～

次に、連携教育のアイデアを形成します。下調べが終わったこの段階では、どの科目で、誰（人・団体等）と繋がり、どんな協力をしていただくことで、学生は何を学習できそうか、多くのアイデアが浮かんでいることでしょう。

**『誰と繋がる』**に悩む場合は、学生との**交流を楽しんでいただける方**、**学生を歓迎してくださる方**がどこにいるかを考えてみましょう。若者との交流や次世代育成に関心を持つ方、地域の医療や健康で幸せな暮らしを実現する街づくり等に関心がある方、乳幼児と保護者、小・中・高校生、職業人、障がいを有する方、高齢者、自治体職員、民生委員等、地域には様々な人（個人や家族）がいます。児童館、公民館、学童保育、社会福祉協議会の活動拠点があります。商店街、商業施設、自治会、集落営農、老人会、認知症カフェ、消防団等々、地域には、様々なまとまり（mass）があります。**これらはすべて『誰と繋がる』の候補**です。自校の学生が臨地実習で成人期の患者を受け持つ機会が少ないならば、成人期の人々との連携を検討するとよいでしょう。入学前に高齢者との接点がほぼなく、高齢者との接し方がよくわからないという学生が多い場合には、高齢者との連携を検討するとよいでしょう。STEP1で顔なじみになり関係性や信頼関係を構築できた地域の人々、学校の教育に関心を寄せていただけた地域の人々が『誰と繋がる』の候補です。また、本調査では、日頃、学校の教育活動にご協力いただいている学校関連施設、実習施設、非常勤講師等に相談して、助言や情報をいただけたり、適した連携先をご紹介いただくことができた例が複数ありました。こういった方々へ相談することでヒントやサポートをいただける可能性があります。他にも、教員や学生の地域活動の仲間、教員の以前の職場での同僚、講演を行った際にご質問をくださったことをきっかけに知り合った方、学校評価にご協力いただいている地区の自治会長、卒業生の職場である訪問看護ステーション、学校の授業や実習等にご協力いただいている市区長村（役所）職員や社会福祉協議会職員等々に相談することでよい情報をいただけることが多いようです。

| パターン1<br>ご自身のままで | パターン2<br>役を担う | パターン3<br>受け手になる | パターン4<br>教える | パターン5<br>協働 |
|---|---|---|---|---|
| ご自身が教育効果を発揮する存在としてご参加いただく。 | 一定の役を担っていただく。 | 演習等に受け手としてご参加いただく。 | 学生にご自身の知識等をご提供いただく。 | 協働していただく。 |
| 例 | 例 | 例 | 例 | 例 |
| ・自身を語る<br>・質問に答える<br>・インタビューに応じる<br>・体験を共にする<br>・見学を受け入れる | ・模擬患者をする<br>・高齢者モデルになる<br>・避難者役を演じる | ・学生の指導を受ける<br>・学生の企画に参加 | ・何かを解説する<br>・何かを紹介する<br>・講師をする<br>・語り部 | ・学生との共同プロジェクトで一定の問題解決に取り組む<br>・学生と共に活動する |
| 事例1　事例2　事例4<br>事例6　事例7　事例8<br>事例9　事例11<br>事例14　事例16<br>事例17　事例18 | 事例3　事例13 | 事例7　事例10<br>事例15　事例17<br>事例18　事例19<br>事例20 | 事例5　事例8<br>事例9　事例11<br>（事例20） | 事例8　事例9<br>事例10　（事例12）<br>事例15　事例16<br>事例17　事例18<br>事例19　事例20 |

※　1つの事例で複数（地域住民と市役所職員、生徒と小・中学校の教員等）と連携する事例、複数のパターンを担う事例がある。

図4　「地域住民との連携教育」への地域住民の参加・協力パターン

さて、次は**『どんな協力をしていただくか』**です。地域の方々は教職ではありません。教員は連携教育にご協力くださる地域住民に、どんな協力をしていただきたいかを具体的に説明し、教育意図に沿った形でご協力いただけるように調整する必要があります。本調査の収集事例を整理し、連携教育における地域住民の参加・協力の形態を5パターンに分けました（図4）。地域の人と学生が対話をする、学生のインタビューに応える、ご自身の人生や暮らしについて学生に語っていただく、学生を体操教室に参加させていただく等、特別な準備や役割等を意識せず普段のご自身のままでご参加・ご協力いただく［パターン1：ご自身のままで］から、学生を自治会の会議に加えていただき、地区高齢者のための敬老会の企画・運営メンバーに加えていただく［パターン5：協働］のように参加・協力の形はパターン分けができ、それぞれ心づもりや事前準備も異なります。この図を参考に、地域住民に『どんな協力をしていただくか』の案を検討することにより、**地域住民の役割とご負担**も検討できますので、依頼や打ち合わせ時の説明を具体的なものにできるでしょう。

下調べ段階で**『何を学ばせるか』**のイメージはある程度浮かんでくると思いますが、そのイメージ通りの教育効果が期待できるかについては確信を持ち難いと思います。本調査班では、連携教育による学生の学びを「対話等」「行事等」「PBL」といった方法別に整理し、図5にまとめました。『学生に何を学ばせるか』を検討する際にご参照ください。ただし、学生の学びは、方法、授業の運営具合、参加・協力してくださる地域住民の参与度等の影響を受けるものですので、図5に示した教育活動を実施すれば必ず図5中の学びにつながるとは限りません。狙い通りの学生の学びを引き出すための教育方法を検討する際には、連携教育実施校の教員がお話しくださった連携教育の学習目標と多様な「学生の学び」（18ページ以降の事例中）をご参照ください。

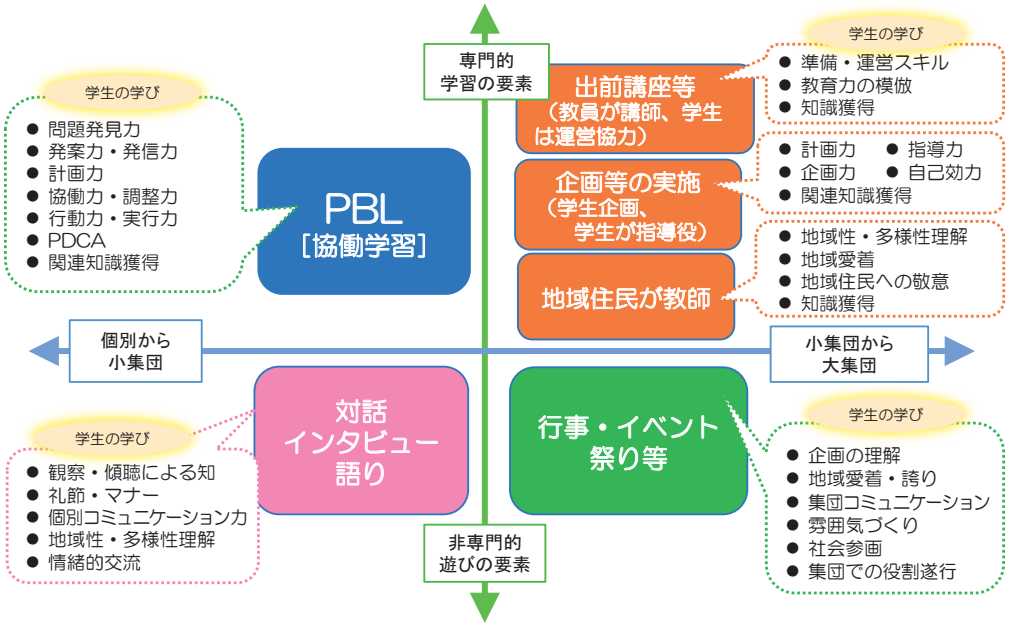



図5　地域住民との連携教育による多様な学生の学び

発案を教育設計に落とし込む途中、シラバスが仮完成し、各授業の運営の具体を記す授業案は未完成な段階で、**この通りに進められそうか？を確認できると安心**です。授業案の作成から完成に至る間のどこかのタイミングで、連携を依頼したいと考える地域の方々に**打診**するとよいでしょう。打診とは、「(自校の教育について簡単にお話しした上で、) そのために〇年の〇月ごろに何回程度、〜〜をしていただけるとありがたいのですが、ご検討いただけないでしょうか」と前もって持ちかけて相手の反応をみることです。連携教育は、地域住民のご協力・ご参加がなければ成り立ちません。授業案を完成させてから依頼し、ご協力いただけなかった場合、授業案の細部修正が必要になります。ご承諾いただけそうであることを確認した上で、授業案の細部を作成する方が安心です。また、何名のどのような地域住民にご協力いただけるかを把握せずには授業案は作成できません。そもそも、連携教育はご協力くださる地域住民と一緒に運営するものです。先方の心づもりにもなる打診を踏んだ方が、後の打ち合わせもスムーズになります。

**打診を行う際の配慮**について簡単に説明します。初めて学校から協力依頼を受けた際には驚かれる方もいらっしゃいます。そんなことは自分にできないと感じる、何をしたらよいか分からないと不安になる、どうして私なの？と思う等々、即答快諾できる方のほうが少ないでしょう。驚いた結果、「すみませんが…… (NG)」と応答したり、「一度考えさせてください」と仰られることもあると思います。この場合、しつこくお願いを続けずに、期間を置いて再度、ご連絡してよいかをお尋ねする等、ご無理のない範囲で**今後も繋がる可能性**を残しておけるとよいでしょう。また、引き受けなかったことで**後味の悪さ**を感じずに済むようにお話しすること、半ば強引にお引き受けいただくように話を運ばないことも大事です。打診段階でいただいたお返事は仮のものであり、最終的な可否は、詳細のご説明の後に頂ければよい旨を丁寧にお話しすることで、**後の信頼関係構築**にもよい影響を与えることができます。すでに一定の関係性がある方に依頼する場合も、一度、先方のご意向をお伺いしましょう。事例7［学生が地域とつながる“まつかん地域貢献プロジェクト”］のように学生グループが自らのプロジェクトに合った地域の方々との連携を模索する過程も教育計画の一部である場合には、この段階で教員の打診はできませんが、プロジェクト進行中に学生が打診や依頼を計画的にできるように、打診および依頼方法に関する学習が授業案に加わっているか、確認するとよいでしょう。

計画
STEP
4

## 設計 ～科目配置を決定し、シラバスや授業案を作成する～

ここでは発案（アイデア）を具体化します。まず、自校のカリキュラムのどこに連携教育を配置するかを検討します。すでに定まっている「学生に何を学ばせたいか」 から、それを**いつ学ばせるとよいか（年次配置）**を検討します。学習内容が、基礎分野、専門基礎分野、専門分野のいずれに関連するのかによりおよその年次配置は決まりますが、カリキュラム一覧表やカリキュラムマップを参照して**学習の順序性**と**科目配置の順序性**が整合性を保つように設計することが大事です。この順序性を加味した計画が**スキーム**と呼ばれるものです。

順序性について、わかりにくいと感じられる方もいらっしゃると思いますので、上尾市医師会上尾看護専門学校の地域連携科目「老年看護演習」（事例1）（18ページ〜）を例に解説します（図6）。上尾市医師会上尾看護専門学校の教育理念は、“人々が健康な生活を営むために必要な地域医療の担い手として活躍できる質の高い看護師を育成する”ことです。教育理念の下には6つの教育目標があり、連携教育と関連するのは5つめの教育目標「地域社会の人々の健康に関するニーズに対応する一員として、看護職が果たす役割と責任を理解し、多職種と連携・協働できる基礎的能力を身につける」です。6つのディプロマポリシーのうち連携教育と関連するものは4つです（図6、ヒマワリの葉上に掲載）。

地域で活躍できる能力を培うために、1年次前期に配置した「老年看護演習」で［近隣団地に居住する独居高齢者宅の定期訪問］を行います。この科目の到達目標1は高齢者との関係構築のためのコミュニケーションの基礎の習得と実践です。この目標に到達するために、生活者としての高齢者の理解を深める「看護学概論」とフィールド

図6 「地域住民との連携教育」の設計例、上尾市医師会上尾看護専門学校（事例1～3）の「老年看護演習」（地域連携科目）の学習体系、教育設計の紹介

ワークまたはインタビューを実施して地域把握を深める「地域の暮らしと理解」を同時期に並走させるスキームです。この3科目を同時期に学習することで、学生の理解の相乗効果を狙うことができます。学習の順序性の観点から、続く1年次後期に、家族の構成員である高齢者に関する理解を深める「家族看護」を配置しています。このように、学習の順序性と科目配置の順序性が整合性を保つように科目を配置すると、学生は順序だてて一人の高齢者を多角的に捉える視点を獲得することができます。1年次の学生にとってはかなり注力を要する［近隣団地に居住する独居高齢者宅の定期訪問］ですが、2年次前期の「地域・在宅看護論演習」で地域の高齢者が住み慣れた地域でその人らしく生活するための提案を行うプロジェクト学習の題材検討に活用できます。高齢者宅訪問活動の再開と継続（図6、破線赤矢印）で訪問回数が積み重なりますので、高齢者とのコミュニケーション、高齢者理解の他にも情緒的交流の深まりも期待できます。これは、地域の高齢者の暮らしに根差したプロジェクトを起案しやすくなるような仕組みです。学生はこれら5科目の学びを2年次後期に開始される「地域・在宅看護論実習Ⅰ」で活用します。図6の緑枠内の6科目の配置は、地域で活躍できる能力の育成に最適な学習の順序性の検討を踏まえたものです。このように連携教育実施科目は、カリキュラムのスキームに合うように配置するとよいでしょう。

次に連携教育実施科目のシラバス作成の要点を説明します。連携教育はテキスト（教科書）学習が中心ではないケースが多いので、シラバス中に学習行動の具体《学生が誰と連携し、何を行うのか》をわかりやすく記載しましょう。図6の右側のシラバスにも「連携する地域住民」と「学生の学習活動」が記されています。授業に関わる方、それぞれの役割、場所および移動方法、事前に準備を要する物等も掲載しておくとよいでしょう。シラバスを見て、授業が講義（座学）なのか、演習なのか、実習なのかがすぐにわかるようにしましょう。意外とこれがわかりにくいシラバスが少なくありません。さらに、この科目が連携教育実施科目であることが一目でわかるような目印を添えると科目数を確認しやすいですし、カリキュラムマップ等を広げて連携教育の配置バランスを検討する際にも便利です。

今回実施したヒアリング調査でも授業案や企画書等、名称は様々ですが授業運営に係る詳細を記載した資料を作成している学校が多くありました。例えば、鹿児島県医療法人協会立看護専門学校（事例12）は、3年次の「看護の統合と実践Ⅱ」で「校内避難所設営の図上シミュレーション演習」を実施するにあたり、シラバスの他に市提出

用の要綱、授業運営にあたる教員用の授業案、学生に想定事例を提示するためのカード等を作成しています。この事例は自校校舎が市の妊産婦福祉避難所（二次避難所の1つ）であることを踏まえて市役所福祉課職員と連携して行うものですので、市役所福祉課職員との情報共有、すなわち、いつ、どこで、何を目的として、何を行う授業で、職員の役割は何かをお伝えすることが大事です。市役所との連携に限らず、地域住民と連携した教育全般において、口頭での打ち合わせでは共有しきれない内容は資料に取りまとめて、協力者と共有できるようにしましょう。

連携教育は教育活動そのもので学ぶことも多いですが、学習成果発表会等で学びを共有するとよいでしょう。この発表会で協力者（地域住民）からの講評の時間を設けておくと評価の観点からもメリットがあります。これについては評価（STEP8）をご参照ください。

実施

STEP 5

## 準備 ～連携を依頼し、授業の打ち合わせを進め、トラブルへの備えを確認する～

連携教育の実施にあたり、**ご協力・参加していただく方や団体等との打ち合わせ**は極めて重要です。STEP3で、ご協力いただきたい方・団体に打診を行い、ご了承の返事を頂けた後、授業前のどこかのタイミングで**正式な依頼**をしましょう。依頼に際し、STEP3で検討した『どんな協力をしていただくか』を先に説明するのは好ましくありません。まず、連携教育が必要な根拠として、STEP2で確認した**自校の教育**について、学校の使命、学校はどういう人材の育成を目指しているかを資料を添えて説明し、その上で、教育上の課題に取り組むためにご協力していただきたい旨を丁寧に説明し、理解を得ましょう。これが教育目標達成に向けて、協力者が学校と**足並みをそろえる**下地になります。

**授業の打ち合わせ**では、地域の文化や産業について学ばせたい、住民の普段の暮らしを学習させたい等、**学生に何を学習させたいか**、教育目標やねらい等を具体的にお伝えしましょう。その際、一方的に説明せず、**ご意見等を伺う**こともお勧めします。地域には、地域活性化に取り組まれている方、自身の職業や生き方に誇りを持つ方、若者の育成に熱心な方が多くいます。教員が作成した**授業案をさらによくするためのご提案**をいただけた事例（事例6、15、他多数）、ご自身の思いと自校の教育の重なりを見つけられ、教育意図を十分に汲んで授業を**主体的に運営**してくださるに至った事例（事例11、19）もありました。学校はご協力をお願いをする立場ですが、打ち合わせや授業実施に際し、**目的を共有**することで看護基礎教育と地域における諸活動等を**一緒に取り組む（協働）**に至ることができた事例もあります（事例5、10、17、18、19、20）。目的や意識の共有を目指して、打ち合わせを進めるとよいでしょう。

ご協力の依頼時には、いつ、どこで、**『どんな協力をしていただくか』**を具体的に打ち合わせます。日時の決定は直前にならないように**先方のスケジュールに配慮**するとともに、直前には確認の連絡を入れるとよいでしょう。

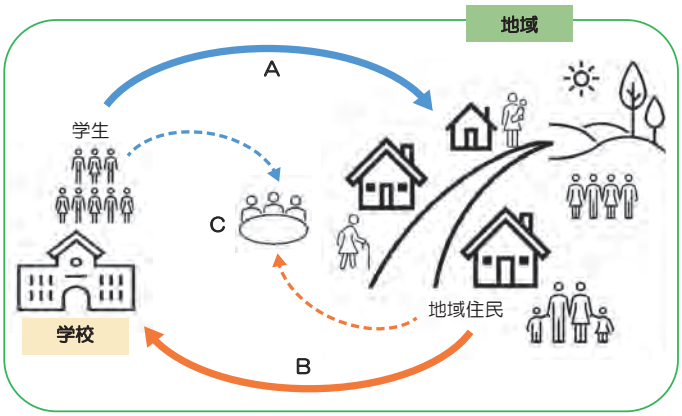


図7　地域住民との連携教育の場

連携教育の**実施場所**は、個人宅訪問、地域の集会所、公園、労働の場等、非限定的でバラエティ豊かですが、基本的には「A. 学生が校外に出る」、地域の方々に「B. ご来校いただく」、「C. どこかで集う」のいずれかのパターンです（図7）。学生が校外に出る場合には、**全学生の移動手段・移動時間**を点検しましょう。地域の方々にご来校いただく場合は、**時間と費用を含めた移動手段**、校内で使用する部屋の確保、校内での**安全性**および**協力者に不便がないか**等も確認しましょう。次に『どんな協力をしていただくか』を具体的にご説明します（図4）。

参加・協力パターンによっては、**教材や物品等の準備や練習等の事前準備**が必要となります。講師役割をお願いする場合は、**資料づくり**等を一緒に行うほうがよいこともあるでしょう。また、本番前に**予行**をご希望される方もいらっしゃるかもしれません。協力者ごとのニーズに合った対応を心がけましょう。本冊子では好事例を紹介していますので、“教育についての打ち合わせの後、授業内容は全てお任せしたが、素晴らしい授業をしてくださった”という事例もありますが、この背景には学校あるいは教員の教育意図を十分に汲んで主体的に運営してくださる地域の方に出会えた等の幸運もあります。自校でも同様の事例を展開させたいと考えた場合は、学校とご協力者が**教育意図をどれほど共有でき**、その上で**どれほど主体的に授業に参画いただけそうかを査定**した上で検討を進めるとよいでしょう。

連携教育にご協力くださった個人・団体等への謝金はなしとする方針の学校もあれば、数千円とする学校、非常勤講師の謝金規定に沿う学校がありましたが、準備の段階までには、**謝金の有無**をお伝えできるとよいでしょう。実際には謝礼の有無以上に、学生との交流を楽しんでくださったり、教育にやりがいを感じてご協力いただけることが多く、その喜びが報酬であると考える方も少なくありません。しかし、ご来校いただいたり、学生に帯同していただく場合には、移動に費用が発生しますので、**個人負担がないよう**にお支払いしましょう。地域の交通事情、天候や季節によって、あるいは高齢、障がい等のような協力者の特性によっては公共交通機関を利用しての移動よりも、タクシーや自家用車でのご来校や移動をご希望されることがあります。タクシー代、駐車場代等は学校がお支払いするよう調整しましょう。必要に応じて学校の駐輪・駐車スペースのご利用案内もしましょう。高齢者にご来校いただく場合には、ご来校に際しタクシーのご利用を推奨する、交流会場を1階にするといった**配慮**をするとよいでしょう。校内での敬老会開催に際して、校内での高齢者の安全を教材化した授業計画もありました（事例10）。

学生が校外に出る場合には、**学生の移動に関する計画と備え**が必要です。学生の移動費用は学生の自己負担とする学校がほとんどでした。これに関して、回数が多い等で学生の移動費用を学費として準備している場合を除き、学生負担が多く発生しないかを確認しましょう。紹介事例の中には、学生が道を間違えたり、所要時間の見積もりが悪く遅刻したという例がありましたので、遅刻や欠席の際に、先方への一報と学校への報告が速やかにできるように、**連絡方法を明確にしておきましょう**。また、校外での授業の場合、教員が帯同する必要性は高くなくても、部分的に帯同することで、学生の緊張が和らぐ、ご協力いただいている方（組織）との連携が潤滑になる、教員自身も改めて学生目線で学習を体験できるといった利点があるようですので、**教員の移動（経路や時間）**も見積もりましょう。

次に、**トラブルへの備え**を確認しましょう。ヒアリング事例にはトラブルはありませんでしたが、学内での一斉講義型の授業や、経験の蓄積により安全に実施できている臨地実習と比較して、連携教育で起こり得るトラブルの種類は多い可能性もあります。学生生活全般に共通する注意事項ですので、入学後のガイダンス等で、**法令・マナーの遵守**の説明や、**SNS に関する注意喚起**等の指導はされていると思いますが、連携教育実施の際には、その内容を学生に**再確認**するとよいでしょう。例えば、ご協力者から「思い出に一緒に写真を撮りましょう」とご自身のスマートフォンでの写真撮影を提案されたり、「また、（個人的に）連絡を取りたいので連絡先（電話番号・メールアドレス、SNS アカウント等の個人情報）を教えて」と声をかけられることがあると思います。学生への温かいお気持ちの延長であることが多いのですが、これが後に、SNS への写真投稿による情報拡散、執拗な勧誘、つきまとい等の**トラブルに発展する可能性もないとは言い切れません**。教員は授業の計画 STEP1、4、5で、ご協力いただく地域住民について一定の情報を得ており、人物の危険性についてある程度の査定ができていると思いますが、実際の授業では打ち合わせした人物以外の多くの人々と接します。万が一にも、トラブルに巻き込まれることがないよう、学生に十分な注意を促すとともに、学生が断りにくいと感じた際には教員が速やかに仲介に入るようにしましょう。連携教育がきっかけで、学生がトラブルに巻き込まれたり、危険に晒されることがあってはいけません。学生が少しでも**不安**を感じたり、**おかしい**と思った際には、すぐに教員に**相談**でき、**安心**して学習できる体制を整えることが大事です。

地域住民と連携した教育の授業への移動経路や授業中に学生がけがをしてしまった、させてしまった、物を壊した、壊されてしまった等のトラブルが発生するかもしれません。例えば、子どもとの遊び体験学習中に誰かが転倒しけがをした、幼児が看護学生の眼鏡を踏んで壊した等、予期せぬトラブルが発生する可能性があります。この種の**トラブルに対しての備え**ができているかの確認も大事です。これも連携教育に限らず学生生活全般に共通することですが、学生が看護学生向けの総合補償制度等（日本看護学校協議会共済会のWill等）に加入できていると安心です。学校が学生に科目外でのボランティア活動を案内している場合には、補償制度がボランティア活動をカバーしているかも確認しましょう。

実施
STEP 6

## 授業実施 ～教員は連携教育のファシリテーターを務める～

連携教育を展開する授業における教員の役割は、一斉講義型の授業とは異なります。一斉講義型の授業では、教員が授業の教師（ティーチャー）役割を担いつつ、学生の理解を確認するために発問を促す、理解を深めるために学生に意見を述べさせる等、授業内でファシリテーションを行います。対して、連携教育では実施する**教育方法に合った各種役割**を果たす必要があります（図8）。

| | 一斉講義型授業 | 地域住民との連携教育 | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 対話インタビュー語り | 地域住民が教える | 出前講座等に協力 | 企画等の実施 | 行事・イベント祭り等に参加 | PBL［協働学習］ |
| 教師の役割 | 教員 | なし | 地域住民 | 教員 | 学生（指導役割） | なし | |
| 学習者 | 学生 | 学生 | 学生 | 地域住民・学生 | 地域住民 | なし | 学生・地域住民 |
| 学生は誰から学ぶか | 教員 | 地域住民 | | 教員 | 学生間企画の指導者 | 地域住民 | 学生間地域住民 |
| 授業のファシリテーター | 教員 | 教員 | | | | | |

図8　地域住民との連携教育を展開する授業での看護教員の役割　※図中の学習者は、場面構造上の学習者を示す。

本ヒアリング調査の結果、計画から実施（発案➡設計➡準備➡授業実施）までの**各段階で創意工夫**があることがわかりましたが、その多くは授業のファシリテーターとしての機能でした。連携教育では、**科目担当教員のファシリテーション能力**がその教育成果に強く影響するようです。会議の進行に例えて説明される一般的なファシリテーションスキル※は、「場のデザインのスキル、対人関係のスキル、構造化のスキル、合意形成のスキル」です。本ヒアリングでも、教員は「教育にご協力いただける地域住民を見つけ、協力依頼をする過程で看護基礎教育への理解を促し、学校の教育目標や各科目の目標に合った形でご協力いただけるように根回しを行い、授業実施にあたっては、学生、地域住民の関係性保持や授業ごとの進行を牽引する」というように、**きめ細かで多様なファシリテーション機能**を果たしていることがわかりました。

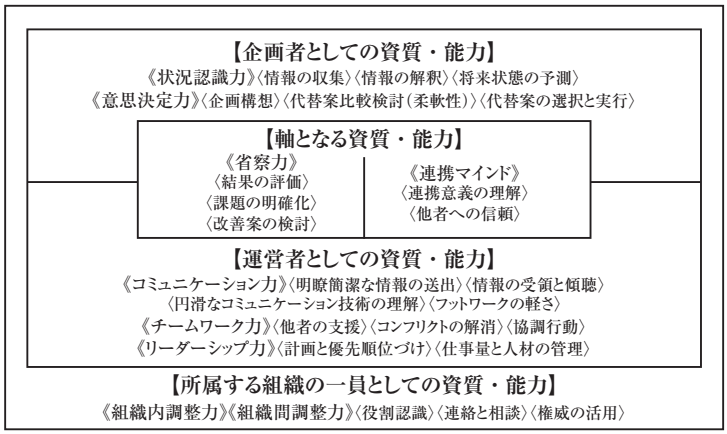



図9　地域との連携・協働を担う教員に求められる資質・能力の構造
高橋平徳．地域との連携・協働を担う教員に求められる資質・能力を構成する概念に関する一考察．大学教育実践ジャーナル．（16），2018，51より転載．

連携教育を行うにあたり、ファシリテーションの能力に自信がない場合には、図9を参考に、弱い能力を補うための研修等に参加するのもよいでしょう。しかし、能力の核には≪**連携マインド**≫が必要です。好事例集の「同様の連携教育を導入・展

※堀公俊．ファシリテーション入門．日本経済新聞出版社，2004，p.51-54.

開したい他校へのメッセージ！」欄に一部を掲載していますが、教員が自校の**学生を地域で育てたいという気持ち**を強く持ち、**地域や地域の人々に信頼**を寄せ、それを**継続的に発信**することで、連携・協働が進む例が多いものです。連携教育を実施する教員には≪連携マインド≫と**他者を“巻き込む力”**が求められます。学生や地域の人々はもちろん、必要時に応じて保護者にも**情報を提供**しましょう。

関与者が多い連携教育では、教員自身、授業協力者である地域の人々、学生、保護者、自校の他の教員、学校管理者等の間で**考えや感情が衝突**することもあるようです。そういった場合にも、冷静に状況を認識し、多くの授業関与者の**チームワーク**を損ねることなく、柔軟な思考と科目担当者としてのリーダーシップを発揮して方針等を決定する能力が期待されます。クレームのように感じられる意見であっても、優れたファシリテーターは**改善へのヒント**と捉え、代替案捻出に取り組むきっかけにするものです。

PBL（問題解決型学習）のように、教員の学習活動への直接的関与度が低い教育方法をとる場合には、学生や地域住民に関する多くの情報を収集・解釈し、予測する≪状況認識力≫も大事です。本調査では、教員が（学習の）結論を強く誘導したり、あらゆるトラブルを教員一人で解決してしまうような事例はありませんでした。“見守るちから”と比喩的に表現されることが多いですが、看護教員が**学生を信じ、変化、成長を待つ姿勢**を持つことも重要なようです。

地域住民に、授業の中の講義の一部あるいは全部の講師を担っていただく場合（事例5、事例8、事例9、事例11）でも、授業運営者は教員です。**地域住民が教育内容の責任を負うことはない**ことを認識しましょう。教員は、必要に応じて資料作成を補助する、授業の練習等の機会を設ける、授業に同席して進行を補助する、授業終了後に補足等を行い学生の理解を促す、講師となった地域住民がやりにくさを感じていないかを聴取し、**気持ちよく・効率的に授業を行っていただけるように調整**しましょう。学生も、協力者である地域住民も、教員自身も、連携教育に関わる全ての人が、楽しみながら、各々の目標を達成できるのが理想です。

授業に関する問題発生時には、科目担当教員が**都度対応**をしますが、科目担当教員一人で解決できない場合は、他の教員に相談する、すみやかに学校管理者に報告する、必要性があれば躊躇せずに市区町村等も巻き込んで対応するようにしましょう。責任感を感じるあまり、教員一人でどうにかしようと考えてはいけません。連携教育のトラブルも**連携対応する**ことで早い解決にたどり着くものです。

このように、教員は、授業の企画者兼ファシリテーターとして授業運営にあたるとよいでしょう。

評価
STEP 7

## 方法の評価 ～方法《誰と繋がり、どんな協力をしていただく》を評価する～

ここでは連携教育の授業に関する方法評価に特化して説明します。授業実施後には、授業評価をしますが、方法の評価は早めにしましょう。

科目担当教員、授業実施者、協力者である地域住民、授業を受けた学生からの評価は、それぞれ異なる立場からの見え方・感じ方に基づく評価です。いずれの評価も大切ですが、設計・準備・実施に不備がないか、予定通りできたかといった**方法を具体的に評価できるのは連携教育を発案・設計した教員のみ**です。教員は、資料の❶から❺を振り返り、記録しましょう。授業の方法が適切か、方法が授業進行や学びにどう影響したかを評価できます。

❶ 授業案通りに進行できなかった箇所はどこか。その時、どう対応したか。その結果、どうなったか。
❷ 学生の学習姿勢や反応が好ましくなかった部分はどこか、その原因はなんだろうか。
❸ 授業協力者（地域住民）が、困ったり、失敗した箇所はどこか、なぜそうなったのだろうか。
❹ 過度なご負担をおかけすることはなかったか。
❺ 企画通りにできた箇所のうち、特にうまくいった部分はどこか。なぜうまくいったか。
❻ 学生の授業評価の［授業運営に関する項目］を確認して、どういう内容が記載されているかを整理する。
❼ 授業協力者（地域住民）の「気づき」やご意見等。

以上を記録しておくと継続的に活用しやすい。

資料　教員による地域住民と連携教育授業方法の自己評価項目

多くの地域住民は、学生の育成に関心を寄せ、ご厚意で連携教育にご協力くださることでしょう。そのために、過度なご負担をおかけしている例があることに教員が気がつきにくい可能性があります。拘束時間が長い、回数が多い、準備の負担が大きい、移動ストレスが大きい等の**ご負担**について遠慮して言い出せない方がほとんどです。また、数年間に渡って継続的にご協力いただくと、当初感じた楽しさや刺激は減り、学生との交流体験等が**マンネリ化**したものに感じる方も一部にはおられるでしょう。こういったことも考慮して、次年度以降はご協力者をローテーションする、授業で扱うテーマ、場所、連携教育の方法の変更を検討するというように、定期的に授業計画の必要部分を更新・変更することも大事です。

次に、学生からの授業評価のうち、「授業運営に関する項目」を把握しましょう（❻）。シラバスや授業案の弱点、不備、工夫や調整が必要な点、方法そのものの再検討に役立てることができるでしょう。

連携教育では協力者である地域住民からの評価が非常に参考になるものです（❼）。ご負担に配慮して、授業各日あるいは最終授業後に短時間で、「何か気がついたこと」「気になったこと」を伺う形式で尋ねるとよいでしょう。教員は話しやすい雰囲気を作り、お話しくださった内容等を検討して、記録しておくようにしましょう。

評価

STEP 8

## 学生の学びの評価 ～学生が何をどのくらい学んだかを把握する～

次に、**科目目標がどの程度達成できたか**を評価しましょう。**学生の自己評価**と**教員による評価**の2つが必要です。基本的には「学生の授業評価」を集計し、学生の学びを測りますが、科目に特化した学び、連携教育による学びを詳しく把握するためには「学生の授業評価」だけでは不十分です。ヒアリング校では、テストやレポート評価だけに頼らず、教員が学生の提出物（課題レポートや感想文等、科目評価対象の提出物）から学生の学びを拾って把握する（7校）、実習記録・実習日誌を参考にする（2校）のように、**教員が学生の学びを質的に把握している**ことがわかりました。こういった方法をとらなくても、授業進行と学生の様子を観察する中で、学生が何をどのくらい学んだかを推し量ることはできますが、観察による評価は主観の影響を多く受けるため、観察のみで評価するのは好ましくないでしょう。

次に、客観的な評価をどう行うか？です。本ヒアリングではルーブリック評価を実施している学校が1校ありましたが、ルーブリック表作成（評価項目と評価基準づくり）には一定の難しさがあります。より簡便でお勧めできる方法として、**科目目標の達成度評価**（リッカート尺度）があります。これも、学生の自己評価と教員による評価を行うとよいでしょう。教員による評価は、学生個人、グループ単位、クラス全体の3タイプの評価をするとよりよいでしょう。これにより、学びに関する**学生の自己評価が教員の予測と異なっている点**を確認できます。同時に、学生個人での学びの差の把握、グループワークを実施した場合にはグループ間比較、クラス全体の科目目標達成度も把握できます。ただし、科目目標の文言によっては、できた・できなかったの解釈が難しい、科目目標が具体的でない場合には評価をつけにくいことがありますのでご注意ください。科目目標の達成度評価（リッカート尺度）は、教員が学生の学びを科目目標に照らし合わせて客観的に把握するには便利ですが、学術データとしては弱いものです。あくまでも教員の授業評価と修正という範囲で活用するようにしましょう。

連携教育の学生の学びの評価について、本調査でユニークな方法を把握できましたので紹介します。それは、学生の**成果発表会等の機会を活用した評価**です。成果発表等の開催目的は、成果をまとめる過程での追加学習、学生間の成果の共有、教員による学生の学びの評価であることが多いでしょう。ここに**協力者（地域住民）からの講評や感想を加える**ことで、学生の発表以外の学びがあることを多々教えていただくことができることがわかりました。協力者は教員とは異なる視点で学生を評価しますので、科目が意図していないことを学習できていることを知らせてくださったり、教員の目線でわかりにくかった学生の成長等に気づいてくださっています。学び以外にも、不足

点をご指摘いただけること、期待感を投げかけていただけることもあるそうです。これは学生にとっても、教員にとっても非常に有益なことです。成果発表会等を設計していない科目では、毎回の授業の終わりや連携教育の最終授業で、協力者から評価を頂く時間を設定するとよいでしょう。**協力者からの直接フィードバック**は学生にとって非常に励みになるものです。



## STEP 9 修正 ～次年度に向けた修正とカリキュラム内でのバランスを点検する～

授業を実施して評価した後には、方法評価（STEP7）、学びの評価（STEP8）を活用して次年度に向けた計画修正を行いましょう。

シラバスや授業案の修正を検討する際には、STEP7でまとめておいた「うまくいかなかった点」をどう修正するかと、STEP8で確認した「科目目標の達成度が低い部分」を補うために必要な計画の修正を検討しましょう。

連携する人（地域住民、団体等の協力者）が変われば学生の「学び」も変わるでしょう。場所を変えても然りです。臨地実習と連携教育科目の順序性や学生の学習時間を考慮して科目実施時期を変更するのも一つの手です。実施時期を分散する工夫（事例19）も参考になるものです。教育効果つまり「学び」の量や質は教育方法等の変更の影響を受けます（図10）。授業には人と場所以外にも教員がコントロールできる事柄が**複数**あります。最適な「学び」を生み出すために何を修正するとよいか、創意工夫することで、学生の学びを質・量ともにさらに豊かにすることができるでしょう。この際、細部の設計に凝りすぎて変更の柔軟性を乏しくしてしまっていないか、教員の貪欲さによって学生に過度の学習のためのエネルギーを求める事態になっていないかも確認しましょう。本調査では連携教育は非常に多くの「学び」を生み出すことが確認できました。それならば、学びの量を他科目に分けることを検討してもよいでしょう。授業評価委員会や教員会議等で他科目と**学びの重複**はないかを確認するとよいでしょう。科目間での授業内容の交換等が難しい場合には、領域横断科目の創設の検討をはじめるのも1つの方法です。

最後に、連携教育に限りませんが、科目担当教員の多くは授業を実施し、評価を終えると、いわば燃料切れのような状態になる傾向があります。ここで今一度、連携教育発案時（STEP3）の気持ちに立ち戻り、前向きな気持ちを掘り起こして、修正に取り組みましょう。

修正は改善に向けて多くの可能性を有する夢のあるプロセスです。

図10　地域住民との連携教育の授業方法の見直し（イメージ図）

手引き執筆・監修：奥田三奈
分担執筆：齋藤裕子、恒﨑康子、福嶌松代、山田かおる
図1～8、図10、資料作成：奥田三奈

# 上尾市医師会上尾看護専門学校
埼玉県上尾市

**設置主体**｜一般社団法人上尾市医師会
**課程**｜3年課程
**1学年定員**｜40名

1年次 | 9〜3月 | 専門分野 老年看護学 | 老年看護演習［旧］ | 1単位（15時間）のうち15時間

## 事例1 近隣団地に居住する独居高齢者宅の定期訪問
### 〜地域の高齢者とつながり、理解し、暮らしに寄り添う看護を学ぶ〜

**教育事例の紹介**　老年看護演習において、学生2人1組での学校隣接団地に居住する独居高齢者の訪問活動を行っている。1年次の9月から月1回、1回15〜30分、全6回の訪問である。訪問する高齢者は60〜90歳代の独居（昼間一人となる人を含む）で、団地自治会に紹介いただいている。2009年度が初年度で、2022年度は14年目となる。

高齢者宅を訪れた学生は、挨拶の後、既習の“老年期の特徴”を踏まえたコミュニケーションを実践する。「健康について」「玄関付近に飾られている写真や花について」「季節について」「ご家族について」「趣味やこれまでの生活について」など、訪問対象に合わせたさまざまな話題を展開する。学生は高齢者とのコミュニケーションを通じて、地域で生活する高齢者の身体的・精神的・社会的側面の理解を深めると同時に、礼節および対象に合わせたコミュニケーションの実際を体験学習することができる。次回の訪問日程は、訪問の都度、学生が先方と相談して設定する。

この訪問活動を通して、「若さに接する機会が楽しみです」「若い世代との交流をきっかけに新しいことに興味を持った」など、高齢者からの肯定的なフィードバックを頂け、「地域住民の役に立つ、立派な看護師になりたい」と感じる学生も多い。また、住居に隣接する看護学校を、コミュニティの一部として身近に感じてもらう効果も生んでいる。訪問後に学びを記録し、学内発表会で訪問活動を振り返り、学生間で共有して学びを深めている。コロナ禍で訪問が制限された時期にも、電話訪問に変更してこの活動を継続した。

本活動で1年次に学んだ地域住民理解については、2年次の在宅看護演習でさらに深く学習できる教育課程を構成している。

**関係団体、組織等**｜上尾市高齢介護課、社会福祉協議会、地域包括支援センター、H団地自治会、S団地自治会。

### 学生の学び

①若々しく活動的に暮らす高齢者像、健康に対する意識の高さ、人的交流により生活の豊かさを増す姿を学び、学生が持つ高齢者像は変化する。一方、転倒や上気道炎などにより高齢者の生活は大きく変化することも知る。高齢者の特徴の実際を間近で観察し、コミュニケーションの工夫を実践できる。
②学生が知りたいことを尋ねるのではなく、話を聴く態度を示すことで、高齢者が生活や人生を語ることを学習する。
③訪問活動の継続による関係性変化を実感できることは、学生の喜びにもなっている。
④授業の最終発表会での訪問事例の共有によって高齢者の個別性を理解し、個別性尊重の意義を見い出すことができる。

### 地域住民の様子・反応など

- 活動への協力を自身の社会的役割と位置づけ、看護学生の訪問を引き受ける高齢者が多い。
- 肯定的な感想（「教育事例の紹介」参照）が多数である。

**費用発生について**｜初回訪問時に高齢者・関係機関担当者・高齢者宅を案内するボランティア協力者に渡すお茶など：3,000円程度。

### 「地域住民との連携教育」のねらい

学校の隣接団地に居住する高齢者宅を定期的に訪問することで、老年期にある対象との関係を構築するためのコミュニケーションの基礎を習得する。さらに対象者の身体的・精神的・社会的状況を知り、生活に及ぼす影響について考察する。

### 科目目標

1. 高齢者との関係構築のためのコミュニケーションの基礎を理解し、実践することができる。
2. 訪問する対象者に関心を持ち、誠実に向き合い相手を尊重する態度で接することができる。
3. 日常生活の様子から、高齢者の身体的・精神的・社会的状況を総合的に知り、生活を理解することができる。

### この科目で「地域住民との連携教育」を実施する背景や理念の紹介

現在、わが国は、医療の高度化・多様化、人口の少子高齢化の進展に伴い、人々が住み慣れた地域で、人生の最期まで自分らしい暮らしを継続することを目指している。看護基礎教育では、社会の変化に対応した教育活動を実現することが大きな課題となっている。学校の教育理念「人々が健康な生活を営むために必要な、地域医療の担い手として活躍できる質の高い看護師を育成する」の実現のために本科目を設定している。

### 「地域住民との連携教育」の実施に至るまでの経緯

2008年に上尾市の高齢介護課に、看護学生の訪問活動の趣旨・方法を説明し、協力依頼をした結果、学校隣接団地の自治会長を紹介していただき、訪問の承諾を得ることができた。上尾市社会福祉協議会と連携して準備を進め、2009年9月、訪問活動を開始、以後、現在まで継続している。

### 3つの「地域住民との連携教育」を行う科目の配置とディプロマ・ポリシー

| | 1年次<br>[老年看護演習]<br>独居高齢者の<br>定期訪問活動 | 2年次<br>[在宅看護演習]<br>独居高齢者の<br>訪問活動継続<br>+プロジェクト学習 | 3年次<br>[災害看護]<br>地域住民参加型の<br>避難所設営・運営訓練 |
|---|---|---|---|
| DP1 対象を理解する能力 | ○ | – | – |
| DP2 人間関係を築く能力 | ○ | – | – |
| DP3 看護を提供するための確実な知識・技術 | ○ | – | ○ |
| DP4 看護実践能力 | – | ○ | ○ |
| DP5 地域で活躍できる能力 | ○ | ○ | ○ |
| DP6 看護を創造する能力 | – | – | ○ |

### 3つの「地域住民との連携教育」の配置について

1年次の［老年看護演習］、2年次の［在宅看護演習］の履修を経て、3年次の［災害看護］では、1・2年次の経験に加えてすべての臨地実習の経験を生かし、地域住民のイメージを明確に持って、避難所設営・運営訓練で災害看護を実践的に学んでいる。この一連の教育によって、学生は本校所在地域の特性や隣接する団地に居住する地域住民の生活理解を深めている。これらの教育活動に協力する地域住民は、看護学生との交流を楽しむとともに、自らの暮らしを省みる機会、避難所環境の理解や防災知識の確認の機会を得ている。

上尾看護専門学校では、授業や実習の一環として種々のボランティア活動を行っている。2019年度のボランティア活動を紹介する。

- H団地　夏祭り2日間（各日5名参加）
- S団地　B級グルメ大会（4名参加）
- S団地　カフェ（3名参加）
- 上尾市　シティーマラソン（10名参加）
- 上尾市　総合防災訓練：トリアージ場面の被災者役（5名参加）
- 地域の福祉会主催のチャリティーコンサート（8名参加）
- 地域の福祉会主催のバザー（6名参加）

### 同様の連携教育を導入・展開したい他校へのメッセージ！

本校では、学生がH団地夏祭りで縁日のお手伝い、S団地の住民が集うカフェのサポート・血圧測定、社会福祉協議会主催のチャリティーコンサート開催時のサポートなどを行うように教員が調整しています。2018年には、上尾市平方小学校で行われた上尾市総合防災訓練に、学生が被災者役として参加したこともあります。

ボランティア活動などを通して地域の方々に看護学校を知っていただく機会を設け、顔の見える関係づくりをすることでよいアイデアが生まれると思います。

### 取材メモ

上尾看護専門学校の近隣地域は、1965（昭和40）年ごろより大規模住宅団地などの宅地開発が進み、人口が急増した地域です。開発後には生活関連施設、商業施設なども豊富でしたが、半世紀を経た今、住民の高齢化、世帯の減少などによって団地の空き部屋が多くなっています。その結果、団地敷地内からATMや店舗が撤退するなど、多様な生活の不便さが生じています。この連携教育は、高齢者の孤立や暮らしの不便さといった地域課題を踏まえた上で近隣団地の独居高齢者宅の定期訪問を行う教育活動です。各学校所在地にはそれぞれの地域特性があると思いますが、本事例をヒントに、各校がそれぞれの地域特性にフィットした「地域住民との連携教育」を検討するとよいと思います。

2年次　4～7月　専門分野 地域・在宅看護論　在宅看護演習［旧］　1単位（15時間）のうち15時間

## 事例2　独居高齢者宅の継続訪問活動に結び付けたプロジェクト学習
### ～住み慣れた地域での“その人らしい生活”のための提案～

### 教育事例の紹介

1年次の老年看護演習で訪問した高齢者の訪問を、2年次の4～7月に4回、授業の空き時間や昼休みを活用して継続実施する。校内の在宅看護演習の授業時間に、住み慣れた地域でその人らしく生活するための提案を考える。対象の特徴やネットワーク、資源の活用状況をグループで共有し、1グループ（4～6名）で1つの架空事例を作成する。作成した架空事例の個性（強みや課題などを含む）を抽出し、その人らしい生活の実現のためのビジョンとゴールを設定し、生活に即したアイデアや解決策を検討して提案をまとめるプロジェクト学習を実施している。

学習発表会には、訪問した高齢者、関係団体や諸機関の方々を招き、学生の提案を地域に公表・発信している。聴講者からフィードバックを受けることで学習を深める工夫をしている。この外部発信は、地域の環境改善のきっかけともなっている。

※コロナ禍では、感染状況に応じて訪問を電話に変えた。発表会は学生・教員のみで実施した。

**関係団体、組織等**｜上尾市高齢介護課、社会福祉協議会、地域包括支援センター、H団地自治会、S団地自治会。

### 学生の学び

①訪問活動を通して、対象の変化や困りごとが生活に及ぼす影響を理解できる。
②架空事例作成過程で、生活が多くの要素に支えられていることを把握する。事例作成を難しく感じる学生も多いが、個人特性や生活を具体的に理解しないと生活に即した根拠ある提案ができないため、試行錯誤して高齢者の個別性を理解する。
③グループ学習の形態をとるため、意見交換や役割分担のスキルが上達する。
④発表会への外部招待を行った年度の学生は、地域住民や関係諸機関の方々との意見交換を通して、看護や予防活動が地域社会と絡んで成立していることを理解できる。

## 地域住民の様子・反応など

- 1年次後半から2年次前半にわたる10回の継続訪問で、**学生と高齢者の関係性**が構築されている。
- 最終訪問では、多くの「終わってしまうのは残念」「もっと来てほしい」という声が聞かれる。また、「(看護学生の訪問があるので) スケジュール管理を意識するようになった」など、学生との**交流が生活の糧**になっていることがうかがえる感想を頂くこともある。

**費用発生について**｜発表会開催時のお茶代など（高齢者・関係機関担当者用）：3,000円程度。

### 「地域住民との連携教育」のねらい

学校の隣接団地で生活する高齢者との関わりを通して、生活の視点を養い理解を深める。また、対象者が持つ地域でのネットワークや資源を知り、住み慣れた地域でその人らしく生活を営むための（ビジョンとゴールを設定し）提案を通して、考察する。

### 科目目標

1. 対象者の生活状況を理解し、強みと課題について理解できる。
2. 対象のよりよい生活のための提案を考えることができる。
3. 対象者を支える地域包括ケアシステムについて考察することができる。

### この科目で「地域住民との連携教育」を実施する背景や理念の紹介

事例1と同じ

### 「地域住民との連携教育」の実施に至るまでの経緯

1年次の老年看護演習で学んだ高齢者および地域理解、人間関係構築力に基づき、看護を提供するための知識を増して、地域で活躍できる能力を培うことができるように訪問活動に継続性を持たせた。

### 取材メモ

1年次からの訪問に続く、2年次の在宅看護演習での「架空事例作成・課題抽出・解決策提案」という一連のプロジェクト学習継続により、学生はリアリティーを帯びた架空事例を作成できているようです。地域住民の協力を教育に最大限に活用する教育者の心意気を感じました。

3年次 ｜ 4～11月 ｜ 専門分野 看護の統合と実践 ｜ 災害看護[旧] ｜ 1単位(30時間)のうち8時間

# 事例3 地域住民が避難者役を務める避難所設営・運営訓練
## ～“地域住民のもしも”に備える～

### 教育事例の紹介

「災害看護」で、災害の発災直後からその後の避難所生活を支援するための基礎的知識と実践方法の学習、グループワークの後に、地域住民参加型の「避難所設営・運営訓練」実践演習を行っている。

訓練では、地震発生を設定し、校舎1・2階フロアに避難所を開設する。学生は「本部・受付」「救護班」「衛生班」「運営・管理班」を分担で担当する。

**1・2年次に訪問活動を行ったH団地・S団地に加えO団地に居住する約20名に避難者役で参加していただく。不安や急な体調不良などあらかじめ設定した役柄の担当を依頼している。**訓練中、学生は避難者役の訴えや状況に合わせてコミュニケーションをとり対応する。終了後のリフレクションにも地域住民が参加し、課題を抽出して演習終了としている。

地域住民との連携・協力のもとで行うこの教育活動は、学生の演習として教育効果が高いと同時に、**看護学校による地域貢献**の一つにもなっている。

**関係団体、組織等**｜H団地自治会、S団地自治会、O団地自治会、上尾市危機管理防災課。

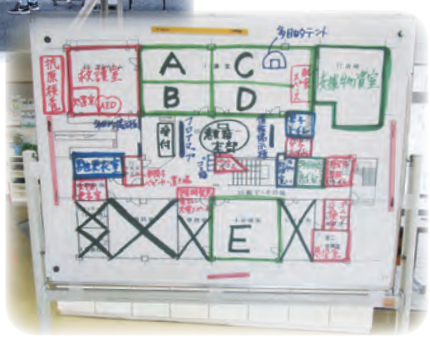
### 学生の学び

①災害発災直後からその後の避難所生活を支援するための基礎的知識と看護の役割を実践的に学ぶことができる。
②グループワーク形式の訓練前学習で、「本部・受付」「救護班」「衛生班」「運営・管理班」の校舎1・2階フロアでのスペース割り、各班の役割分担と連携・協力方法などの避難所設営方法などを検討・決定する。避難所で発生する問題を想定して対応方法を考える。また、看護の視点で、避難者の年代・身体の状態・社会的背景に合った避難所環境の整備を行う(一部の学生は、避難者役にもなる)。
③年齢・性別・家屋の状況（全壊・一部損壊など）・家族の状況（家族構成や所在）・持病の有無や身体の状態を示した事例の役割になりきった地域住民の不安や急な体調不良などの訴えを加味したコミュニケーションや対応を学ぶ。
④避難者個々の状況に応じたコミュニケーション方法や情報伝達・連携の必要性、避難所の役割について学ぶ。
⑤看護学生の育成をサポートしてくださる地域住民の温かさを実感する機会になっている。

## 地域住民の様子・反応など

- 避難所環境の理解や防災知識の確認の機会になっている。
- 地域での人的交流の機会になっている。
- 看護学校の校舎に足を踏み入れることで、よりいっそう看護学生に親しみを感じてくださり、期待感を抱いてくださっている。

演習受付




校内配置図

簡易ベッド体験

地域住民に簡易トイレの説明をする学生

### 「地域住民との連携教育」のねらい

災害看護の基礎知識を理解し、防災・減災および災害時の対応と看護に必要な基礎的知識とその実践を学ぶ。

### 科目目標

1. 「災害サイクル」における看護者としての基礎的知識を習得する。
2. 災害が被災者の生活や健康に及ぼす影響を理解する。
3. 地域住民とともに避難所設営・運営の訓練を実践し、地域での災害看護を理解する。
4. 国際化する地域社会を見据え、外国人住民を理解し、災害時・緊急時・医療場面などにおける看護師としての支援の在り方を学ぶ。

### この科目で「地域住民との連携教育」を実施する背景や理念の紹介

事例1と同じ

### 「地域住民との連携教育」の実施に至るまでの経緯

2011年、教員と学生が、従来から高齢者訪問活動による交流があったＨ団地の防災訓練に参加したのが始まりである。

その後、Ｏ団地からも依頼があり、ご参加いただいた。2020年はコロナ禍のため、学内での避難所設営・運営訓練に変更し、学生と教員のみで実施した。翌2021年、Ｈ･Ｏ団地自治会長を通して、学内演習（避難所設営・運営訓練）への地域住民の参加協力を募り、避難住民役として20名にご参加いただいた。2022年は、さらにＳ団地の住民が加わり、計20名参加で学内開催を実施した。

地域住民とリフレクション

### 同様の連携教育を導入･展開したい他校へのメッセージ！

コロナ禍以前は、本校学生はＨ団地とＯ団地の防災訓練に参加しており、その際に災害発生時に役立つ情報をプレゼンテーションしていました。これが住民のニーズと合致し、現在の「避難所設営・運営訓練」につながっています。住民の声を聴き、地域住民のニーズを把握して、地域のニーズに合った連携教育を検討されるとよいと思います。

**費用発生について**｜参加者へ提供するお茶など：合計3,000円程度。

### 取材メモ

この事例は、災害看護の授業での「避難所設営・運営訓練」において地域住民に避難者役を担っていただく教育プログラムです。通常、地域住民に状況設定に合った役柄を演じていただくためには、準備・事前打ち合わせ、当日説明など、かなり時間を要しますが、この事例では、継続的に関わりを持つ学校近隣の住民にご協力いただいているため、初対面よりも“やりやすさ”があるのではないかと感じました。地域住民の参加は演習に緊張感を生み、リアリティーを増す効果がありますし、地域住民が連帯感を深める効果もあると思います。地域住民と共に行う「避難所設営･運営訓練」は、学生の教育を目的とする演習でありながら、地域貢献にもなりますので、多くの学校で展開できるとよいと思います。

# 相馬看護専門学校
福島県相馬市

**設置主体**｜相馬地方広域市町村圏組合
**課程**｜3年課程
**1学年定員**｜40名

1年次 | 4〜5月 | 基礎分野 | 報徳仕法と相馬地方の風土・特徴［新］ | 1単位（15時間）のうち6時間

## 事例 4
## 相馬の暮らしと人を知る「市内バスツアー」と「談話会」
### ～相馬に伝承される“至誠（まごころ）”を持った看護実践者の育成～

**教育事例の紹介**　相馬看護専門学校では相馬地方に伝わる「報徳仕法」の1つであり、学校の教育理念にも据える「至誠の精神」を学び、相馬地方の歴史・文化、人々の暮らしを深く理解することを目指して、基礎分野の「人間と生活、社会の理解」に科目「報徳仕法と相馬地方の風土・特徴」を設定した（2022年度新設科目）。

地域住民との連携を活用した教育は、第2・3回の授業（市内バスツアー）と第4回の授業（地域住民との談話の機会）である。市内バスツアーでは、市内に点在する名所・史跡・行政機関、保健医療福祉施設などを見学（コロナ禍では一部車窓見学）する。2022年度は、相馬市防災備蓄倉庫、伝承鎮魂祈念館（慰霊碑参拝、震災映像記録閲覧）、浜の駅松川浦（見学・買物）、和田観光いちご園（いちご狩り）をめぐった。地域の産業・食文化を体験する目的で、買い物やいちご狩り体験も組み入れた。方言を話す地域住民との交流の機会でもある。

第4回の授業は、相馬市中央公民館主催の教養教室「中央シルバー塾」の会員との「談話会」である。ご来校いただいた地域住民1人につき5人前後の学生が囲んで話を聴く。学生は、方言を交えてのフリートーク（内容の多くは、昔の相馬地方の様子・暮らし・体験談など）を大変興味深く傾聴し、地域理解を深める。この学習体験を経て、地域住民への敬いの気持ちが芽生え、礼儀にかなう態度や行動の育成にもつながっている。

**関係団体、組織等**｜バスツアーの各見学施設（相馬市防災備蓄倉庫、伝承鎮魂祈念館、浜の駅松川浦、和田観光いちご園）、相馬市中央公民館主催の教養教室「中央シルバー塾」。

### 学生の学び

①地域の歴史や風土に触れ、住民がどんな生活や経験をし、どんな考えを持っているかを知り、価値信条やその背景にあるものに思考を巡らすことができる。
②市内バスツアーは、地域包括ケアシステム関連施設を見て知る機会となる。
③核家族化などの影響で、年配者との会話の機会が乏しい看護学生にとって、初対面の年長者と言葉を交わす貴重な機会である。戸惑いや困難さを感じる学生もいるが、この体験は自己のコミュニケーションを振り返る絶好の機会である。

### 「地域住民との連携教育」のねらい

相馬地方に根づく「報徳仕法」の教え（次頁に資料あり）を学ぶ。
相馬地方に住む人々とのコミュニケーションを通し、風土・文化・歴史などの特徴を理解する。

### 科目目標

同上

### この科目で「地域住民との連携教育」を実施する背景や理念の紹介

人々のこころに寄り添う看護師育成のためには、地域住民を多角的に理解する必要がある。相馬地方に根づく「報徳仕法」の教え、教育目標にある「至誠」の精神を学び、相馬地方の歴史や文化・方言などに触れ、対象に合わせたコミュニケーションと援助について考えることを意図して本科目を設定した。

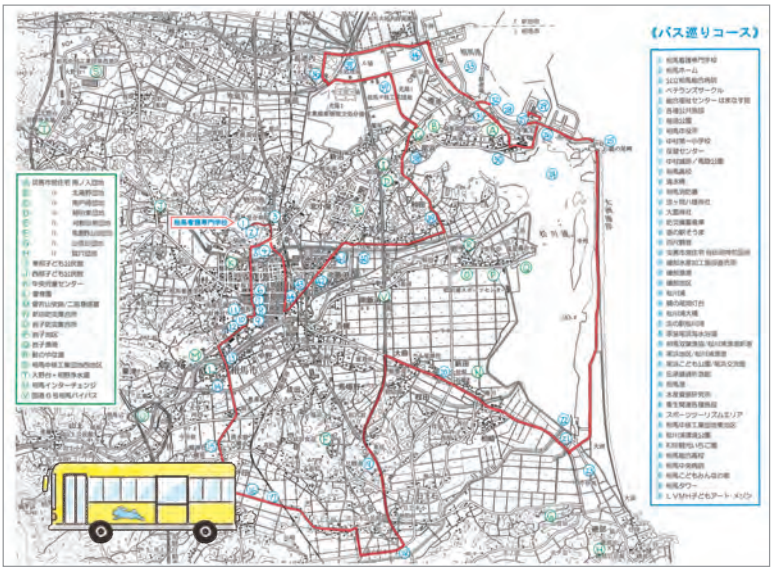
### 「地域住民との連携教育」の実施に至るまでの経緯

看護の対象である地域の生活者を支えるためには、その暮らしや考え方の根源にある風土・特徴を理解する必要があることからこの教育内容となった。

《日 程 表》

| | |
|---|---|
| ① 相馬看護専門学校 | 【出発】9:00 |
| ↓ | |
| ⑦ 相馬市防災備蓄倉庫 | 【立寄り】9:20 ～ 9:30 |
| ↓ | |
| ⑧ 浜の駅 松川浦 | 【休憩】10:05 ～ 10:20 |
| ↓ | |
| ⑨ 伝承鎮魂祈念館 | 【見学】10:30 ～ 11:00 |
| ↓ | |
| ⑩ 和田観光いちご園 | 【いちご狩り】11:20 ～ 11:50 |
| ↓ | |
| ① 相馬看護専門学校 | 【到着】12:05 |

相馬市内バスツアーのコース



## 地域住民の様子・反応など

- 震災の記憶を伝えるよい機会だと捉えている。
- 看護学生が、相馬地方で起こった災害に関心を寄せることを望ましいと考え、ご助力くださっている。
- 若い看護学生が地元の看護師養成所で学んでいることを知り、多くの人が安心感や心強さを覚えている。

相馬震災遺構見学

### 同様の連携教育を導入・展開したい他校へのメッセージ！

カリキュラム編成の科目設定の段階で、「相馬地方へのこだわりが強いのではないか」と懸念する意見もありましたが、地域への深い理解がそこで暮らす人々の真の理解につながると考え、「相馬地方」を深く学ぶ教育内容を作成しました。地域理解は看護の心の育成にもつながることを、本校から発信します。

### 「報徳仕法」
### 相馬市の住民に継承されるマインド

江戸時代後期、相馬中村藩が天明・天保のききん後の衰廃回復のために採用した「興国安民の法（報徳仕法＝御仕法）」は、至誠・勤労・分度・推譲という基本理念をもとに、経済の復興と安定、民情を豊かにするというもので、その精神は市民憲章にもうたわれ、今なお市民の心の支えとして生きている。

**至誠**…こよなく誠実なこと
**勤労**…心身を働かせて仕事に励むこと
**分度**…自分の経済力に応じた生活の限度を決めること
**推譲**…後世へ譲り渡すこと

参考　相馬市ウェブサイト▲

### 相馬の方言

医療者が方言の持つ微妙なニュアンスを理解できると、地域の方の心の機微をくみ取ることができます。医療者が方言を話すことで、患者などの心をほぐす効果もあります。

ばっぱ、なじょした。がおってんでねぇが。

ばあちゃん、どうしたの。
具合が悪いんじゃないか？

おら、ゆんべっから、あんべわりんだ。

私、昨夜から具合が悪いのよ。

んだごんちゃ医者さいんか、せでってやっから早くやーべ。まだまんにゃうから。

それなら医者に行こうか、連れて行ってあげるから早く行こう。まだ間に合うから。

やんだ、おら、さすけね。あっぱとっぱしねで。じっち、うっつぁしから、あっち行ってでけろ。

いやよ、私は大丈夫だから。慌てないで。
おじいさん、うっとうしいから、あっちに行ってて。

### 科目名称「報徳仕法と相馬地方の風土・特徴」の授業内容

| | 授業構成 | 授業の内容 |
|---|---|---|
| 第1回 | 相馬地方の環境、産業、行政とそこに暮らす人々<br>座学 | 相馬地方の環境、産業、行政とそこに暮らす人々に関して学習する。 |
| 第2・3回 | 【市内バスツアー】<br>相馬地方って、どんなところ？<br>学外で地域住民と交流 | 市内の随所で方言に触れる。<br>産業・食文化体験（買い物やいちご狩り）中に、地域住民と交流する。 |
| 第4回 | 【中央シルバー塾会員と談話】<br>相馬地方の人々と話そう！<br>学内に地域住民を招いて交流 | 市の公民館主催の教養教室「中央シルバー塾」会員に来校いただき、地域住民の普段の暮らしに関する方言でのフリートークを聞かせていただく。 |
| 第5回 | 相馬地方の概要、歴史、文化<br>座学 | 相馬地方の概要、歴史、文化に関して学習する。 |
| 第6回 | 報徳仕法の教えについて<br>座学 | 相馬地方に根付く「報徳仕法の教え」に関して学習する。 |
| 第7回 | 災害からみる相馬地方<br>座学 | 相馬地方の災害に関して学習する。 |

科目担当講師：長く市政に携わり、相馬地方を知り尽くしている市役所から出向の学校の事務長。

「中央シルバー塾」会員と談話

**費用発生について**｜貸し切りバス料金：1学生あたり2,000円程度（見学費用は学生負担）。
中央シルバー塾：謝金なし。
地域住民来校の送迎費用：公民館活動の一環で中央公民館による相馬市のマイクロバスと運転手の手配があり、不要。

### 取材メモ

- アフターコロナには、相馬市災害復興住宅『井戸端長屋』訪問を計画中とお聞きしました。震災で独居となった高齢者が住む市営住宅で互助的に関わり、そこで生活する人々を継続訪問して至誠（まごころ）を交わす体験は、学生が真の看護を追求するきっかけになると感じました。
- 医療場面で方言は重要な役割を果たします。地域の方言と標準語を使い分ける住民も多いそうですが、医療者が方言の持つ微妙なニュアンスを理解して聴き取ることで相手の心の機微をくみ取ることができ、医療者が方言を話すことで患者や家族など、医療・看護の対象者の心をほぐす効果もあることでしょう。地域住民の方言に触れるこの連携教育は、地域住民から慕われる看護師を育成する教育です。

# 泉佐野泉南医師会看護専門学校
大阪府泉佐野市

**設置主体**｜一般社団法人泉佐野泉南医師会
**課程**｜3年課程
**1学年定員**｜40名

1年次 | 4月～ | 基礎分野 | 泉州地域学［新］ | 1単位(15時間)のうち14時間

## 事例5 泉州で活躍する7人のプロフェッショナルから学ぶ「泉州地域学」
### ～地域を支える人から地域の誇りを学ぶ～

**教育事例の紹介**　泉州地域を深く知るために、伝統、産業、文化などの各プロフェッショナルに依頼し、それぞれの仕事や役割を通して地域についてレクチャーを受ける。学生は地域を支える方の生の声を通して、地域を詳しく学ぶ。

初回授業の副学校長（看護職）によるオリエンテーションを経て、2回目以降の授業では、建築士（まちづくり隊長）を含む7人のプロフェッショナル（以下、講師）が順に登壇し、泉州地域の特徴およびそれぞれの職業に関連する講話を行う（別表参照）。いずれも地域に特化した興味深い内容で、スライドなどの教材づくりは講師おのおのがしてくださった。講話の内容について学校から細かな要望などは出さず、お任せしている。学生が授業ごとの学習内容をレポート（A4、1～2枚）にまとめてウェブ上で提出すると、講師はコメントをつけて返却してくださる。評価は教員が行っている。

地域住民に講話を依頼する場合、講話に不慣れであることも多く、準備段階で相談があった際は丁寧に応じること、不安をフォローすることが大切である。授業中、講師が言葉に詰まる場合があったら、教員が質問を挟んで間をつなぐなど、心理的な負担に配慮するとよい。

5回目の授業では、校外に出てタオル工場を見学する。タオルは我々の日常生活や医療施設でも欠かせないものだが、1887（明治20）年に国内初のタオル工場が創始されたのが泉佐野である。現在、泉佐野のタオルは“泉州タオル”の名称で、高品質タオルとして全国的に知られている。学校ではこれに着目し、学校オリジナルタオルのデザインコンペ（プロジェクト学習）を行っている。入学直後に開始する本科目で、学生間の親睦を図りながら地場産業に親しむことがねらいである。人気投票を行い、1位となったデザインで学校オリジナルタオルを発注し、オープンキャンパス来校者に配布することにしている。昼休みなどの時間を活用して、グループごとに「どんなデザインにしようか?」と楽しそうな表情で熱心に検討する姿が見られる。科目内でデザイン考案にあてる時間は約60分である。

ちなみに、1年次5月開始の「家族・泉州文化と多様性」（授業と演習の組み合わせ）では泉州地域のフィールドワークを行い、地域住民の暮らしや健康に関連する自助・互助を学習する。これは「泉州地域学」と連続するものである。2年次の「老年看護学Ⅱ」での市民参加型多職種連携研修会への参加も「泉州地域学」と連続性のある教育内容である。

**関係団体、組織等**｜7人のプロフェッショナル（講師）：建築士（まちづくり隊長）、泉佐野警察署の警察官、水なす漬物店経営者、泉州タオル会社代表者、郷土史家（泉州弁の語り部）、関西航空少年団の団長、だんぢり愛好家（福祉サービス提供会社代表）。

### 学生の学び

①泉州文化の特徴や住民の暮らし、地域の仕事を知る。
②泉州地域で活躍するプロフェッショナルの文化継承への思いを知り、地元愛を共有する。
③医療とは別職種のプロフェッショナルを理解する。
④患者を患者としてではなく、社会を支える人として捉える視点が養われる。
⑤人の健康には、地域の健康が大事であることを学ぶ。
⑥地域住民の看護師への思い・期待に触れる。

タオル工場見学

### 「地域住民との連携教育」のねらい

泉州の伝統、産業、文化、人々を理解する。
泉州地域の伝統、産業、文化などのプロフェッショナルをお招きし、それぞれの仕事や役割を通して地域についてお話しいただき、地域を支える方の生の声を通して、地域を詳しく学ぶ。

### 科目目標

泉州地域の文化と生活の理解を深める。

### この科目で「地域住民との連携教育」を実施する背景や理念の紹介

教育目的「看護師に必要な知識・技術・態度とともに、豊かな人間性と専門職者としての主体性と国際的視野を持って、地域社会の総合保健活動に貢献できる看護の実践者を育成する」

### 「地域住民との連携教育」の実施に至るまでの経緯

卒業生の8割が泉州で就職するため、看護基礎教育において泉州の理解は必須であることから、2022年新カリキュラム始動に伴い、基礎分野の「人間と生活・社会の理解」に「泉州地域学」を科目配置した。この科目の設定にあたり、多数の外部講師に相談したところ、老年看護学方法論Ⅲの担当講師（グループホーム経営者、看護師）から、地域活性化を目指したNPO活動に携わる建築士（まちづくり隊長）の紹介があった。まちづくり隊長は泉佐野市出身で、“泉佐野を、若者を呼び寄せるくらい魅力的なまちにしたい”という熱意を持つ方である。学校の教育方針と科目の意図をご相談したところ、NPO活動でつながりがあり地域で活躍する6名のプロフェッショナルを紹介してくださり、「泉州地域学」の講師陣（計7名）が決定した。

## 地域住民の様子・反応など

- 看護学生について、「人のためになりたいと思う貴重な人材で、学生が一生懸命行うプロジェクトは涙が出るほど感動する」「次年度もぜひ継続を」「看護師を目指す学生がいたら、こちらの学校をお勧めします」と、学校の教育に共鳴したコメントが聞かれた。
- 「まちづくりに関するNPO活動への学生の認知度を上げることができた」と喜びの声があった。
  例）地域住民が主催するオーガニックマーケットの開催イベントのボランティア募集など。
  ※これは、学校のボランティア単位（6時間／年）の選択肢の1つとしている。
- 授業の計画や資料作成、レポートへのコメント記入、タオル工場見学の調整なども快諾してくださった。

タオル工場のコットンの木の前で

### 2022年度に実施した「泉州地域学」の授業概要（各2時間、初回のみ1時間）

| 各授業の講師 | | 主な講義内容 |
|---|---|---|
| 1回目 | 副学校長（看護職） | 全体オリエンテーション：文化とは、多様性・国際性・看護の質の関係、看護の倫理綱領、多様性を高める、価値判断の源を一考する、よりよい看護提供のために文化的背景を理解する |
| 2回目 | 建築士（まちづくり隊長） | 泉州地域の町づくりと住まい |
| 3回目 | 泉佐野警察署の警察官 | 泉州地域の治安と防犯 |
| 4回目 | 水なす漬物店経営者 | 泉州地域の食文化 |
| 5回目 | 泉州タオル会社代表者 | 泉州地域の産業：泉州タオルを学ぶ<br>タオル工場見学：1グループあたり30分、残り時間はグループワーク |
| 6回目 | 郷土史家（泉州弁の語り部） | 泉州地域の文化：言葉、表現 |
| 7回目 | 関西航空少年団の団長 | 泉州地域の産業：関西国際空港 |
| 8回目 | だんぢり愛好家（福祉サービス提供会社代表） | 泉州地域の文化：風習、祭り |

この学習をもとに【プロジェクト学習】を行う

建築士（まちづくり隊長）は、全講義に参加し、ウェブアプリを利用して各授業内容の講師間での共有、学校との連絡調整、学生レポート対応など、本連携教育のコーディネート全般を担う。

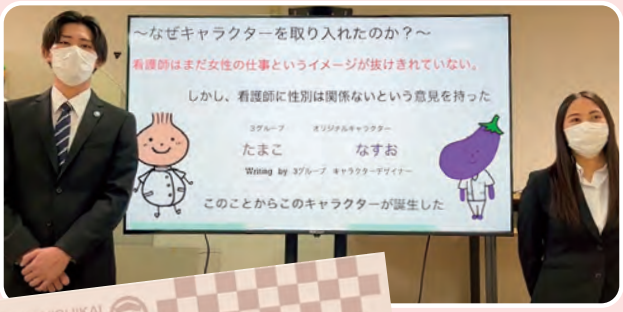
### 泉州ってどこのこと？？

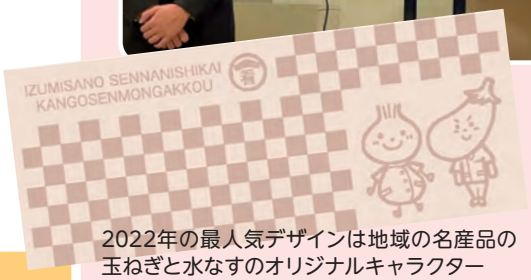
泉州とは、大阪府の南西部にあたる堺市、高石市、泉大津市、和泉市、忠岡町、岸和田市、貝塚市、熊取町、泉佐野市、田尻町、泉南市、阪南市、岬町の13市町（9市4町）のことを指す。

**費用発生について**｜講師謝礼：計90,000円（1回15,000円×6、国家公務員を除く）。
タオル（300枚）製作費：94,710円。

### 【プロジェクト学習】タオルデザインコンペの概要

①説明は初回授業で行う。オープンキャンパスで配布する「学校オリジナルタオル」のデザインコンペを実施し、最人気デザインでタオルを300枚製作すること、プレゼン動画のコンペも行い、最人気動画をつくったグループはそのタオルが進呈されることを伝える。グループ（1グループ6人）はくじ引きでランダムに決定する。
②「泉州地域学」5回目の授業時間内で、グループごとに30分程度のタオル工場見学を行う。見学前後の時間は、タオルデザインに関するグループワークにあてる。
③グループでタオルデザイン案と3分以内のプレゼン動画を作成し、ウェブ上にアップロードする。多くの学生はこのプロジェクト学習を楽しみ、昼休みや放課後にも集まって企画の話し合いや作業を進める。新入学すぐの時期の仲間づくりにも役立っている。全学生所有のタブレットの画像編集アプリを活用する学生が多い。
④各自が好きな時間にウェブ上に共有したタオルデザイン案やプレゼン動画にアクセスする。
⑤アンケートアプリを使った匿名投票を行う。2・3年生、教職員、「泉州地域学」の7人の地域住民講師も自由参加で投票する。
⑥最人気デザインタオルは発注し、オープンキャンパス来校者に配布する。
⑦プレゼンの最多投票グループの学生にはタオル進呈の特典を設け、楽しく取り組めるようにしている。




2022年の最人気デザインは地域の名産品の玉ねぎと水なすのオリジナルキャラクター

**PRポイント**
- 吸水性
- 地域の環境への配慮
- オーガニックコットン
- SDGs

### 同様の連携教育を導入・展開したい他校へのメッセージ！

副学校長　西田 好江先生より

本校では、「教室（学びの場）を地域に出そう」という意図を持って、できるだけたくさんの地域の方々と触れ合うことで、地域で暮らしている人々から教えてもらい育ててもらえるようにさまざまな工夫をしています。そんな中、新カリキュラムに向けて、住民の方々の人生や生活そのものが教材になると考え、教材としての外部講師になってくださる人を探している時に、地域発展のために若者へのかかわりが重要と考えている**まちづくり隊長**と出会いました。まちづくり隊長の仲介で、さまざまなプロフェッショナルを校内に招致できました。看護師は看護のプロではあるがその他は素人ということがあるように、私たちが出会う患者さんは何らかの形で社会参加されている方々で、そのような視点で教員自身も地域の文化や産業について一緒に学びなおしたいという思いで地域の方々にお願いしました。このような授業は、全国どこの看護師養成所でも実現可能だと思います。これからの時代に沿った新しい看護師育成に対する情熱を、ぜひ地域の皆さまにお伝えください。地域側でも、看護師を目指す若者とつながりたいと思ってくださっている人がいて、トンネルの右と左から穴を掘っていると真ん中で出会うような運命的な出会いが日本全国の地域で生まれると思います。

### 取材メモ

$H^2S$（Happy・Humor・Smile）を重んじて教育運営にあたり、10年後を見据えたビジョンを有する教員から看護基礎教育に強い情熱と思いを感じました。この情熱と思いが地域住民の活力とうまくつながり、この科目の実現に至ったと感じました。

# 福岡水巻看護助産学校
福岡県遠賀郡

**設置主体**｜学校法人巨樹の会
**課程**｜3年課程
**1学年定員**｜80名

1年次　前期　基礎分野　地域の暮らし［新］　1単位（30時間）のうち12時間

## 事例 6　地域を多角的に捉えるための14カ所のフィールドワーク
### ～地域住民の多様な活動に加わり、地域の暮らしを理解する～

**教育事例の紹介**　2022年度の新カリキュラム始動に合わせ、地域の暮らしと健康問題を学ぶことを目的に新設した科目「地域の暮らし」で学校所在の遠賀郡（遠賀町、岡垣町、水巻町、芦屋町）、隣接する中間市および北九州市内のエリア内の14カ所でのフィールドワークを実施した（次頁参照）。

1年次の学生は8月中に2日間のフィールドワークを行う。1日目は、主に活動見学とインタビューを行う。この事前準備として、学生は科目担当講師の指導下でインタビューガイドを作成する。1日目から少し間隔をあけた2日目には、各フィールドの利用者や参加者と活動を共にする。両日共に専任教員が各フィールドに帯同して学生の様子を見て、声かけなどのサポートを行う。計2日間、学生は各フィールドで地域住民から説明を受け、活動を共にしながら、地域住民の暮らしや健康観などに触れる。

フィールドワーク終了後、グループごとに、フィールドで学んだこと、訪ねた地域の地理的特徴、生活状況、自助・互助の在り方など、広く見たこと・調べたことを整理してレポートを作成する。このレポートは終講時試験を兼ねる。

フィールドワークの約2週間後に、お世話になった地域住民を招いて学習成果報告会を開催した。学生は資料作成ツール（PowerPoint）でスライドを作成して学習成果を発表した。学生の作成レポートと発表用スライドを冊子にして来校者に配布した。地域住民は、学生が自分たちの活動に参加したことを喜び、学生の励みになる肯定的な内容の感想や意見をフィードバックしてくださった。

**関係団体、組織等**｜北九州市社会福祉協議会、水巻社会福祉協議会、学童クラブ（2カ所）、市民センター（3カ所）、子ども食堂（2カ所）、老人クラブ（2カ所）、ボランティア団体（2カ所）、地域活性活動を行うNPO法人、障がい児対象放課後デイサービス、地域包括支援センター。

### 学生の学び

①挨拶、時間厳守、身だしなみ、敬語などの基本的なマナーを意識する機会となる。
②防災訓練における救助側の視点での学習経験などは、医療・看護を提供する側としての視点を育むことができる。
③さまざまなボランティアの活動の実態を知り、関心を深める。
④種々の場で活躍する看護師を知る。
⑤幅広い年齢層の多様な人々を、発達段階、暮らし、地域での活動を通して理解できる。
⑥健康と暮らしの関係（自助）、地域における支え合い（互助）について学習する。

※活動関係者から、「子どもとの食事の際に正座しない」「食事の際にいただきますと言わない」「遅刻した学生がいた」など、学生の不足点に対する指摘があり、反省の機会となった。

### 地域住民の様子・反応など

- 成人期以降の交流者は、若い年齢層の看護学生と接する機会があることで、活力を得ることができている様子である。
- 子どもたちは2回目のフィールドワークで看護学生に再会できることを非常に楽しみにしていた。
- 普段、接点を持つことが少ない看護学生との交流機会を楽しみにしている地域住民が多く、好意的かつ協力的に関わってくれた。

### 「地域住民との連携教育」のねらい

地域の人々との交流を通して地域を知り、地域の人々の暮らしを知り、健康問題との関連を学習する。

### 科目目標

地域で暮らす人々の生活の実態を知る。
水巻周辺の人々の生活実態と地域の健康問題との関連を学習する。

### この科目で「地域住民との連携教育」を実施する背景や理念の紹介

教育理念の「人間愛と自己実現」。
地域・在宅看護論の前段階として、地域に暮らす人々の生活実態を知る。

### 「地域住民との連携教育」の実施に至るまでの経緯

地域で暮らす人々の生活実態を知り、地域の健康問題との関連を知ることを目的に科目立てした。専門基礎分野の健康科学の講師（県内の市立大学で環境教育、防災教育を専門とする准教授、十数年以上前には、健康や社会課題の解決に向けた多様な活動を行う公益財団法人の職員であった。教員とは同法人運営の小児喘息のキャンプに参加した際に知り合った）に新科目初動にあたり、相談したところ、学校所在地の社会福祉協議会に連絡・調整してくださり、このようにバラエティー豊かなフィールドワークを科目に組み入れることができた。

「地域の暮らし」の14フィールド

| 日にち／人数／場所 | フィールド情報 | ［学生の活動の概要］［主な学び］ |
|---|---|---|
| 1. 8月4日、8月24日／6人／遠賀郡水巻町 | 視聴覚障害者のためのボランティア団体との交流 | ［活動］ごみカレンダーの点訳や広報誌の朗読、講演会の手話通訳など、会の活動について説明を受けた後、自分の名前の手話の練習を体験。<br>［主な学び］伝えようとする気持ちの大切さ。 |
| 2. 8月8日、8月22日／5人／遠賀郡水巻町 | 老人クラブの行事（イチジク収穫）を共に体験 | ［活動］イチジクの収穫方法の説明を聞いた後、会話をしながらイチジク収穫を体験。<br>［主な学び］人とのつながりや生きがいを持つこと、また、第二の人生として、いくつになっても学び続けることや健康寿命を延ばすことの大切さ。 |
| 3. 7月30日、8月27日／6人／北九州市小倉南区企救丘 | 北九州の活性化に貢献するNPO法人主催の子ども向け防災教室に参加 | ［活動］子どもたちが遊びながら防災意識を育む防災講座「あそぼうさい」に参加。子どもたちと防災カルタ・緊急連絡ハンドベル・防災グッズの名称の学習。<br>［主な学び］防災対策を講じる側、災害発生時に、救助・援助する側の視点を得た。子どもの防災意識を高めるための楽しんで学ぶ工夫、防災を通して安全を守る取り組み、地域のつながりの大切さ。 |
| 4. 8月5日、8月23日／2人／遠賀郡水巻町 | 障がい児対象の放課後デイサービスでの子どもとの交流 | ［活動］放課後に訪れる子どもたちと一緒に宿題をしたり、アイロンビーズで遊んだ。<br>［主な学び］子どもたちが安心して時間を過ごせるスペース、個性を理解することの大切さ、言葉で伝えることができない子どもの様子から、楽しんでいるのか、悲しんでいるのかなどの感情を感じ取る心の目の大切さ。 |
| 5. 8月25日／2人／中間市 | 地域包括支援センター主催の青空市場（定期開催イベント）の運営に参加 | ［活動］青空市場では、野菜、魚類、大豆製品、菓子、惣菜など、移動販売が可能な複数の事業所が出店・販売するイベントで商品搬送や販売に参加。<br>［主な学び］多くの高齢者が外に出るきっかけとなり、地域に賑わいをもたらす場となっていること。 |
| 6. 8月23日／7人／北九州市八幡東区 | 北九州市立市民センターの子ども向けイベントに参加協力 | ［活動］「子どもサロンの日」に、ボウリングゲームや読み聞かせを行った。<br>［主な学び］いろいろな子ども向けの講座を実施する「子どもサロン」は思いやりを感じる場になっていること。参加した母親らは顔がわかる関係となり、このようなつながりは災害時の地域の互助や連携を生むこと。 |
| 7. 8月8日、8月22日／5人／遠賀郡水巻町 | 老人クラブの料理教室に参加 | ［活動］料理教室に参加し、高齢者の暮らしの様子を見聞きする。<br>［主な学び］高齢者が料理作りで頭と体を使い認知症予防に取り組み、減塩・高タンパクなど、健康づくりを心がけていること。集まって料理・食事をすることを楽しみ、笑顔になることも健康づくりに大切な要素であること。 |
| 8. 8月2日、8月23日／4人／遠賀郡芦屋町 | 小学校の学童クラブでの子どもとの交流 | ［活動］小学生と勉強や運動の時間を一緒に過ごす。<br>［主な学び］学童クラブが、子どもたちの居場所であり、他学年との交流の場でもあること。子どもの特徴を知る機会となった。 |
| 9. 8月5日、8月26日／5人／遠賀郡芦屋町 | ボランティア運営が運営する子ども食堂の活動に参加 | ［活動］スタッフの話を聞いた後に、子どもたちに渡すお弁当を一緒に作る。<br>［主な学び］子ども食堂の活動、子どもの貧困や孤食といった問題、思いやり、ボランティア活動の継続の大切さ。 |
| 10. 8月3日／3人／遠賀郡岡垣町 | NPO法人が運営する子ども食堂に集う子どもとの交流 | ［活動］子ども食堂に集う子どもたちと活動（勉強・食事・遊び）を共にする。<br>［主な学び］元看護師がアレルギー対策など、専門知識を生かして活動に協力する姿に触れ、多様な看護の場やボランティアの活動などへの関心を高めた。 |
| 11. 8月1日、8月22日／3人／遠賀郡芦屋町 | 小学校の学童クラブでの子どもとの交流 | ［活動］小学生とボードゲーム、ジグソーパズルなどで子どもたちと遊び交流。<br>［主な学び］学童クラブを利用する子どもの家庭の背景を知る。子どもの個性を理解し寄り添う大切さを学ぶ。 |
| 12. 8月3日、8月24日／6人／遠賀郡芦屋町 | 小さな困りごとを助け合うボランティアの会（組織）の活動に参加 | ［活動］民生委員と一緒に利用者宅を訪問し、掃除を手伝う。<br>［主な学び］高齢者の暮らしを支えるには、介護保険制度だけでは不十分であり、細やかで小さな生活支援が必要であること。ちょっとした困りごとをサポートする活動の素晴らしさを知る。 |
| 13. 8月5日／3人／北九州市戸畑区 | 市民センター主催の健康体操講座に参加 | ［活動］高齢者対象の健康体操講座に参加。<br>［主な学び］健康体操講座は、健康づくりの場であると同時に、心の安心を提供する場にもなっていること。 |
| 14. 8月22日／3人／北九州市戸畑区 | 市民センター主催の高齢者対象の集いに参加 | ［活動］地域の高齢者と一緒に輪投げをした。<br>［主な学び］市民センターでの小さな集いが、高齢者の健康支援や自立支援に役立っていること。 |

緊急連絡ハンドベル

防災クイズ

防災グッズ暗記ゲーム

**同様の連携教育を導入・展開したい他校へのメッセージ！**

社会福祉協議会のご協力を得て、さまざまな団体とつながることができました。社会福祉協議会が束ねる地域住民のサークルやボランティア団体の方々は、看護学生とのつながりを楽しんでくださっていました。連携教育を「1つの社会資源」であることを説明すると、受け入れもスムーズになると思います。

**費用発生について**｜フィールドワーク先への手土産：合計36,000円（各2,000円×18個）。成果発表会（お茶代）：2,500円。

**取材メモ**

専門分野の学習に入る前に、基礎科目の中に地域住民との連携教育を配置するカリキュラム設計は、順序性がよいと思いました。社会福祉協議会を通して上表のように多様なフィールドを得たことで、教育内容の充実を図ることができています。学校の授業に関わる非常勤講師の中にも、連携教育づくりをサポートしてくださる方がいると思います。講師会開催時に教育方針の共有を深めるだけでなく、提案を募るなどの方法で、新しい教育プログラムのアイデアをいただいたり、サポートをお願いするとよさそうです。

# 松下看護専門学校
大阪府守口市

**設置主体**｜パナソニック健康保険組合
**課程**｜3年課程
**1学年定員**｜40名

1年次　後期　基礎分野　思考力を鍛える［新］　1単位（20時間）のうち8〜10時間

## 事例7　学生が地域とつながる“まつかん地域貢献プロジェクト”
### ～思考力・判断力を培い、連携を模索する～

**教育事例の紹介**　科目「思考力を鍛える」で、『学校所在地である大阪府守口市の住民に貢献できる何かをしよう』がテーマのプロジェクト学習に取り組む。学生自らが学校の所在地である守口市の住民の課題を取り上げ、貢献内容を検討し、調査などを実施し、計画を立案し、実践する過程で、比較する、分類する、多面的にみる、関連づける、構造化する、評価するなどの複数の思考の要素を選択・組み合わせ・活用するチーム活動を体験することができる。

具体的な進め方として、まず担当講師は、授業オリエンテーションで学生に「守口市のこんなところに看護があったらいいな」ということについて考えるよう促す。「“看護×〇〇”の〇〇を考え、看護を町につないでみよう。着地点は0を1にすること。“看護×〇〇”の達成のために、必要なところに交渉に行き、実践する。そして、実践についてまとめて発表すること」と説明する。学生は、学生同士でグループを編成する（1グループ5名）。新カリキュラムでグループワークの時間を約8〜10時間に短縮したが、自ら考えて判断した上での行動を促す教育的しかけは変わりなく、グループごとの計画表作成と行動の実際は学生に任せるようにしている。

2020年度のLGBTをテーマにしたプロジェクトを1例紹介する。ある学生が、母性看護学の授業をきっかけに、性に関連した困りごとに悩む同級生を持った経験を思い出したことで、このグループは、性に関する理解は13、14歳に深める必要があるのではないかという課題をあげた。そこで、LGBTに関する勉強会開催の企画案を複数の中学校に打診した。3校目の打診で「事前に教育委員会にアプローチすると進めやすい」と助言いただいた。その当日に学生らは副学校長とともに教育委員会に出向きプレゼンテーションを実施して、学校長会で説明を行う許可を得ることができた。次に、学校長会に副学校長がうかがい、当該科目のねらいや内容の説明を行った結果、“出前授業”の許可を得ることができた。その後、質保証の観点から「母性看護学」担当教員の監修指導下でLGBTに関する“出前授業”の授業案を作成し、授業準備をして、中学3年生4クラス（各34名）を対象に各20分程度の“出前授業”を実施した。

本プロジェクト学習を通して、対象への打診や相談を含めた交渉段階で「信念を持って根気強く交渉や伝達を行うこと」「特に教育機関での勉強会開催には、行政との連携・協働が重要であること」を体験から学習できた。中学生に授業を行う際に、学習者（生徒）のレディネスや特性を把握した上で正しい知識を伝えるための内容検討が重要であることを学んだ。このように、学生はプロジェクトの準備段階から最後まで多様な体験をし、そこから多く学ぶことができるのがこの教育の特徴である。

プロジェクト実施後、学生は、アンケート調査、感想や意見の収集を行い、相手の受け止め方、教育を行った場合にはその効果などを考察し、自らの活動を評価する。プロジェクトを楽しむことが難しくなるため、参加者評価は実施していない。授業評価は、学生の自己評価・ピア評価、提出資料とレポートに関する科目担当教員の評価を総合して行う。

**関係団体、組織等**｜学生発案型であるため、関係団体や組織も学生が都度検討し、交渉する。
例）保健所、警察署、市役所、市内スポーツジム、学生の母校（高等学校）、幼稚園、中学校、教育委員会など。

### 学生の学び

①人の暮らしや健康に関連する地元の課題を探求する思考力、課題解決のためにプロジェクトを立案する発案力が培われる。
②課題解決ができたか否か、あるいは作成したプロジェクトが計画通りに進んだかではなく、プロジェクト学習を進行中に生じる障壁やトラブルをも学習素材と捉え、解決策を模索する中で思考力が高まる。
③プロジェクト進行過程で、グループ内の協力、他グループの計画や活動を参考にすること、教員に相談し助言を得る必要性を知る。
④学校など、組織レベルの交渉や調整の必要性を学ぶ。

学生がつくったポスター

### 「地域住民との連携教育」のねらい

実地で、考える、判断する、交渉するという経験を通し、人とのやりとりの中で考える、判断するとはどういうことかをつかみ取る。
地元に貢献することを目標とし、一人でなくチームやクラスメート、フィールド先の人々とのやりとりの中で思考力、判断力を鍛える。

### 科目目標

看護師としての思考力・判断力の基礎的能力を身につける。

### この科目で「地域住民との連携教育」を実施する背景や理念の紹介

4つのディプロマポリシーのうちの「Ⅱ．根拠に基づく個別的な看護実践をする力」と「Ⅳ．看護師として成長し続ける力」を培い、伸ばす基礎をつくるためにこの連携教育を実施している。

### 「地域住民との連携教育」の実施に至るまでの経緯

教養科目的な位置づけだった基礎分野の「文化人類学」を、2014年、講師変更を機に看護に関連づけた学修内容に変更したいと考えた。新講師は元小学校教員で、小学校で地域フィールドワークを教えた経験を有していたため、フィールドワークの導入を依頼した。その後、このフィールドワークの看護への関連づけと他科目との横断的学習連携をねらって改善を繰り返し、2019年に現行の科目名称・カリキュラムとなった。

**【授業進行】※授業計画はシラバスより抜粋掲載**

| 旧カリキュラム | | 2022年度（新カリキュラム） | | |
|---|---|---|---|---|
| 1年次後期<br>1単位（30時間） | | 1年次後期<br>1単位（20時間） | | |
| 回 | 授業計画 | 回 | 授業計画 | 授業進行の実際 |
| 1 | チームづくり | 1･2 | チームで情報収集や検討を行いテーマ・内容を決定 | オリエンテーション、チームの決定、話し合いとテーマの共有 |
| 2･3 | チームで情報収集や検討を行い、テーマ・内容を決定 | | | |
| 4 | チームごとに内容を全体発表し調整 | 3･4 | チームごとに内容を全体発表し調整 | アポイントメント、交渉、介入準備 |
| 5～7 | チームで内容を検討、関係機関に交渉しつつ内容の調整・充実 | 5～7 | チームで内容を検討、関係機関に交渉しつつ内容の調整・充実 | 介入・グループワーク |
| 8 | 進捗状況を発表・確認 | 8･9 | チームごとに内容検討や交渉および実施についての発表と全体共有 | グループワークまとめ（前回できなかった場合は介入） |
| 9～12 | チームで内容・計画の修正や調整の上、実施 | | | |
| 13･14 | チームごとに内容検討や交渉および実施についての発表と全体共有 | | | |
| 15 | 個人にてリフレクションと学びの明確化 | 10 | 個人にてリフレクションと学びの明確化 | 発表会・レポート作成 |

**科目「思考力を鍛える」で実施されたプロジェクト（2例）の一部紹介（2019年度の一部）**

| テーマ | ①守口市在住の成人の健康づくり | ②守口市民の交通安全意識の向上 |
|---|---|---|
| 学生の知的関心と思考 | 運動は健康づくりに有効であるのにできていない看護学生の両親を見て、成人期の人々の困っていることに関心を持った。 | 守口市民の安全な生活のため、交通事故防止に寄与したい。 |
| 学生の計画内容 | 1. 成人期の人の健康づくりに関する困りごとを把握するために駅前アンケートを実施する。<br>2. アンケート結果を踏まえた健康づくりに関する企画を実施する。 | 守口市への愛情を表現したポスターを作成して、警察署に掲示することで市内の交通安全への意識向上に貢献する。 |
| ワークの進み方の紹介 | 1. 駅前アンケートの結果、時間がなく、運動ができていないことがわかった。<br>2.「日常生活の中で簡単にできる運動を紹介したい」と考えた。市役所に運動指導の計画を相談したが、実現には至らなかった。民間のスポーツジムに企画を相談した結果、運動療法に関する動画をジムの中で流すことへの同意を得られた。<br>3. 学生は、スポーツジムに通う人だけではなく、通わない人にも提案できる5分程度の運動療法を提案する動画を作成した。<br>4. 学生出演の動画であるため、学生の個人情報保護の観点、協力施設（スポーツジム）の動画活用目的を学校で検討し、出演学生の顔などをぼかし、個人や学校が特定されない加工を加え、スポーツジムの館内で動画を放映するに至った。 | 1. 作成ポスターの警察署内での掲示は実現しなかった。<br>2. 1年半後、警察より連絡があり、「守口市への愛情を表現し、交通安全への意識の向上を推進したい」という活動が評価され、学生作成のポスターがクリアファイルのデザインとして採用された。<br>3. このワークをきっかけに、警察署は、防犯に関するポスター（絵）の公募を開始した。 |
| 学生の学び | 1. 対象への打診や相談を含めた交渉段階で、相手の立場に立って根気強く交渉や伝達を行うことの大切さを学んだ。<br>2. 疑問に対して答えを得る方法の一つであるアンケートを経験できた。<br>3. 駅前アンケート実施時に地域住民とのコミュニケーションの機会があり、地域住民のイメージ形成に役立った。<br>4. 特定の個人を識別できるデータ（写真・映像・音声を含む）を扱う際に、個人情報保護の観点が必須であることを学習した。 | 1. 同左<br>2. 意志を持って活動を行い、対象に伝えることで、地域への影響を生み出すことができることを体験し、学んだ。 |

## 地域住民の様子・反応など

- 学生企画プロジェクトに共鳴・応援してくれる団体がある。
- 学校が決めるのではなく、学生発案によってプロジェクト学習の対象を設定するため、依頼や打ち合わせの過程で、実現が難しいこともある。加えて、自由度の高い活動に対するご意見を頂くこと、学生からではなく学校からの連絡や依頼、学校が作成した説明書面の提出を求められることが、年間1～4件程度（年度による）ある。

学生が考案した交通安全メッセージ入りのクリアファイル
合言葉は「もりぐちしがすき」

大阪府守口市警察署ウェブサイト掲載写真（ページ番号1004040）
写真下段中央：クリアファイル製作に協力くださった大阪府トラック協会東北支部の方
写真下段左右：学生

### アクティブ・ラーニングの取り組み

松下看護専門学校では、全87科目（106単位）中、10科目（13単位）でプロジェクト学習をはじめとするアクティブ・ラーニングを取り入れ、学生の**“意志ある学び”**を大切にしている。1年次に地域住民と関わる科目は、この「思考力を鍛える」の他にも、「加齢と看護」（守口老人クラブ連合会婦人部の人へインタビュー、健康課題への情報提供、健康教室開催）、「地域〈守口市〉で暮らす人と看護」（多くの集団の暮らしの中への参与観察を行う）がある。

### 同様の連携教育を導入・展開したい他校へのメッセージ！

教務主任　大谷 弘恵先生より

課題探究から開始するプロジェクト学習であり、関わる組織や団体などとのやりとりも学生が行うため、交渉段階での課題も見られますが、学校として学生の発案プロジェクトへの思いを十分理解して、実現に向けて行動する学生を信じて見守る姿勢が大切だと思います。助けが必要なときには、十分にサポートするように心がけています。学生に自由度の高い活動をさせるにあたっては学校の気概も大事です。

**費用発生について**｜協力団体、協力者に対する謝金：なし。
ポスターや説明書などの制作料金：年間数千円（教材費より）。

### 取材メモ

プロジェクトの発案から実施・評価のプロセスを大切にして思考力を磨くよう導く、学生を信じて手を出さず見守る、発生した課題も教材化するなど、教育者に大局的な視点が求められる科目だと感じました。校内で完結する調べ学習ではなく、地元の課題を見い出すプロジェクトに取り組むことで地元へ貢献する視点や力を育成するという、幾重にも工夫が凝らされた教育であり、これを実施するには教員の揺るぎない信念が重要だと感じました。

# 日章学園奄美看護福祉専門学校
鹿児島県奄美市

**設置主体**｜学校法人日章学園
**課程**｜3年課程
**1学年定員**｜40名

1年次 | 通年 | 専門分野 地域・在宅看護論 | 地域と暮らし［新］ | 1単位（30時間）のうち18時間

## 事例 8
## 先生は島人（シマンチュ）！ 地域住民の生活を“知る”のではなく“共有する”
### ～散策して見聞きし、集落（シマ）の活動に加わって学ぶ「参加活動型学習」～

**教育事例の紹介**　奄美看護福祉専門学校は、奄美大島の名瀬地区の小湊集落※に所在する。小湊集落は、近隣の名瀬（なぜ）勝（がち）集落や前勝（まえがち）集落、西仲勝（にしなかがち）集落同様、集落の住民同士の結び付きが強く、古くからの集落行事が多く残る地域である。また、島唄や“八月踊り”といった伝統文化、史跡・建造物など、有形無形の文化財が数多くある。奄美大島は2021（令和3）年7月に世界自然遺産に登録され、「小湊フワガネク遺跡」が2010（平成22）年8月に国史跡に指定されており、2013（平成28）年8月には出土品 1,898点が国重要文化財考古資料に指定されている。敬老会などの行事、五穀豊穣祈願、祭祀関係等々の集落行事が年間にいくつも行われ、住民らは**“結の精神”を育んでいる。**普段の暮らしにおいても集落で定期的に集落清掃を行う、児童数が減少した小学校の運動会を集落で盛り上げるなど、地縁社会としての協働関係が機能している。

看護学生は学校行事として敬老感謝の集い、ボランティアで近隣小学校運動会の企画・運営に関わるなど、複数の集落行事に参加していたが、これらは2年次の教科外活動という位置づけであった。2022年、新カリキュラム始動に合わせ、これらの活動に稲刈りを加え、科目「地域と暮らし」に組み入れた。授業内容は別表参照。

4、5回目の授業では、校内に5名の語り部を迎えて島の歴史などについての講話を聴く。その後、小湊集落に詳しい住民1名が案内役を担い、学校近隣の遺跡や文化財を散策する。学生が**奄美の方言である島口（シマユムタ）**に触れる機会でもある。6～9回目の授業では、本校の学生も集落住民とともに小湊小学校の運動会の企画・運営に参加する。運動会終了後にはみんなで“八月踊り”を踊り、大いに盛り上がる。

いずれも単なるイベント体験ではなく、集落に暮らす人々の生活の一部を共有する体験学習である。

成績評価は、グループワークの成果物と発表、課題レポート提出で行っている。

※奄美大島の方言では、集落を「シマ」と呼ぶ。

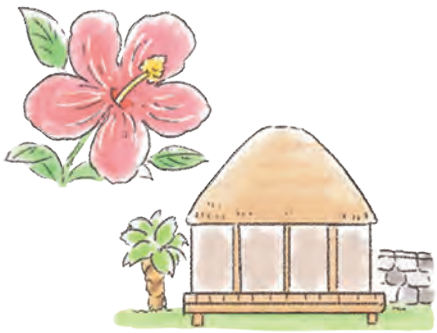
**関係団体、組織等**｜小湊集落の区長、小湊集落の住民、小湊小学校、小湊集落周辺の米農家、小湊集落主催の敬老会の参加者。

## 学生の学び

①奄美の歴史や文化を学ぶ。
②小湊の豊かな自然とその恵みを知る。
③集落に暮らす人々の暮らし、集落の機能を知る。
④集落住民の誇りに触れ、共感する。
⑤広い背景を持って看護の対象を見ることができるようになる。

## 地域住民の様子・反応など

- 看護学生に奄美大島、小湊集落の歴史や文化を伝達する機会になっている。
- 興味を持ち、楽しんで学ぶ学生と接する機会に、喜びや生きがいを感じている。



### 「地域住民との連携教育」のねらい

集落の住民と生活体験、社会体験を重ねることで、地域住民との交流・コミュニケーションの必要性を理解する。

### 科目目標

1. 地域の風土・文化を知り、地域に住む人々とその暮らしを理解する。
2. 地域の特性（強み・弱み）を理解する。
3. 地域で暮らすさまざまな人との話し合いから、思いを知る。

### この科目で「地域住民との連携教育」を実施する背景や理念の紹介

・地域の人々と関わり、人々の生活背景を知る。
・病気の人を見るのではなく、生活している対象を把握する。

### 「地域住民との連携教育」の実施に至るまでの経緯

実習評価、卒後評価で、対象理解の評価が低く、学生が“病を見て人を見ず”になりがちであることを把握した。看護の対象を、暮らし・生き方・考え方・価値観などの背景がそれぞれ異なる「地域に暮らす人」として捉える視点を養うことを目的に、従来、ボランティア活動、教科外活動であった地域活動を本科目に統括し、集落学習、集落住民とのコミュニケーション機会を設定して、協働体験の中に位置づけた。

### 科目名称「地域と暮らし」の授業内容

| 授業構成 | | 授業の内容 |
|---|---|---|
| 1回目 | 教室にて座学 | 暮らすということ |
| 2・3回目 | 学校周辺の探索 | 近隣4集落の調べ学習・まとめ・発表&ディスカッション |
| 4・5回目 | 小湊集落に出向く 地域住民と交流 | •区長、語り部の講話<br>•歴史、文化、集落の特性、地域行事や取り組みの情報収集 |
| 6〜9回目 | 小湊集落で活動 地域住民と交流 | •小湊地域づくり協力、媒体作成<br>•小湊集落との交流・行事［小学校運動会、八月踊り、米作り］参加 |
| 10・11回目 | 教室で準備、敬老会訪問活動 地域住民と交流 | •小湊敬老者訪問事前準備<br>•小湊敬老者訪問でお祝いのメッセージとプレゼントを贈る |
| 12・13回目 | 教室にて座学 | 災害と暮らしについての調べ学習・まとめ・発表&ディスカッション |
| 14回目 | 教室にて発表会開催 地域住民と交流 | 小湊集落のまとめ・発表会<br>※住民の招待参加あり |
| 15回目 | 教室にてワーク | 地域実習に向け、地域特性を協同学習 |

**小湊敬老感謝の集い**：コロナ禍以前は、学校に地域の高齢者を招待して敬老会を行っていた。看護学生はこども・かいご福祉学科生とともに、血圧測定、健康チェック、足湯・フットマッサージ、島唄、ソーラン節、エイサーなどでおもてなし。「地域行事に協力してくれるのでありがたい」という参加者の声に、学生は「地域の方々のおかげでいろいろなことができている。元気でいてほしい」とコメント。

## 奄美の歴史や文化

すべてのものに神が宿るという信仰がある。神々に感謝する行事が年間を通して複数ある。各集落にノロ神とユタ神がいる。

看護学校建設にあたりソテツ畑を掘り起こして発見された**小湊フワガネク遺跡**が国の重要文化財の指定を受けている。

小湊集落の住人の語りを聴く

小湊敬老感謝の集い

## 集落散策後の感想レポートより

※一部内容の抜粋

**学生1**：私は奄美出身なので何度も小湊集落を訪れたことがありましたが、モーヤ墓、フワガネク遺跡、鯨松、厳島神社など14カ所も巡り、小湊が東南アジア琉球貿易港で漁業が盛んで栄えていた時代があることなど、はじめて知ることがたくさんありました。愛着が湧きました。

**学生2**：興味を抱き、踏み込んで知ろうとすることで、そこにある思いや大事なものを知ることができます。これは集落理解だけではなく、人間理解にも共通すると思いました。小湊集落の住民の方々を大切にしたいと思いました。

## 八月踊りとは

奄美大島の口承伝統芸能で、三味線やチヂン（手持ち太鼓）を演奏して島唄を歌いながら輪になって踊る。歌のスピードを上げ、踊るスピードをみんなで上げるなどの遊びの要素もある。歌詞、振り、メロディが集落によって異なり、**その違いが集落のアイデンティティー**になっている。

## 奄美全土によりバックアップ

奄美看護福祉専門学校は、奄美市が積極的に誘致した高等教育機関であり、奄美市による入学準備金、通学費補助・授業料の一部補助等々、入学者に対して手厚い支援制度がある。人口流出の抑制、移住人口の増加、優秀な人材の育成と確保の役割を果たしている。奄美在住者のほか、沖縄、神奈川、東京、大阪、兵庫からの入学も一定数ある。

### 同様の連携教育を導入・展開したい他校へのメッセージ！

本校教員は、日ごろからよく集落や小学校等に出向きます。そして、小学校の年間予定、集落の年間行事予定を把握し、さらに派出所発行書類も参考にしています。顔見知りになり、お互いに行き来する関係性を築くことが、地域住民との連携教育を進めるにあたってのキーだと思います。

**費用発生について**｜一人あたり500円（学校負担）。

### 取材メモ

奄美看護福祉専門学校は、3万 $m^2$ もの広大な敷地とひときわ目立つ立派な校舎を有し、集落の方々に温かく支えられている学校です。地域の清掃ボランティアにも取り組む看護学生を、地域住民は親しみを込めて“奄看生（あまかんせい）”と呼び、ボランティアのお礼に栽培野菜をくださったりと、心のこもった交流があります。

時代に即した特徴として、学校の広報や学生募集資料に奄美のよさを生かした教育内容をふんだんに掲載し、地域と共に歩み発展する学校の様子を発信しています。学校のウェブサイトの SNS 情報も充実しており、学校の情報を楽しくキャッチできます。

創立から28年間で築き上げた地域との関係性を教育活動の原動力とし、他校との差別化を巧みに図り、地域住民と連携した温かな教育活動を展開されています。地域の方々に愛されて成長する“奄看生”が地域を愛する様子に心を揺さぶられました。

# 竹田看護専門学校
福島県会津若松市

**設置主体**｜一般財団法人竹田健康財団
**課程**｜3年課程
**1学年定員**｜40名

1年次 | 5月中旬 | 専門分野 地域・在宅看護論 | 地域在宅看護論実習I［新］ | 1単位（30時間）のうち7.5時間

## 事例 9 「田植え」実習の指導者は、地元農家の方々 ～農家の暮らしぶり・人生観・健康観を学び、郷土愛・郷土への誇りを育む～

### 教育事例の紹介

本教育は2022年度の新カリキュラム導入科目である。入学して1カ月が経過したばかりの5月、竹田看護専門学校の学生は貸し切りバスに乗ること30分、学校の北東12kmほどに位置する農村地区の大規模農園で、**農家の方々の指導を受けながら「田植え」を実践**する。2022年度は大規模農園経営者（70歳代）、後継者（40歳代息子）、同地区の農家の方4名（50～60歳代）が昔ながらの手植え作業を指導してくださった。

学生は田植えの仕方やコツを教わり、農家の方々のリズミカルな身体の使い方、表情などを間近に観察しながら、夢中になって田植えにいそしんだ。田んぼの香りや感触、風の心地よさ、空気のおいしさを五感で感じ、地元の方々の温かさ、稲作に対する熱意にも触れることができた。

作業後に設けた質問タイムで、学生が「朝起きてからどのように過ごしているのですか」「健康面で気をつけていることはありますか」など、生活や健康観を尋ねると、素朴な語り口調で実直に答えてくださり、人の優しさや力強さ、おおらかさなどを感じる貴重な体験ができた。

看護の対象である地域で暮らす人々との**共同作業を通して心を交わす体験**は、郷土愛や郷土への誇りをも育み、地域に貢献する看護師を目指す動機を一層強化するものであった。

会津若松市の周辺町村の高齢化率は50%を超え、市内農業従業者の60.4%が65歳以上である（令和2年国勢調査より）。市では、農家の高齢化や担い手不足、遊休耕農地の発生といった農業に関する諸課題解決のために集落営農※が進められている。この実習の指導者は、集落営農により耕地と人々の暮らしを守り、地元産業としての農業の価値を高めることで、コミュニティーの維持に尽力されている方々である。地元に貢献する看護師の育成を目指す教育において、古くからの地元産業である農業を営む方々の暮らしや農業の実情を知るとともに、人情味あふれた会津人の生き方に触れることができるこの「田植え」実習は意義深いものである。

※集落営農：集落を単位として、農業生産過程の全部または一部を共同で取り組む組織のこと。集落内での適切な役割分担や調整によって農業経営の効率化を図り、高齢化に伴う耕作放棄地対策を講じ、集落機能の維持・向上を図る機能を発揮する。（参考：農林水産省ウェブサイト「集落営農について」）

**関係団体、組織等**｜会津若松市河東地区の大規模農家。

### 学生の学び

①農家の方の1日の暮らしや生き方、健康行動、農作業の具体的な方法などを知る。
②故郷の美しさ、互助の精神を感じ、地域への愛着が深まる。
③田植え作業を農家の方から学ぶことで、人の温かさ・優しさ・人情・愛情などに触れ、人の気持ちの理解が促進されると同時に、人と関わることの楽しさを体験する。
④農作業の時期に合わせた入院を希望される、農作業繁忙期には受診が少ない・遅れるといった農業従事者の事情を理解する。
⑤地域の医療の担い手となる看護学生への地域住民からの期待や愛情を感じ、それに応えたいという気持ちが芽生える。

### 「地域住民との連携教育」のねらい

農家の人々の暮らしぶり・健康観・価値観・心に触れること。

### 科目目標

地域で生活している人々とその家族の暮らしや健康に関心を持ち、その暮らしや健康を支えている支援を理解する。

### この科目で「地域住民との連携教育」を実施する背景や理念の紹介

多くの看護学生は核家族で育ち、世代間交流の機会は少ない。中には他者の生活への関心が低い学生もいる。入学直後が田植えシーズンにあたることを活用し、地域住民およびその家族の暮らしに関心を持つことができるよう、この田植え体験を地域・在宅看護論の臨地実習に組み入れた。本科目の目的は学生が田植え作業の具体を知ることではなく、地元の人々の指導による田植え体験を通し、本校の教育目的「地域で生活する人々の健康を、温かい心で支援できる看護師の育成」に通じる体験を提供することである。

### 「地域住民との連携教育」の実施に至るまでの経緯

河東町在住の教員の提案で、河東地区の大規模農園経営者に直接依頼し、本実習の受け入れ窓口をお願いすることができた。

### 地域住民の様子・反応など

- 田植えを楽しみ歓喜を上げる学生の姿を見て笑顔になっていた。
- 「近い将来、竹田綜合病院の看護師になる学生さんたちが田んぼに来て、田植えを楽しんでくれたことがうれしく、頼もしく感じた」「若い世代が農業への関心を高めることに期待が強まった」「学生から質問を受け、普段あまり気にかけない自身の生活を振り返る機会となった」「2時間の田植え作業をやり通した学生を見て、“やるな”と感心し、若者に対する見方が変わった」「地元貢献の一環として、看護師育成に役立ててよかった」などの声があった。
- 学生に田植えを教える、一緒に作業をする、声をかける、質問に答えることなどを楽しんでくださった。

### ［臨地実習］地域在宅看護論実習（生活者の理解）［A・B］Ⅰの構成と授業内容

| | | |
|---|---|---|
| 地域在宅看護論実習ⅠA | 米農家で、田植えや作業を地域住民と一緒に行う | 7.5時間 |
| | 役場の保健師に同行し、家庭訪問や住民の活動の場におもむく | 7.5時間 |
| 地域在宅看護論実習ⅠB | 地域包括ケアシステムの中にあるさまざまな医療・福祉関連施設を見学する。見学場所：就労支援事業所、障がい福祉サービス事業所、小規模多機能型施設、訪問看護ステーション、こころのケアセンター、老人福祉センター、病院内託児施設など | 7.5時間 |
| | 地域医療フォーラムに参加する | 4時間 |
| | ボランティア活動に参加する。活動内容・場所は学生が決定する。ボランティア活動に関する情報を地域包括支援センターで得ることができる | 15時間 |
| | 発表会 | 3.5時間 |

地域在宅看護論実習Ⅰ（生活者の理解）は、A：2日間（計15時間）、B：4日間（計30時間）で構成される。

### 地域在宅看護論の構成

| | 教育内容 | 授業科目 | 単位数 | 時間数 |
|---|---|---|---|---|
| 地域在宅看護論 | 地域在宅看護論 | 地域在宅看護概論Ⅰ | 1 | 15 |
| | | 地域在宅看護概論Ⅱ | 1 | 15 |
| | | 地域在宅看護援助論Ⅰ（地域包括） | 1 | 15 |
| | | 地域在宅看護援助論Ⅱ（ケアマネジメント） | 1 | 15 |
| | | 地域在宅看護援助論Ⅲ（看護の展望と技術） | 2 | 30 |
| | ［臨地実習］地域在宅看護論 | 地域在宅看護論実習Ⅰ（生活者の理解）［A、B］ | 1 | 45 |
| | | 地域在宅看護論実習Ⅱ（健康支援） | 2 | 90 |
| | | 地域在宅看護論実習Ⅲ（在宅看護） | 1 | 45 |
| 計 | | | 10 | 270 |

**田植えレポ**

- 田植えは天気に左右されるもの！ この実習ではたくましくも合羽を持参し、雨天決行です。
- 学生はハイソックス（古いもので大丈夫）を重ね履きして、トロっとした感触の田んぼの泥に足を踏み入れます。
- 田植え体験が終わるやいなや「稲狩りにも参加したい！」と声が上がりました。
- 休憩中には、「もいで食べていいぞ」と旬の時期が過ぎた近くのいちご畑でいちご狩りをさせていただけ、おいしく水分補給もできました。

母体病院の創設者、竹田秀一は、自らの夢（最高の医療をすべての大衆へ届ける）をよく“虹”に例えたそうである。キラキラと輝きを放ちながら虹を目指して高く成長する太い“たけのこ”の図に竹田看護専門学校の3年間の学びが示されている。

豊かな地域の土壌に育まれ、この“虹”を目指して成長し、地域に貢献する看護師を目指す学生“たけのこ”の姿がありありと目に浮かぶようである。

### 同様の連携教育を導入・展開したい他校へのメッセージ！

本校では、地域特性を分析した結果、農業に着目してこの実習を企画しました。看護教員が、学校所在地域に根づく伝統や産業の特徴を知り、それに関連した住民の暮らしと医療などのシステムの学習につながるようにカリキュラムを構築することが大事だと思います。地域の魅力を活用すると、楽しく、多様な教育効果を発揮する授業を組み立てることができます。

次年度以降は、農家を取り巻く町役場や保育園、幼稚園、小学校、老健施設などの地区周り散策を検討中です。

### 取材メモ

入学後、初の実習が、人と暮らしをテーマにした地域・在宅看護論の臨地実習であることが、まさに新しい看護教育だと思いました。この教育事例は地域在宅看護論実習ⅠAの「田植え」ですが、地域在宅看護論実習Ⅰ（A・B）・Ⅱ・Ⅲ、全体で地域を理解する最適な構成になっています。

新カリキュラムで投じたこの科目の学習成果は、学習直後のテストや課題レポートでは測り難い性質のものです。看護教員が、学生（学習者）および農作業にあたる地域住民らの一挙手一投足の観察に加え、心の動きもキャッチし、双方がどう感じたかを詳細に把握し、教育効果を確認されている点、卒業後をも見据えて教育効果を検討されている点は素晴らしく、緻密な教育の始動に対する強い意気込みを感じました。

**費用発生について**｜実習謝金：学生1人あたり800円／日。
打ち合わせ時の手みやげ：菓子折り（2,000円程度）。
貸し切りバス（往復）：学生負担。

# 厚木看護専門学校
神奈川県厚木市

**設置主体**｜社会福祉法人神奈川県総合リハビリテーション事業団
**課程**｜3年課程
**1学年定員**｜80名

1年次 | 敬老の日 | 専門分野 老年看護学 | 老年看護学Ⅰ 実習［旧］ | 1単位（45時間）のうち4時間

## 事例10 敬老会の企画・運営を通して地域の高齢者に寄り添う心を育む ～学校所在地の自治会との連携～

### 教育事例の紹介

2014年に学校所在地の自治会（A自治会）と敬老会の協同開催を開始し、2016年度からこの敬老会の企画・運営を老年看護学Ⅰの授業内に位置づけた。

教員はA自治会に事前打ち合わせに行く。学生は、A自治会の敬老会企画・運営会議に参加し、当日運営もA自治会と連携して行う。敬老会前日にはA自治会との合同リハーサルを実施する。学生は自治会役員から、「敬老会参加者の誘導はゆっくりと」「段差につまずかないような対策が大事」「トイレ休憩を多めに入れるほうがよい」等々、高齢者への配慮に関連した実践的な指導を受けながら、企画や会場設営にあたる。企画・準備段階から地域住民と連携することでの学びも多い。毎年さまざまな企画を検討して準備をするため、計画立案、話し合いと調整、協同運営の力を培うこともできている。

車椅子での参加者に対する配慮や移動介助の学習といった看護実践力に関連する学びも含まれているが、お祝いやもてなしの要素が大きいイベントであるため、学生がホスピタリティの精神を発揮する機会になっている点は、医療機関での実習とは異なり貴重である。

敬老会イベント全体を通じて、学生は高齢者と交流を図りつつ、高齢者理解を深める。また、高齢者が楽しそうに過ごす姿を見て、自身の貢献力や達成感を感じることができる。この敬老会での交流によって地域と学校の関係性が深まり、学生は地域社会から一層温かく見守られ、応援されるようになった。

2020年～2022年はコロナ禍の影響で、敬老会が実施できていないため、敬老会参加対象の高齢者にお祝い品にあわせてお渡しする「メッセージカード」や「新聞（健康を保つ情報や昔懐かしい遊びなどを紹介する）」を手作りした。また、2021・2022年度はA自治会長や民生委員に地域社会に関する講話を依頼することで、細くつながりを保ちつつ、学校も学生も自治会も、敬老会イベントの再開の時期が訪れることを心待ちにしている。

**関係団体、組織等**｜A自治会。

**2019年度の敬老会プログラム、掲載写真は2019年度のもの**

| | |
|---|---|
| ［1部］開会式典 | ・厚木市長祝辞<br>・学校長挨拶 |
| ［2部］学生からの出し物 | ・歌や踊りを披露<br>・大正から令和までさまざまな生活史の発表など |
| ［3部］ふれあい会 | 学生と参加者が1対1で向かい合って座り、会話を楽しむ |
| ［4部］合唱 | |
| ［5部］閉会式 | |

### 学生の学び

①実体験に基づき、加齢変化や特性と個人差を学ぶ。
②高齢者とのコミュニケーション、高齢者に対する配慮を学ぶ。
③高齢者の時代背景を理解し、対象者目線での出し物の企画ができる。
④生きがいを持って生活する高齢者像を描くことができる。
⑤高齢者の人権擁護の重要さを学ぶ。
⑥地域における自治会の機能を知る。
⑦地域住民からの看護学生への期待を感じることができる。
⑧「敬老会」での役割分担（受付、司会、誘導、展示、会場設営）を自治会と連携して行う。

### 地域住民の様子・反応など

- 学生の出し物（ソーラン節踊り・太鼓・歌・健康体操＆脳トレなど）を楽しみ、若い世代と向き合って話す機会を楽しんでいる。
- 「一生懸命にやってくれていることが伝わってきて涙が出ます」と喜びの声が聞かれる。

### 「地域住民との連携教育」のねらい

地域で暮らす老年期にある人の健康レベルに応じた看護の役割について理解する。

1. 老年期にある人との関わりを通して、発達段階の特徴や加齢変化を知ることができる。
2. 老年期にある人がこれまで生きてきた時代背景や経験が価値観や生活に及ぼす影響を理解することができる。
3. 老年期にある人の健康を維持・増進していける日常生活を送るための環境や工夫の実際を学ぶことができる。
4. 老年期にある人の地域での活動や役割について知ることができる。
5. 老年期にある人の人権と安寧な生活を守るための倫理行動がとれる。

### 科目目標

同上

### この科目で「地域住民との連携教育」を実施する背景や理念の紹介

厚木看護専門学校が設定する3つの中長期的目標「教育ビジョン」（目指す学生像）、「教職員ビジョン」（目指す教職員像）、「学校組織ビジョン」（学校組織像）の中の「教育ビジョン」（・高い倫理観、自立性を持つ学生、・自ら考え看護を探求できる学生、・柔軟に他者と協働できる学生）と「学校組織ビジョン」の一つ（・看護師養成所として地域から信頼される学校）と関連している。

### 「地域住民との連携教育」の実施に至るまでの経緯

A自治会の敬老会の参加者は年度によっては100人近くになることがあることから、学校の講堂兼体育館の貸し出し依頼があった。これに応じて会場を貸し出し、同時に、教員が健康に関連する講話を提供したことが発端である。

**参考資料：新カリキュラム科目「老年看護学概論」の授業計画**

| 授業の方法 | | 学習内容 | 事前学習と復習の内容 |
|---|---|---|---|
| 第1回 | 講義 | 老いるということ、老いを生きるということ | ポートフォリオ<br>老いについて書かれている本や動画などを視聴 |
| 第2回 | 講義 | 「超高齢社会」における老年看護への期待<br>老年看護の対象と役割 | 老年看護の対象と役割についてテキスト学習 |
| 第3回 | 演習 | 加齢現象が生活に及ぼす影響を考える<br>高齢者疑似体験 | 加齢変化を学習 |
| 第4回 | GW | 同上 | 高齢者疑似体験後のレポートをまとめる |
| 第5回 | GW | 敬老会の事前準備 | |
| 第6回 | 演習 | 地域に住む高齢者への支援の実際<br>敬老会 | 自身が居住する地域における高齢者支援について情報収集 |
| 第7回 | 講義・GW | 老年期にある人の理解<br>①高齢者の生理的特徴　老化とは | 身近にいる高齢者と関わる、または高齢者に関連する本や動画などを視聴し、高齢者のイメージをつける |
| 第8回 | 講義・GW | ②高齢者の生理的特徴　身体的変化 | 授業範囲のテキストを読む |
| 第9回 | 講義・GW | ③加齢に伴う社会的側面の変化<br>④発達と成熟 | |
| 第10回 | 講義 | 高齢者社会の動向<br>超高齢社会と社会保障 | 授業範囲のテキストを読む<br>高齢社会に関するニュースを調べる |
| 第11回 | 講義 | 老年期にある人とその家族<br>家族形態と社会情勢 | 高齢者を取り巻く社会に関するニュースを調べる |
| 第12回 | 講義・GW | 高齢者の権利擁護のための制度について<br>高齢者と医療安全 | 権利擁護のための制度を事前に調べ学習する |
| 第13回 | 講義・GW | 老年期にある人の倫理的な課題について考える | 授業範囲のテキストを読む<br>倫理綱領を読み込む |
| 第14回 | 講義・GW | 老年看護についての学びを共有する | 老年看護における学びを各自でまとめる |
| 第15回 | | 定期試験 | |

「敬老会」の一コマ
『時代による食事の移り変わり』の発表シーン

「敬老会」の一コマ　『健康体操』

## 同様の連携教育を導入・展開したい他校への**メッセージ**！

本校は、自治会とのつながりを大切にしています。まず、ご挨拶に伺って顔を知るところから始め、毎年ご挨拶し、今では何かあったら助け合う関係性となっています。地域との連携を模索するならば、ぜひ、学校所在地地域の自治会との親睦を深めることをお勧めします。

「敬老会」の一コマ　『ふれあい会』

※写真は加工しています

## A自治会について

厚木看護専門学校所在地区の自治会である。厚木市の自治会加入率は70%ほどである。2022年現在、およそ200世帯で構成される（厚木市単位自治会設立に関する内規による）216の単位自治会があり、地域住民にとっての住みよい豊かな地域づくりのための諸活動を行っている。

A自治会は、清掃活動、防犯活動、防災訓練、避難所運営訓練、味噌づくり体験、包丁研ぎ、スポーツイベント、各種祭り、盆踊り、敬老会などの活動を展開している。厚木看護専門学校では、A自治会長に学校関係者評価委員の就任を依頼し、教育に関するさまざまな提言を受けている。

2018年夏休み期間中の2日間、A自治会の地域防犯活動企画で、地域住民が生活や通学に使用する高架下トンネルを明るく綺麗にするために、近隣の小・中学生と看護学生（20名）が全長約25mのトンネル内部の両側壁面に壁画製作を行った。A自治会長は、学校評価委員会で「地域活動に看護学校が関わっていただけ、素晴らしいこと」と述べている。

## 「敬老会」の催し

学生は、60～90歳代の幅広い年齢層の参加者に楽しんでいただけるように、創意工夫を凝らします。2015年には『子連れ狼』『水戸黄門』『大岡越前』を組み合わせた時代劇シナリオを作成して劇を上演し、会場は笑いの渦に包まれたそうです。

**費用発生について**｜なし。

## 取材メモ

敬老会を、座学で得た知識を体験に結びつけるため、また、地域に密着した参加型学習の素材としても活用できています。1年生が老年看護学の授業の中でリアルな高齢者像を豊かに描く教育効果も生んでいると思います。

対象理解にとどまらず、学生は、自らが企画・運営する敬老会に参加した高齢者のうれしそうな反応を目にし、大きな達成感を感じ、それが自己肯定感を上げる効果も生んでいると感じます。まさに地域と学校が協同して地域住民の命と健康を守る看護師の育成をしている取り組みです。

厚木看護専門学校は、ほかにも「小児看護学」で保育園と子育て支援センターを利用する親子が来校し、学生が夏休み中に手作りしたおもちゃで一緒に遊ぶ時間を設定するなど、多様な連携教育を展開しています。

対象があっての看護です。対象による「うれしい」「楽しい」と感じることの違いを踏まえて、対象を替えて人の喜びや楽しみにアプローチする教育を展開されている点、科目設計の巧みさを感じました。

# 勤医会東葛看護専門学校
千葉県流山市

**設置主体**｜医療法人財団東京勤労者医療会
**課程**｜3年課程
**1学年定員**｜40名

2年次 | 2月 | 専門分野 地域・在宅看護論 | 地域在宅看護論演習：地域フィールド[旧] | 2単位(60時間)のうち18時間

## 事例 11 地域社会の実態から学ぶ密着型「地域フィールド学習」
### ～命・健康・生活・労働を守る医療・看護の理解を深める～

**教育事例の紹介**　人は社会で暮らす上で、果たすべき役割がさまざまにあり、また個々人が抱える健康問題も非常に多様である。東葛看護専門学校では2年次のはじめに生命活動の学習をし、その後、領域別実習を経験して、人の生に働きかける看護を学ぶ。2年次終盤の2月に、人々の多様な暮らし、労働、健康問題、価値観、生き様などと社会構造、社会のサポートを広く知るため、3日間の「地域フィールド学習」を行っている。

「地域フィールド学習」を2年次の終盤に実施するのには明確な意図がある。学生は、2年次に病院実習を濃密に経験するため、実習後、社会の見方が病院寄りになる傾向がある。しかし、病院という眼鏡をかけると「患者」に見える人も、その眼鏡を外せば「地域で生活・労働する人間」である。この「地域フィールド学習」を通し、これを学生に深く認識してもらい、3年次に進むようにしている。

「地域フィールド」は毎年7～8種類準備している。学生はフィールドを選択後、5～7名で1グループを編成し**3日間の密着体験で、ありのままの事実を学習**する。

毎年のフィールドワークの要綱作成会議では、社会の動向や問題に結び付けて有意的にフィールドを検討し社会の状況に応じて、適宜、フィールドの入れ替えをしている。

近年のフィールドを一部紹介すると、地元農家、企業、町工場（ロケット産業関連、製靴工場など）、工務店、アスベスト外来を有する診療所などがある。製靴工場での労働体験では、シンナーの換気に関する問題、粉じんなどの防護の必要性と防護具装着の不自由さも体験し、教科書的知識を実際に運用する難しさを実感する機会となった。同時に、対価を得るための労働という側面のみならず、“やりがい”や“誇り”といった目に見えない気概に触れることもでき、人間を深く知るよい体験ができた。

フィールドは固定化せず、社会に生きる人を学習するのに適したものに更新している。労働分類によるものに限らず、路上生活者、東日本大震災の原発事故被災地域の病院も準備している。これらのフィールドを選択する学生は交通費は自己負担で、夜間帯の学習、宿泊（宿泊費は学校が負担）を伴うこともあるため、保護者にも説明し、同意を得るようにしている。

ほかにも、過去には、空港客室乗務員と整備士の密着を設定したこともあった。現在、新フィールドとしてコロナ禍での労働問題が指摘されている運搬業を検討中である。

「地域フィールド」終了後には、体験を共有する目的で、発表会を開催する。学生は、「地域フィールド」での体験や学びを報告書（レポート）にまとめて発表する。フィールドワーク先の方が聴講のために来校くださることもあり、工務店の方からは、「改善のヒントを得た」という感想を頂いたこともある。農家や医療相談会開催者からも「発表の内容を活用したい」というコメントを頂いた。発表会で各フィールドの方々と学習成果を共有できることは、学生の励みになっている。

**関係団体、組織等**｜工務店、診療所、病院、農民運動全国連合会（農家）、小学校、医療相談会団体、町工場、製靴工場、東日本大震災被災地関連施設、路上生活者の生活地など。
※年度、社会情勢に応じて変更。

### 学生の学び

①学習や追求への主体性が後押しされる。
②労働実態、労働者の生活や生きがいを知る。
③労働環境や作業負荷が人々の健康に与える影響を考察する。
④健康を身体、心理、社会的側面から考察する。
⑤社会経済の変動、自然災害、人的災害、社会構造など、人々の健康に影響を及ぼす多様な要因を学ぶ。
⑥国民の健康を向上させるための多角的視点を得る。
⑦人々への尊敬の念、感謝の気持ちが育まれる。
⑧地域住民の健康を支える看護職を目指す気持ちが育まれる。

### 「地域住民との連携教育」のねらい

健康と暮らし・労働のつながりを社会構造や社会情勢を踏まえて理解する。

### 科目目標

フィールドワークを通して地域社会の実態を学び、国民の命・健康・生活・労働を守る医療・看護の役割を学ぶ。

### この科目で「地域住民との連携教育」を実施する背景や理念の紹介

開校以来、日本国憲法と教育基本法の理念に基づき、総合的保険医療の視点から、平和で豊かな社会建設の形成者として貢献できる民主的で人間性豊かな看護の専門家の養成を目指している。

### 「地域住民との連携教育」の実施に至るまでの経緯

社会問題を追求し、命・健康・暮らしを守る視点を深める科目目標は、教育理念に根差すものであり、開校以来、教育課程での位置づけや時間数などをアレンジしながら大切に継続している。

**地域在宅看護論演習「地域フィールド」**
**（2022年度の実施要綱より抜粋紹介）**

| 学習内容 | 「地域フィールド」 | 学生数 |
|---|---|---|
| 1. 町工場労働者の労働実態と健康問題を学ぶ | 町工場、製靴工場 | 4名 |
| 2. 建設労働者の労働実態と健康問題を学ぶ（塵肺） | 工務店 | 5名 |
| 3. 労働者の雇用問題と健康問題を学ぶ | 地区の医療相談会と夜回り | 8名 |
| 4. 平和について学ぶ | 遊就館（靖国神社）、平和資料館、東京平和委員会、横田基地 | 7名 |
| 5. 東日本大震災被害と健康について学ぶ | 福島フィールドワーク（1泊2日） | 4名 |
| 6. 食の安全と農業を学ぶ | 農園での農業体験など | 7名 |
| 7. 教員の労働について学ぶ | 小学校 | 6名 |

## 地域住民の様子・反応など

- 未来の看護師への期待と学習活動への賛同によって快く協力いただけている。
- 発表会参加者から「学生の発表を聞いて新しい気づきがあった」と評価を頂いた。
- 学生作成の報告書を活用したいという要望もあった。

**費用発生について**｜一団体あたりの謝金5,000円／日（病院・診療所以外）。

工務店（中段）や製靴工場（下段）、農園（それ以外）での「地域フィールド」の様子

### 1年次

専門分野の地域・在宅看護論（2単位、45時間）の中に「地域交流演習」（およそ1～2時間）を配置。
地域の健康づくりに関する活動を行う「健康友の会」に所属する地域住民に来校いただき“生きざま”をお話しいただく。学生は住民の生の声を題材に、生活・健康・命について幅広く学習する。

### 2年次

専門分野の地域・在宅看護論（2単位、60時間）の中に「地域交流演習」（約18時間）を配置。
学校外の「地域フィールド」で、労働者などに密着した体験をする。

東葛看護専門学校は、住民の要求と建設運動によって、東京勤労者医療会が「基本的人権の擁護の立場に立つ看護師の養成」を目的として1993年に設立した学校である。

### 同様の連携教育を導入・展開したい他校へのメッセージ！

「地域フィールド」に関する授業の企画・準備段階では、看護教員も大きな学びを得ています。学校の理事長や関連の診療所の医師らが月に1回ボランティアで関わっている路上生活者への炊き出しや医療相談に看護教員も参加していますが、精神科や整形外科の医師、弁護士、ケースワーカー、鍼灸師など、多職種と連携する場でもあり、学びは深いです。看護教員が医療以外の世界で活動することが教育の視野拡大に役立っています。

「フィールドを得るのは大変だ」と思いがちですが、教員が「医療施設内での医療・看護にとどまらない」という意識を持って、学校や病院から飛び出して社会に貢献する活動をしてみてください。その延長線上で、学生の学習に適したフィールドに出会うことができるでしょう。

### 取材メモ

この「地域フィールド学習」の根底には、地域住民と手を携えて、無差別・平等の医療・福祉の実現を目指す全日本民主医療機関連合会（民医連）の思想があります。人々の労働、生活を学ぶにとどまらず、人権、平和といった**人の尊厳を支える大きな命題を深く追求する**きっかけを学生に与えており、学校の特色や強みを存分に生かした教育内容だと感じました。現在、病院実習で学生が受け持つ患者さんの多くは老年期ですが、この「地域フィールド学習」では、成人期の人々の労働・生活をありのままに見せていただくことができます。座学や臨地実習での学びの不足要素を補いつつ、労働、生活、災害、経済や社会構造が人々の健康に複雑に関与していることを知識のみならず、肌で感じることができる素晴らしい教育活動だと感じました。地域、社会、世界を見渡して看護基礎教育を考えており、「最良の看護を実践するためには“生きること”すなわち“いのち”への理解を深めなければならない」という学校長（看護師）のメッセージを共有する看護教員から多く学んだ取材でした。

# 鹿児島県医療法人協会立看護専門学校
鹿児島県鹿児島市

**設置主体**｜一般社団法人鹿児島県医療法人協会
**課程**｜3年課程
**1学年定員**｜40名

3年次　前期　専門分野 看護の統合と実践　国際化する看護の広がりと災害看護［新］　1単位（30時間）のうち4時間

## 事例12 避難所設営・運営のノウハウを培う「図上シミュレーション訓練」
### ～市役所地域福祉課と連携して災害発生時の対応を学ぶ～

**教育事例の紹介**　2009年に「看護の統合と実践Ⅱ」の中で、「医療安全」「災害看護」「看護管理」「国際看護」の単元の学びを統合する演習として、「図上シミュレーション訓練」を導入した。2022年度の新カリキュラムでは、この「図上シミュレーション訓練」を科目「国際化する看護の広がりと災害看護」内に配置した。

「図上シミュレーション訓練」とは、コントローラー（進行管理者）からプレイヤー（訓練参加者、参加団体）に対して、災害時に発生する「状況」を次々と付与し、その状況への対応の決定を行う訓練方法である。従来の避難訓練では引き出すことができない“刻々と変化する状況に応じたとっさの判断と意思決定”を訓練できるのが特徴である。

2022年度の実施例を紹介する。

場所は学校の多目的ホールと演習室である。役割の異なる9つのグループに分かれた3年生43名が多目的ホールに集合する。まず担当教員が災害状況に関する情報を提示する。学生は初期の避難所での支援活動案（組織の結成、避難所のトリアージ方法、救護対策、環境整備、必要となる物的・人的資源、生活支援など）を練る。時間を置いて、教員は追加情報（市からの派遣職員、川の氾濫の危険性、避難所である学校への避難者の状況、停電や断水に関する情報など）を提供する。学生は、これらの情報を活動案に反映させる。その後、3枚の「付与カード」（教員が1グループあたり3枚準備してある）を順に取り出し、付与カードに記されている新たな情報に即した対応を検討・決定する。タイムプレッシャーに対する即時対応の訓練である。

授業最終回には、グループ発表、全体討議、教員による講評、学生間評価に加え、鹿児島市避難所運営マニュアルの策定、避難所の確保などの業務を担う部署である鹿児島市役所地域福祉課の職員2名から講評を頂いた。

全体を通して、学生は避難所運営に関する実際的なイメージを形成する。

**関係団体、組織等**｜市役所福祉課。

### 学生の学び

①被災者の状況変化に応じ、必要かつ優先すべき援助のマネジメントを学ぶ。
②避難所運営における市および住民との連携の在り方をシミュレーションで学ぶ。
③学校近隣の地域特性を理解し、災害時に発生する状況を予測する。

### 地域住民の様子・反応など

- 学生を含めた住民の防災意識を高める意図にかなっている。
- 災害発生時の協力人材の育成の意図もある。
- 指定避難所である学校の状況と学生の様子を把握できる。
- 授業の最終回に、市役所地域福祉課の職員に参加いただいている。

### 「地域住民との連携教育」のねらい

避難所にいる被災者の状況と変化に応じて、必要かつ優先する援助をマネジメントできる。

### 科目目標

2つの科目目標のうち、本教育事例の目標である目標2を抜粋掲載する。
2. 災害発生に備えた心構えと看護の方法を理解し、平常時から地域全体で備えるとともに被災時に被災地域や被災者に必要な看護について、主体的に考えることができる。

### この科目で「地域住民との連携教育」を実施する背景や理念の紹介

社会資源の活用、関係機関との連携や調整といった役割が果たせる基礎的能力を有し、地域に根ざした看護を提供できる看護師の育成を目指している。学校が二次避難所の指定を受けたこともあり、避難所設営・運営の実践力を培うために、本科目で図上シミュレーションを実施している。

### 「地域住民との連携教育」の実施に至るまでの経緯

2019年6月28日から7月4日にかけて鹿児島県内に豪雨災害が発生し、鹿児島市全域に避難指示が出た。2018年に地域住民からの要望に応え指定避難所の同意契約を交わした学校に多くの避難者が押し寄せ、2つある駐車場は車中泊避難者の車で満杯になり、車の乗り入れを禁止していた中庭にも車を受け入れた。

学校近隣は鳥の声が聞こえるような田園地域であったが、ここ数年で住宅開発が進み、若い世代の世帯が増え、保育所激戦区といわれるようになった。学校は学校祭で地域住民向けの健康教室や模擬店を企画し、地域でのボランティア活動を行っていたが、コロナ禍でこれらの活動ができなくなり、昨年の学校自己評価では地域貢献のスコアが低下した。しかし学校関係者評価では、避難所である学校への感謝や期待をいただいていた。

看護の統合と実践において、3年次に総合的学習を行う単元としての必要性と、学校が避難所であり地域からのニーズが高いという状況が重なり、「図上シミュレーション訓練」を検討した。

「国際化する看護の広がりと災害看護」（1単位、30時間）の授業設計

| 授業の回数（1回90分） | 単元 | 時間 |
|---|---|---|
| 1〜4回目 | 国際看護 | 計8時間 |
| 5〜7回目 | 災害看護（基礎知識、災害サイクル、被災者特性） | 計6時間 |
| 8〜10回目 | 国際看護と災害看護（被災者特性〈子ども〉・妊産婦、高齢者、慢性疾患患者、精神疾患患者）に応じた災害看護の展開、特殊な災害による災害看護） | 計6時間 |
| 11・12回目 | トリアージの実際 | 計4時間 |
| 13・14回目 | 図上シミュレーションにおいて避難所の運営と看護が表現できる | 計4時間 |
| 15回 | まとめと終講試験（課題レポート：筆記試験） | 1時間 |

「図上シミュレーション訓練」の概要
※座学を除いた訓練（13・14回目の授業）の進め方

| 訓練の流れ | 訓練内容 |
|---|---|
| 1. 災害状況の提示 | •災害発生状況、避難所を取り巻く状況を理解する。<br>•避難時の人員配置、避難者の受け入れ環境整備などの避難所設営と支援活動を検討する。<br>•避難所担当の市職員などとの協働を検討する。 |
| 2. 追加情報の提示 | •避難者総数、年齢構成、基礎疾患や健康情報留意点などの避難者に関する一定の情報を得た後に、より適切な避難所運営を考える。 |
| 3.「付与カード」の配布 | •避難者の個別情報が記載された「付与カード」を見て、個別対応を検討する。タイムプレッシャーに対応する。 |

●付与カードは、学生が自由に取るようにした。
**付与カードの例**：車椅子移動で膀胱内カテーテルを留置中の高齢者、足を負傷した外国人、妊婦、精神疾患を有し配慮が必要な人、オムツ使用の高齢者、避難経路に倒れている人、乳児連れの母親、浸水リスクが高いエリアからのペット（犬）連れ避難者、身体不調を訴える糖尿病・高血圧を有する人、1型糖尿病の子どもと親、自家用車内避難を希望する高齢者とその家族など。
●科目担当の看護教員が、**学校周辺の地域に合うように**シナリオや付与カードを作成した。

### 災害状況（初期情報）

・1カ月前より雨が続き、2日前より鹿児島市全域に大雨警報が発令されていたが、8月4日午前10時、鹿児島市住民に避難指示が出された。鹿児島市各支所に災害対策本部が設置され、鹿児島県医療法人協会立看護専門学校も市から要請を受け、避難所開設となった。看護学校は休校中。
・午前10時現在、勤め人はそれぞれ職場に出勤している。
・自宅で避難指示を受け本校に避難する地域住民と近隣の職場などから避難してくる住民とを合わせると50〜80名程度が予測される。なお、この日の気温は31℃であり、時間20mmの雨が続いている。
・3年生（4〜5名）は学校近隣の住人であり、本校へ避難してきた。市の職員2名がおり、さらに増加する避難者への支援活動を行うこととなった。

### 追加情報

・気温は31℃で、大雨が降り続く。
・午前11時現在、近隣住民はそれぞれ自宅および避難所へ移動。就学者は、保護者との連携で帰宅または避難所へ移動。自宅で避難指示を受け本校に避難してきた地域住民は以下の通りである。
・避難者45人〔90歳代5人、80歳代5人、70歳代10人、20〜60歳代13名、幼児〜未就学児童10名、乳児（3カ月）2名〕が次々と避難所に入ってくる。
・上記の避難者には糖尿病・高血圧による服薬管理を要する人、ストーマ造設者、脳梗塞後遺症で歩行障害がある高齢者、嘔吐下痢症で保育園を休んでいた幼児、ミルクを飲んでいる乳児を抱える母親、妊婦がいる。

### 付与カード1

1. 避難所入り口での検温で、37.2℃の避難者1名。「体調はどこも悪くないです。咳もありません」と言っている。どう対応するか考えてください。
2.「すみません！ 膀胱内にカテーテルを留置中の80歳の父（車椅子）を連れてきました。家ではベッドで過ごしています。どうしたらいいですか？」
   ①蓄尿袋はどこにおけばいいでしょうか？
   ②尿量を毎朝6時に測っています。続けたほうがいいですか？どのくらい出ていれば大丈夫でしょうか？
   ③訪問看護師さんが陰部洗浄して、熱を測っていたんですがどうしましょう？
3. 85歳の女性が隣人に連れられて避難してきた。隣人は「この人は高血圧症があって薬を飲んでいる。物忘れがあって要支援2で通所介護と訪問看護を受けている」と話した。本人に体調を尋ねるが、要領を得ない。このときにあなたはどう対応しますか？

「図上シミュレーション訓練」で使用する資料例

**費用発生について**｜なし。

「図上シミュレーション訓練」での発表の様子

### 同様の連携教育を導入・展開したい他校へのメッセージ！

外部組織との連携を模索していた時代には、どこの誰に何を相談・お願いしたらよいか悩みましたが、一歩を踏み出すと、協力していただける方は多いと思います。教員が校内にとどまらず、周辺地区に出ること、足を運ぶことで協力を得られると思います。本校では、町内会の方に学校関係者評価に入っていただいています。日ごろから学校、教職員が挨拶や会話を交わして関係づくりに努めています。

### 取材メモ

地域の地理・自然・住民構成・社会資源・インフラなどの情報を反映させた想定事例、付与カードの作成を行われていました。その綿密さが、この「図上シミュレーション訓練」のリアリティーの鍵であることを教えていただくことができ、大変勉強になりました。「図上シミュレーション訓練」の実施は、使用物品のみならず、被災者や避難所設営・運営に関わる多職種の役者など、さまざまな準備を要する大がかりな訓練となりますが、一定のリアリティがあるため、学生間で多くの議論を交わして実践性ある学習が可能となります。各校のカリキュラムの中での位置づけや、学生の学習レディネスに応じて、適当な方法を検討するとよいでしょう。

# 獨協医科大学附属看護専門学校三郷校
埼玉県三郷市

**設置主体**｜学校法人獨協学園獨協医科大学
**課程**｜3年課程
**1学年定員**｜80名

1年次 | 7～12月 | 専門分野 基礎看護学 | 生活を整える援助、対象把握の援助、安楽と癒しのケア[旧] | 4単位(120時間)のうち24時間

## 事例13 地域の高齢者が模擬患者として参加する看護技術演習
### ～地元老人会の協力を得て～

**教育事例の紹介** 2015年に埼玉県三郷市に開校した獨協医科大学附属看護専門学校三郷校は「地域に根差した愛される学校づくり」を目指しており、基礎看護学の3科目で、老人会に所属する地元住民（男性10名、女性21名：2019年の例）に模擬患者として参加いただいている。70歳代の方が多い。演習する看護技術は、①臥床患者のシーツ交換、②洗髪、③足浴、④バイタルサイン測定の4つである。

学生同士での演習とは異なる緊張感で、接遇を意識したコミュニケーションを図りながら演習に臨む。学生は高齢者の皮膚の状態が自分たちとどう違うかを感じながら血圧・脈拍測定を行い、測定値を老化や健康状態と結び付けて確認し、測定結果に対する模擬患者の反応を見る。

洗髪の演習で、学生が「大丈夫ですか」と声かけすると、模擬患者は「大丈夫です」と答えた。しかし終わってみると背中までずぶ濡れであった。この体験から、遠慮や緊張から「大丈夫」と仰る方がいるため、目や手を使って併せて確認することの大切さを学ぶ。学生の“友達口調”を優しくご注意いただけたこともある。基礎看護学であるため模擬患者の詳細設定はせず、教員からその場で「……のようにしてください」とお願いを添えることもあれば、場合によっては学生に困った状態を経験させることもある。

模擬患者の高齢者への事前連絡、体調不良や忘れておられた方の欠席を含めた当日対応・誘導、学生指導は、授業担当教員1人では不可能であるため、教員5、6人が協力して対応している。

技術練習後には模擬患者から感想を頂いてリフレクションする。自身の入院体験や現在の体調についてや、こうしてほしかったなどの感想、改善の指摘、アドバイスなどから学生は多くを学ぶことができている。

基礎看護学実習開始前の看護技術演習で、実習で多く接する高齢者と交流できる意義は大きい。

**関係団体、組織等**｜三郷市老人クラブ連合会（クラブ数：40クラブ、会員数：1,760人　※2021年4月1日現在）のうち3～4つの老人クラブ、三郷市企画調整課。

緊張感を持って模擬患者と接する学生

### 学生の学び

①挨拶、声かけなどのコミュニケーションの基本を学ぶ。
②動作、行動、身体接触などの非言語的コミュニケーションを含めた配慮を実践的に学ぶ。
③老化の身体・心理・精神機能への影響と個人差を観察で学習し、高齢者イメージを形成する。
④援助を受ける側の遠慮に触れ、看護師と患者の関係性を考える。
⑤腕が細い、下着の重ね着でマンシェットが巻きにくいなどの実際によくある状況への対応も学習できる。
⑥個別性を踏まえたリフレクションでは多様な考察をする。

### 同様の連携教育を導入・展開したい他校へのメッセージ！

模擬患者さんの協力を得て行う演習をすると、「楽しかった！」と学生の表情が緊張から笑顔に変わります。ぜひ、地元の団体などでお願いできるところを探してチャレンジしてください。本校では現在、基礎看護学のみで地域住民に模擬患者をお願いしていますが、今後、3年次の「看護の統合と実践」の演習にも導入を検討中です。

**取材メモ** 現状、地域住民に模擬患者として参加していただく演習を実施する養成所は多くないですが、学習効果は高いですし、学校・学生が地域に根差して愛されることにもつながります。この事例では看護教員の生き生きとした様子が老人クラブの高齢者に伝わり、快い協力の継続を実現できているようでした。模擬患者講習会のノウハウを構築・共有できると多くの学校で実施できそうです。

### 「地域住民との連携教育」のねらい

基礎看護学実習の準備段階の演習で模擬患者の高齢者と接し、高齢者の特徴、コミュニケーション、接遇を学習する。

### 科目目標

1. 対象に合わせたベッドメイキング、リネン交換ができる。
2. 対象に合わせた清潔、衣生活の援助が実践できる。
3. 看護師の“手”を用いたケアの有用性を理解し、その技術が習得できる。
4. バイタルサイン測定の意義、方法がわかり、実践できる。

### この科目で「地域住民との連携教育」を実施する背景や理念の紹介

看護師の“手”を用いたケアの有用性を理解し、その技術を学び、豊かな人間性を備えた、実践力のある看護師を育成する。

### 「地域住民との連携教育」の実施に至るまでの経緯

統廃合された小学校跡地に開校となり、地域密着型の教育展開を検討し、三郷市企画調整課の技術演習協力者に相談したところ、近隣の三郷団地の老人会をご紹介いただいた。老人会に演習の意図を説明して、ご協力いただくことができた。

開校年に2カ所の老人会を対象に教員が模擬患者講習会を実施し、同年10月には模擬患者の演習参加を開始した。

2年次には老年看護学実習Ⅰで地域における高齢者の暮らしを学ぶために、学生が病院や買い物に同行する連携教育も展開している。

# 島田市立看護専門学校
静岡県島田市

**設置主体**｜静岡県島田市
**課程**｜3年課程
**1学年定員**｜40名

2年次 | 8月第1週 月曜日 | 専門分野 小児看護学 | 小児看護学 看護方法Ⅱ[旧] | 1単位(30時間) のうち2時間

## 事例14 障がいを有する小児とその家族との「遊び」を介した交流
### ～子どもの成長発達を支える看護実践のために～

**教育事例の紹介**　「小児看護学 看護方法Ⅱ」の演習に島田市こども館が主催する市の特別支援児童等特別開館事業への参加を位置づけている。こども館（2012年開館）は児童を中心とするさまざまな世代の人々が交流するための遊び場で、全天候型プレイルーム、活動室、一時託児やファミリーサポートセンターの相談窓口を配備している。8月の第一月曜日の休館日を利用して、同館の全天候型プレイルーム内などで、ボールプール、クライミングウォール、トランポリン、マグネットボードなど、障がい児と遊びを通した交流を行う。午前中は肢体不自由児20名とその家族、午後は知的障がい児20名とその家族が参加する。学生も午前20名、午後20名の人数配分で、午前・午後いずれに参加するかは学生間で決定する。

学生は子どもたちと一緒に遊び、楽しい時間を共有する交流体験を通して、障がいを有する子どもの理解を深める。「どう接してよいか」と引け腰で臨む学生もいるが、子どもたちが多くの興味や関心を持ち楽しんで遊ぶ姿に触れ、感情の変化や行動を観察するにつれ、次第に親しみを増す体験ができる。保護者からも子どもへの対応の仕方や生活についての話を聞くことができている。教員が1、2名帯同し、学生が障がい児と接する際に、適切な態度、安全な行動をとることができるように指導している。

元保育士である館長が、学生の子どもとの関わり方のよい点を見つけては褒めてくれることが、学生の励みになっている。

9月上旬の授業で、交流体験のグループ発表会を行い、振り返りをする。

**関係団体、組織等**｜島田市役所福祉課、島田市こども館、重度障害児（者）の親の会。

全天候型プレイルームにて

### 学生の学び

①障がいの特徴に応じた態度で接することを学ぶ。
　例）手の添え方、話し方、接し方など
②障がい児の安全を守る方法を学ぶ。
③障がい児およびその家族への先入観が除かれ、理解が深まる。
④個別性を捉えて障がい児と関わる必要性を理解する。
⑤障がいの有無によらず、子どもの発達を保障する遊びの意義を体験を通して学ぶ。
⑥一緒に参加している障がい児の同胞（兄弟）へ関心を寄せるきっかけとなる。

### 地域住民の様子・反応など

- 子どもたちはそれぞれ、学生との遊びを楽しんでいる。
- 保護者は、学生と楽しそうに遊ぶ子どもの姿をうれしそうにながめている。学生ととことん遊んで「疲れた」と座り込んだ注意欠如・多動症（ADHD）の子どもの保護者から「(子どもから）疲れたという言葉を初めて聞いた」と、驚きと感謝の言葉をいただいたこともある。
- 学生と子どもが遊んでいる時間は保護者のピアサポートタイムにもなっている。

**取材メモ**　教員が学生に学ばせたい内容が明確であり、情熱を感じました。障がいの有無に関わらず、共に生きる社会の醸成につながるこの連携教育の教育的価値は高く、半日の演習で、障がいを有する子どもとその家族に対する学生の視点はガラリと変わるそうです。非常に魅力的な教育だと感じました。

他にも島田市の住民との交流を複数実施し「学生が“おおぼったい”という島田の方言を使うようになったら一人前」という看護教員の言葉はとても印象的でした。

※おおぼったい＝腫れぼったい、すっきりしないという意味。
　用例）寝不足で目がおおぼったいや～。

### 「地域住民との連携教育」のねらい

障がいのある子どもと家族との交流から、成長発達を支える個別的看護を学ぶ。健康障害が小児や家族に与える影響について理解する。

### 科目目標

健康障害を持つ小児と家族を理解し、小児と家族がどのような状態にあっても可能な限り成長・発達できるよう、個別的看護が実践できるために必要な知識・技術を習得する。

### この科目で「地域住民との連携教育」を実施する背景や理念の紹介

学校の基本理念のうち「豊かな人間性の育成を目指す」「広く社会に貢献できる看護師を育成する」に通じる。人間関係を基盤にした教育内容を豊富に盛り込み、総合的判断力と思いやりのある人間性豊かな人に成長するカリキュラムを組んでいる。

### 「地域住民との連携教育」の実施に至るまでの経緯

小児科病棟勤務経験を有する教員が市内の重度障害児（者）の親の会のボランティア活動に携わっており、2014年に同会から、看護学生と遊びを通した交流の提案を受けたのがきっかけである。島田市こども館館長の「障がいのある子が自由に遊べる場所を提供したい」、教員の「障がいを有する児とその家族に対する看護学生の理解を深めたい」、親の会の「障がい児の日常生活を知ってほしい」という3者の思いが合致し、この連携教育がスタートした。今では、広報範囲を拡大し、静岡県中・西部地域の全養護学校に島田市こども館から参加の案内を送っている。また、市の子育て応援サイトでも参加を募っている。

### 同様の連携教育を導入・展開したい他校へのメッセージ！

障がい児と安全に遊ぶ演習を行うためには安全な施設を貸し切る必要があります。きっかけがあり、思いが重なって、場所があって、実現できている教育活動です。こども館の休館日でかつメンテナンスがない8月の第一月曜日は、学生の夏休み期間なのですが、この連携教育を実施しています。

# 京都中部総合医療センター看護専門学校
京都府南丹市

**設置主体**｜国民健康保険南丹病院組合
**課程**｜3年課程
**1学年定員**｜40名

2年次 | 10月 | 専門分野 小児看護学 | 小児看護学実習Ⅰ[旧] | 1単位(45時間)のうち15時間

## 事例15 小・中学生対象の看護体験ツアーと進路相談交流会
### ～子どものキャリア教育に参画して子どもと地域を深く理解する～

**教育事例の紹介** 2021年度より、小児看護学実習Ⅰの中に、小学6年生と中学2年生を対象にしたキャリア教育「看護体験ツアー」を導入している。学生は、小・中学生が看護の仕事をたくさん体験できるようにツアーの企画・運営を行う。初年度は、看護学校と通りを挟んで反対側に位置する南丹市立八木中学校の2年生と、学校から徒歩12分程度に位置する南丹市立八木西小学校の6年生を校内に招いて「看護体験ツアー」を実施した。

内容は、手浴体験、車椅子の操作体験、標準予防策手洗いの指導、血圧測定方法の指導と測定体験、新生児モデルを用いた心拍計測と赤ちゃん抱っこなどである。学生は小・中学生と看護体験を共有しながら小・中学生の様子や反応を観察する。日常で子どもと関わる経験が著しく乏しい学生にとって、子どもの成長・発達過程を学ぶ貴重な体験である。

「看護体験ツアー」の中で「進路相談交流会」も行って、看護の仕事を紹介する。看護学生は自身が看護師を志すに至った経緯を小・中学生に語る。小・中学生は看護学生の話を聞き、自身の進路についていろいろと考える。看護師という職業を自身の選択肢の一つに入れる中学生もいる。

「看護体験ツアー」や「進路相談交流会」での小・中学生＝地域の住人との関わりは地域を慈しむ気持ちを生み出す体験であり、将来、看護師として地域に貢献する力となると考える。

今後、小・中学校の要望を聞いて内容を改善しつつ、参加校数を増やす方向で検討している。

科目評価は、実習中の態度、ケアの提供技術や説明技術、実習記録での既習学習内容の活用に関する自己評価および教員評価の総合評価で行う。

学生は、この看護体験ツアーで知り合った生徒と通学時間帯にすれ違うと互いに手を振り合ったり、挨拶を交わすようになり、地域におけるよい雰囲気づくりにもなっている。

看護学生は1カ月に1回程度の割合で中学校の放課後部活動にボランティア（科目外）で参加し、このつながりを継続している。

**関係団体、組織等**｜南丹市立八木中学校、南丹市立八木西小学校。

### 学生の学び

①子ども（児童、生徒）の成長過程を体験から学ぶ。
②成長過程を踏まえたコミュニケーション（説明、表現など）の必要性を体験から学ぶ。
③地域を慈しむ気持ちを育む。
④自身が看護師になるという進路を選択した経緯を年下世代に伝える体験を持つことにより、社会における看護の役割などを考え、整理することができる。
⑤学生の持つ「看護師になりたい」という気持ちを語る経験が、自己理解を深める。

新生児モデルを用いた心拍計測体験

赤ちゃん抱っこ体験

### 同様の連携教育を導入・展開したい他校へのメッセージ！

地域の方々に看護学校や学生を身近に感じていただくことは地域活性化や看護学校の発展につながることだと思います。地域の方々とよく話をして、学校が地域のためにできることを考え続け、学校としてのビジョンを伝え続けることが重要です。たとえゴールが遠くても、多くの方々から客観的な意見を頂き、逆風をもチャンスに変えるために行動することが大切だと思います。

### 「地域住民との連携教育」のねらい

地域の小・中学生との交流を通して、地域特性を知り、地域住民に関心を持つことができる。

### 科目目標

学童期・思春期と発達段階の異なる子どもと実際に触れ合う体験を通して、子どもの身体的・心理的・社会的発達の理解と成長・発達を促進する関わりを理解する。

### この科目で「地域住民との連携教育」を実施する背景や理念の紹介

教育理念の基盤に、地域と人を慈しむ豊かな感性と権利を尊重できる人間性の育成を置いている。

この「看護体験ツアー」と「進路相談交流会」は、思春期の認知機能の発達〈思考形式的操作期段階にあり推論ができる〉と思春期の発達課題〈アイデンティティーの確立、アイデンティティーの拡散〉を踏まえ、学童期・思春期の発達段階の子どもと実際に触れ合う体験を通して、子どもの身体的・心理的・社会的発達を促進する関わりを理解することを意図している。

### 「地域住民との連携教育」の実施に至るまでの経緯

近隣の亀岡市では中学校でキャリア教育を実施しており、当校もそれに参画し、中学生がさまざまな職業を知ることのできる教育を行っていた。コロナ禍でそのキャリア教育の場は制限を受け、本校も幼稚園、医療施設等での臨地実習に制限が生じたため、小・中学生を対象とするキャリア教育を科目内に位置づけることができないか画策していたところ、南丹市の小・中学校の校長から小・中学生対象のキャリア教育受け入れの相談を受け、小児看護学実習内に本連携教育を導入するに至った。

# 丹波市立看護専門学校
兵庫県丹波市

**設置主体**｜兵庫県丹波市
**課程**｜3年課程
**1学年定員**｜40名

2年次 | 9〜10月 | 専門分野 老年看護学 | 老年看護学実習Ⅰ[旧] | 2単位(90時間)のうち60時間

## 事例16 「丹波OB大学」「いきいき100歳体操」に参加
### 〜地域でいきいきと生活する高齢者を知る〜

**教育事例の紹介** 2年次後期の老年看護学実習Ⅰでは「丹波OB大学」「いきいき100歳体操」「宅老所」「グループホーム」で実習を行っていた。このうち「丹波OB大学」「いきいき100歳体操」は、地域に暮らす元気な高齢者と活動を共にする学習形態を取っている。新カリキュラムではこれに加え、「健診センター」での実習の追加を予定している。

●**丹波OB大学**：兵庫県は、丹波地域に暮らす高齢者（概ね60歳以上）に学習や交流の場を提供することを目的に4年制の大学講座「丹波OB大学」（注：学校教育法に基づく大学などではない）を開催している。場所は丹波の森公苑で、美しい自然の中で友だちづくりや趣味の拡大ができる月1〜2回年間18日のプログラムである。**このうち1日が看護学生との交流講座**であり、学生は老年看護学の実習として参加する。OB大学の担当者（県職員）に1年前から依頼をし、学生のレクリエーション企画をプログラムに入れてもらっている。

●**いきいき100歳体操**：丹波市が行う介護予防・日常生活支援総合事業（介護保険制度）の一事業である。上肢や下肢におもりをつけ、負荷をかけて行う筋力体操で、準備体操、筋力体操、整理体操と12種類、30分間程度、DVDを見ながら、椅子に座ってゆっくりとしたスピードで安全に行うのが特徴である。市はこの体操の実施事業を推進し、週1回程度、通いの場に足を運んで集い、仲間と体操を行うことで、筋力の維持向上、閉じこもり予防、住民の交流促進を目指している。2022年8月現在、市内には170を超える実施団体が登録されている（丹波市ウェブサイトより）。

**学生2名1組程度でこの「いきいき100歳体操」に参加**している。団体との連絡・調整は教員が行う。市の担当者が作成・公開している開催情報を見て、立地、日程、交通手段を検討し、20程度の実施団体の代表者に連絡をとって参加している。

学生はこの2つの実習を通して、高齢者の趣味、余暇活動、自主的活動の実際を知る。「大学」「体操」いずれも活動的な高齢者が参加しているため、積極的に学生とコミュニケーションを取ろうとしてくれる方が多く、学生の高齢者イメージを明るいものにすることに役立っている。

**関係団体、組織等**｜（公財）兵庫丹波の森協会 丹波の森公苑 文化振興部、いきいき100歳体操活動団体。

## 学生の学び

①老化に伴う高齢者の特徴を理解できる。
②高齢者とのコミュニケーションを実践から学ぶ。
③余暇活動が高齢者の生活にどう影響しているか理解できる。
④高齢者の生活史や社会参加状況から、生活観・健康観・人生観について理解できる。
⑤学生の高齢者観が“支援が必要な人”から“前向きで活動できる人”と変化する。
⑥高齢者の優しさに触れ、関心を寄せ、尊重する態度を養うことができる。
⑦地域の高齢者とのつながりの大切さを知る。

**丹波OB大学の「丹波市立看護専門学校生との交流講座」の内容紹介資料**
※（公財）兵庫丹波の森協会 丹波の森公苑 文化振興部作成資料に基づく。
目的：丹波市立看護専門学校生と交流の場を設け、異世代間の交流を深めること。

| | | |
|---|---|---|
| 実施日時 | 10月5日（水） 午前9時〜午後4時 | |
| 参加人数 | 丹波OB大学生112名 丹波市立看護専門学校2年生33名 | |
| 主な内容 | 10:30〜12:00 | (1) **看護学生**が中心となり、ゲームや合唱・ダンスなどのレクリエーションで交流する。 |
| | 13:00〜16:00 | (2) 丹波OB大学の学年別研修会やクラブ活動に**看護学生**が参加してコミュニケーションを図る。 |
| | 14:30〜15:00 | (3)「丹波OB大学の歌」のレコーディングを**看護学生**と丹波OB大学生が合同で行う。 |

### 同様の連携教育を導入・展開したい他校へのメッセージ！

副校長　林 かおる先生より

まず、地域の中で高齢者が集う場がどこにあるかをよく知ることが大切です。県庁あるいは市役所で、地域の健康の向上を担当する部署に相談すると情報を得ることができると思います。

本校では、老年看護学方法Ⅰで、市役所の健康福祉部介護保険課職員に介護保険と高齢者虐待についての講義をお願いしています。地域の課題や市独自の介護予防の取り組みなど、詳しく講義してくれます。市町村とのつながりは、地域連携教育を行う際に役立つと思います。つながるためには“動くが勝ち”です。

### 「地域住民との連携教育」のねらい

複数の連携教育を行うことで、学生が地域に育てられ、地域をよく知り、地域貢献の気持ちを育成できる。

### 科目目標

地域で生活している老年者と関わり、老化の個別性を理解する。

### この科目で「地域住民との連携教育」を実施する背景や理念の紹介

教育理念「地域に関心・愛着を持ち、地域住民の健康的な暮らしを支援し、保健医療福祉の分野で活躍できる看護実践者を育成する。学校・学生・地域が一体となり、地域に密着した開かれた学校として貢献する」に沿い、地域特性を踏まえて老年期の看護の対象を理解することを目的とする。

### 「地域住民との連携教育」の実施に至るまでの経緯

1989年の第2次カリキュラム改正時に「兵庫県いなみの学園」の高齢者大学での実習を開始した。その後、「丹波OB大学」に施設変更して現在に至る。

2015年、学校が兵庫県から丹波市へ体制移行した際、健康福祉部介護保険課から情報提供を受けて「いきいき100歳体操」の実習参加を開始した。

# (専)京都中央看護保健大学校
京都府京都市南区

**設置主体**｜学校法人京都中央看護師養成事業団
**課程**｜保健師・看護師統合カリキュラム
**1学年定員**｜40名

3年次 | 前期 | 公衆衛生看護学 | 健康教育論Ⅱ[旧] | 2単位(46時間)のうち46時間

## 事例17 児童館・学童保育での健康教育
### ～児童に「手洗い」などを指導して、地域の健康水準の向上に寄与する～

**教育事例の紹介**　(専)京都中央看護保健大学校のある京都市南区ではすべての児童館に学童クラブがある。健康教育論Ⅱは生涯にわたる健康づくりに関する学習をする科目であり、学習内容は生活リズムの見直しや食事、歯の健康、眼の健康など、人々の健康課題に応じた健康指導の学習であるが、児童館・学童クラブでは「手洗い」「生活習慣について」「虫歯予防」などをテーマに指導を行う。

学生は学童期の発達段階、発達課題を理解し、「手洗い」をテーマとする健康教育の必要性を確認する。そして、児童を対象とする健康教室の企画から評価までのプロセスをたどる。

7名前後の学生が1グループで、数カ所の児童館・学童保育に出向く。打ち合わせを含めて4日間、午後に児童館に行き、児童が来る前に児童館館長や職員に健康教室の計画を確認してもらい、内容の再検討や準備を行う。小学校から下校した児童は15時以降に児童館に到着する。児童は健康教育を楽しみにしており、学生の説明を聞き、手洗いについて学習する。学生は、児童の反応を細かく観察する。健康教室終了後にはアンケートやインタビューを行い、評価をする。

複数ある児童館・学童保育は設立背景がそれぞれ異なるため、教員はそれぞれの責任者に個別に教育意図を説明する。市の管轄部署を経由した依頼方法ではない。具体的な打ち合わせは、各児童館に足を運んで行っている。児童館の職員は、児童の保護者への説明や案内なども快く協力してくれている。また、学生に対しても教育的に関わってくれている。

この児童に対する健康教育の学習体験は、児童以外の異なる対象に健康教育を行う際にも応用可能である。

**関係団体、組織等**｜地区内の複数箇所の児童館および併設する学童クラブ、児童館・学童クラブを利用する児童（とその保護者）。

### 学生の学び

①学童期の成長・発達に紐づけ、一連の健康教育を企画・実施・評価できる。
②健康教育の実施の場（組織およびその職員など）との調整、連携を経験できる。
③発達段階に合ったコミュニケーションを経験できる。
④児童の意識と行動が変容する様子から、実施した健康教育（手洗いの指導）の成果（石鹸を用いて手洗いを行い、ハンカチを携帯し手を拭く）を確認できる。
⑤児童と関わる中で、児童から元気をもらうこともできる。

### この科目に関連するカリキュラム設計

| 授業構成 | | 授業の内容 |
|---|---|---|
| 2年次 | 健康教育論Ⅰ | 座学　健康教育の理論と活用モデルを学ぶ。 |
| 3年次 | 健康教育論Ⅱ | 演習　健康教育の企画・実施・評価の一連の過程を実践する。 |
| 3年次 | 公衆衛生看護展開論 | 地区診断（街歩き、調べ学習、資料作り）。 |

※新カリキュラムでは、この「健康教育論Ⅱ」の教育内容を再検討し、「対象別保健活動論Ⅰ（成人保健・高齢者保健）・Ⅱ（母子（親子）保健）・Ⅲ（障がい者（児）・精神・難病保健、感染症対策）・Ⅳ（学校保健・産業保健）」の中での分配配置を検討中である。

**同様の連携教育を導入・展開したい他校へのメッセージ！**

本校では、児童館の学童クラブとの連携教育を展開していますが、連携の対象を拡大して、障がいのある方、プレママ・プレパパ、中・高校生への健康教育を地域で実践学習できないかを模索しています。地域住民との連携教育を検討されている学校は、そのような対象と連携した教育が展開できないか、ぜひ、検討されるとよいと思います。

### 「地域住民との連携教育」のねらい

児童館職員の指導を受け、地域の健康水準向上のためのアプローチとして、手洗い、生活習慣について、虫歯予防などさまざまなテーマで「健康教室」を実施する。その過程で児童および保護者を知り、地域における児童館の機能を知り、地域の健康水準向上のための学校（養成所）の役割を多角的に検討する視野を培う。

### 科目目標

対象者の健康課題に基づいて、健康教育の企画、計画、実施、評価までの一連の過程を学習できる。

### この科目で「地域住民との連携教育」を実施する背景や理念の紹介

地域の人々と交流しながら生命と生活を守る知識や技術を学習することは、教育理念「地域住民の健康水準向上に寄与できる素養を養う」に沿うものである。

### 「地域住民との連携教育」の実施に至るまでの経緯

健康課題に基づいた健康教育を学習するために、老年期の地域住民を対象に健康教育を実施していたが、コロナ禍で高齢者と接点を持つことが厳しくなった。そこで、コスモス祭（学校祭）の子どもコーナーを通してつながりを持っていた児童館の職員に教育の意図を説明して協力していただいた。

**取材メモ**　コロナ禍で地域連携に制限が生じたことで、学生を“地域の中で育てる”ことの重要性を以前にも増して感じた看護教員が多いことでしょう。そのような中、開校時から温め続けている地域との縁を手繰り寄せて学習の場をつくる力強さを感じました。この成果は、地域に貢献する専門職の輩出という形で地元に還元されると感じました。

小児看護学実習の場の確保が難しい全国傾向から、児童館や学童保育等で遊びや学習を共に行う演習や実習が行われていますが、この教育事例の主目的は健康教育の展開だという点に特色があります。学校周辺の地域のニーズを精査し、地域特性に合った連携教育を検討するとよいと感じました。

# 函館看護専門学校
北海道函館市

**設置主体**｜学校法人野又学園
**課程**｜3年課程
**1学年定員**｜40名

3年次 | 前期 | 専門分野 地域・在宅看護論 | 地域・在宅看護援助論Ⅳ［新］ | 1単位（30時間）のうち18時間

## 事例18 「認知症カフェ」の企画・運営
### ～認知症を知り、学び、考え、つながる場をつくる～

**教育事例の紹介**　函館市の高齢者率は37.4%（2022年）で、今後、認知症発症の増加が予想される。函館市は、認知症について知り、学び、考え、つながる場である「認知症カフェ」の認証事業を実施しており、2019年度にはおよそ30回の「認知症カフェ」が開催されている。市内には10カ所の地域包括支援センター（以下、センター）があるが、函館看護専門学校では学校所在地担当のセンターAが実施する「認知症カフェ」に参加している。

「認知症カフェ」に参加する学生数は主催者との打ち合わせで20名となった。2022年は学年バランスを考慮して1年生10名、2年生10名が参加した。「認知症カフェ」に参加する前に、センターA主催の地域ケア会議に参加して、地域住民から認知症の現状をうかがい、認知症の人が暮らしやすいまちづくりの問題点・改善策などについて会議参加者と議論をする。センター主催の認知症サポーター養成講座も受講し、多角的な学習を積み、「認知症カフェ」参加の準備をする。

「認知症カフェ」で学生が行った活動・企画を紹介すると、認知症の人への接し方などをわかりやすく紹介する寸劇（セルフレジを題材に学生が脚本を作成した）、認知症予防運動プログラム「コグニサイズ」を一緒に実践、血圧測定、握力測定、認知機能のチェック、折り紙コーナー、高齢者川柳、クイズなどがある。何を行うかについてセンター職員や教員もアドバイスや支援はするが、企画や運営の主体は学生である。認知症の人の暮らしやすさの要素、暮らしやすいまちづくり、楽しんで取り組める予防行動等々について地域の方々と意見を交わしながら、主体的に参画・運営をする。

高等学校の生徒、歯科衛生士専門学校生、調剤薬局の薬剤師、短期大学の食物栄養学科の学生、グループホームの介護職などがボランティア参加することもあり、連携を学ぶよい機会となっている。

「認知症カフェ」の学習成果は、看護基礎教育の複数の領域をまたぐ。現在は教科外活動であるが、2024年度から、新設科目「地域・在宅看護援助論Ⅳ」の中に位置づける。同科目には「認知症カフェ」に加えて「まちの保健室」を配置することが決まっている。科目内配置に伴い、夏季休暇期間に市内の商業施設内で実施していた「認知症カフェ」は学内実施に変更となる。

**関係団体、組織等**｜地域包括支援センター、町内会、民生委員、在宅福祉委員。

### 学生の学び

①認知症の理解が深まる。
②住民の一人として、地域への関心が高まる。
③さまざまな健康レベルの高齢者との関わりが経験値となり、日常生活でも、困っている様子の高齢者に声をかけるなど、社会の期待に応えた行動を起こすようになる。
④探究学習（自ら調べ学習する）の力がつく。
⑤運営に協力する多様な集団と関わることで連携を学ぶ。
⑥指導、発表の経験を得る。
⑦1年生と2年生の交流の機会となり、1年生は2年生の学習行動や態度などをロールモデルにすることができる。

### 地域住民の様子・反応など

- 学生（患者）と会話し、交流ができて楽しいという感想をいただくことが多い。
- 認知症の予防や認知症を有する人の暮らしについて楽しく学んでいる。

**同様の連携教育を導入・展開したい他校へのメッセージ！**

地域包括支援センターに相談すると、地域のニーズを反映した教育設計に役立つ情報を提供していただけると思います。

### 「地域住民との連携教育」のねらい

地域で生活する人々やその家族がどのような健康不安を抱いているか、どのような支援が必要かを理解し、看護者として人と向き合い地域と協働する姿勢を身につける。

### 科目目標

1. 健康づくり支援システムや医療・保健・福祉の連携の実際を理解する。
2. 企画・運営に携わり主体的に学ぶ姿勢を身につける。
3. 地域とともに歩む姿勢を学ぶ。

### この科目で「地域住民との連携教育」を実施する背景や理念の紹介

地域包括支援センターの依頼から始まった「認知症カフェ」へのボランティア参加をカリキュラム改正を機に科目内に配置した。

「地域に貢献」という建学の精神。

### 「地域住民との連携教育」の実施に至るまでの経緯

2019年度に地域包括支援センターAが「認知症カフェ」を始める段階で、以前、同センターの職員であった教員とのつながりから、学校に声をかけていただいた。

臨地実習病院の看護部長と卒業生を対象とした現行カリキュラム評価アンケート結果を踏まえ、主体的に課題に取り組む力を育成したいと考え、課外活動であった「認知症カフェ」を新カリキュラムで科目内に配置することにした。

**取材メモ**　建学における報恩感謝・常識涵養・実践躬行の精神にのっとり、地域に根ざした教育を大切にする函館看護専門学校では、地域の清掃活動、マラソン大会、餅つき、お祭り、長寿の会などの町内会行事に参加しているそうです。地域との連携が学校の日常である点、素晴らしいと感じました。

# 国際ティビィシィ小山看護専門学校
栃木県小山市

**設置主体**｜学校法人 TBC 学院
**課程**｜3年課程
**1学年定員**｜80名

3年次 | 5月～ | 専門分野 地域・在宅看護論 | 地域・在宅看護論実習［新］ | 2単位（90時間）のうち30時間

## 事例19 駅近レンタルスペースで「スチューデントサロン」を開催
### ～小山市民が健康で幸福に暮らす提案に取り組む～

**教育事例の紹介**　2022年度より、地域・在宅看護論実習の中に**「よろず相談室スチューデントサロン」企画**を導入した。地域住民との交流の機会を設け、学生がサロンに来た方の健康関連の課題や生活の悩みごとなどを聞き、それに対する解決策を提案する過程を学習に活用する教育である。場所は、小山市を中心に地域コミュニティ・コーディネートや地域課題解決型プロジェクトを展開する一般社団法人運営の多目的レンタルスペース（小山駅から徒歩3分）である。

小山市出身の法人代表者はこの教育の意図をくみ、自治会長や近隣の方への声かけ、地域の方々が気軽に参加できるようにSNS発信もしてくれている。

2022年度は6～11月にかけて、月に2～3回のペースで計10回開催した。午前約2時間、予約不要の自由参加である。3年次学生46名を10チームに分け、各チーム1回、サロンを担当した。回によって参加人数は異なったが、およそ2人程度でゆとりを持って交流できた。

参加者の年齢、性別、職業なども日によって異なる。学生は、参加者から健康や暮らしに関わる悩みごとを詳しく聞き取って一緒に考え、聞き取った内容を題材に情報を集め、解決策を考えて提案する。即時に提案はできないので、“ナースのたまごニュース”と題したフリーペーパーなどを作成し、後日、レンタルスペースに置いていただいて参加者に還元（お返事）する。その内容は、質問や悩みに関連した説明や解説、日常生活での注意点や工夫などに加え、社会的処方※（内容保証のために医師の監修を経た）が含まれることもあった。

**スチューデントサロン参加者を募るSNS発信**

国際ティビィシィ小山看護専門学校の学生さんが「よろず相談室スチューデントサロン」を開催します！
何ができるの？と思った方も多いと思います！ より健康になるための課題や生活のお悩みごとなど、看護学生たちが一緒に悩み、一緒に考え、全力で解決策を提案します！
**看護学生とお話ししてみませんか？**
ちょっと若い人と話してみようかな？と思ってくださった方！ぜひいらしてください！ お待ちしています！！　※一部編集掲載

※社会的処方：薬の処方など医師の医学的処方に加えて、患者などの健康や wellbeing の向上などを目的に、地域の活動やサービス等につなげること。
参考　資料「医療・介護の総合確保に向けた取組について」、厚生労働省 保険局 医療介護連携政策課、令和3年

**関係団体、組織等**｜小山市で地域人材創出・コミュニティ形成事業を展開する一般社団法人、同法人運営のレンタルスペースのスタッフ、同レンタルスペース所在地域の自治会。

## 学生の学び

①地域住民の暮らしと関連づけて健康に関連する問題を検討できる。
②サロンの企画や運営に関するノウハウを知る。
③地域住民も看護の対象であり、看護師の活躍の場が地域にあることを知る。これよりキャリアビジョンが広がる。

## 地域住民の様子・反応など

少々緊張してサロンに足を踏み入れた方も**次第にうちとけ**、“看護学生のために”と、学生の質問に丁寧に答えてくださる方が多い。

**地域・在宅看護論実習の概要**

| | | |
|---|---|---|
| 訪問看護ステーション実習 | 6日 | 45時間 |
| 地域包括支援センター実習 | 2日 | 15時間 |
| スチューデントサロンの開催 | 4日 | 30時間 |
| | | 計90時間 |

駅前商店街の元洋服店をリノベーションした親しみやすさのある多目的レンタルスペースで開催するサロン

### 「地域住民との連携教育」のねらい

地域で暮らす人々との関わりを通じ、健康観や考え方、健康づくりを理解し、地域に暮らす人々の健康にどのような課題があるかを知る。健康問題の解決策を提案するフリーペーパー作成過程で、地域に寄り添った看護師の役割について学ぶ。

### 科目目標

地域に暮らす人々の健康観や考え方、健康づくりの取り組みについて理解する。

### この科目で「地域住民との連携教育」を実施する背景や理念の紹介

〔教育目標2〕個々の健康を認識し、多様な価値観を受け入れ、科学的根拠に基づき、問題解決に向けて看護実践できる能力を養う。

### 「地域住民との連携教育」の実施に至るまでの経緯

小山市主催の小山地域医療健康大学に教員と学生が参加したことで、さまざまな地域住民や主催側の人々と繋がりを得て、連携の方向性を見い出し、スチューデントサロン開催につながった。

### 同様の連携教育を導入・展開したい他校へのメッセージ！

学校が地域と接点を持つことが大事です。学校のことを知っていただき、学校も地域のさまざまな団体の活動をよく理解する。そうすると、基礎教育に何をどう活用できそうかのアイディアが生まれます。企画検討段階には、実際に地域のさまざまな場所に足を運び、情報を得ながら、つながりを築くことが大切です。

# 秋田しらかみ看護学院
秋田県能代市

**設置主体**｜学校法人のしろ文化学園
**課程**｜3年課程
**1学年定員**｜40名

1・2・3年次　通年　科目外　課外活動

## 事例20 学生機能別団員として地域の防災活動に貢献 ～能代市消防団との連携～

**教育事例の紹介**　2019年度から、学校は能代市消防団の学生機能別団員としての活動参加を推奨している。任意参加であるが、例年7～8割の学生が参加している。学生への案内は能代市消防団が来校して実施している。消防団や市役所からの連絡は担当教員がまとめて受け、学業に支障のない範囲で学生に案内している。

コロナ禍での活動中断を経て、2022年10月22日（土）～23日（日）に「のしろ産業フェア」という大規模イベントにおいて、能代市消防団の防災展ブースのスタッフとして学生数名が参加し、活動再開となった。活動内容は、ポスター「ハザードマップを確認しよう」の展示、防災グッズの展示と紹介、避難所体験コーナーの運営であった。学生にとってこのブースを訪れるさまざまな年齢層の地域住民への対応は、コミュニケーションのよい練習の場となり、地域住民との触れ合いを通じて地域をよく知ることにも役立った。さらに、同ブース担当の消防団員との連携も経験できる。また、食べ物や特産品など、地元産業を紹介するブースが並ぶイベントなので、楽しみながら産業や食文化の理解を深めることができた。教員と各担当者との打ち合わせは事前に済ませ、当日、教員は市や消防団担当者への挨拶と学生対応を兼ねてブースを訪問したが、常時帯同はしなかった。学生には市から特別活動出動報酬として3,000円が支払われるが、学生の口座への振り込みであり学校に事務手続きは発生しない。

コロナ禍以前の2019年度には、2年生の学生機能別団員の希望者が、自衛隊、警察、消防、自治体、企業、公共機関が連携して災害発生時の応急対応を実践的に訓練する県主催の「秋田県総合防災訓練」に負傷者役として参加した。このような活動の再開を期待している。

**関係団体、組織等**｜能代市消防団、能代市総務課、能代山本広域市町村圏組合消防本部。

### 学生の学び

①地域の消防活動を、知識普及活動、後方支援の側面から理解できる。
②活動を通して接点を持つ多様な人々との連携を体験できる。
③防災意識を高め、地域の防災活動における看護の役割や看護学生としてできることを考えることができる。
④社会からの承認を感じることができ、看護師になるものとしての責任を深く心に刻む。
⑤地域の人々の暮らしや文化を理解し、愛着を深めることができる。

この他にも秋田しらかみ看護学院では、1年次後期の専門分野Ⅱ「老年看護学概論」の授業の1コマで、能代市連合婦人会の方（20人前後）と学生の交流対話を行っている。高齢者の話（社会、戦争体験、男女格差などについて）に耳を傾け、「1人の女性の人生」の理解を深めている。

### 同様の連携教育を導入・展開したい他校へのメッセージ！

消防団の活動は地域に根ざすものです。子どもを含む幅広い年齢層の人々との触れ合いもあり、看護学生が、人に寄り添うことを学ぶ機会として最適です。消防団での多様な経験は、看護を学ぶ上で重要な要素を持っています。ぜひ、地元の消防団との連携を模索してみてください。その際、「学生」が無理なく参加でき、活動内容も「機能別」に限定することをお勧めします。

### 「地域住民との連携教育」のねらい

機能別団員として期待される活動内容は、指定緊急避難所などにおける避難所運営の補助、啓発活動、防災教育、防災訓練への参加などであるが、これらの活動における**消防団員等との連携を通し、地域とつながり、地域に貢献する意識を育む。**

### 「地域住民との連携教育」の実施に至るまでの経緯

自然災害が頻発する近年、地域防災力の確保のために女性や学生（若手）の消防団員加入に期待が寄せられている。2018年に教員が県の消防協会の郡支部が主催する「女性消防団研修交流」に参加した際に、主催者側から「子どもと触れ合う防災活動もあるため、看護学生が協力してくれるとうれしい」と声をかけられたことがきっかけである。学校としても「自分たちの地域は自らで守る」という使命を共有できるため、能代山本広域市町村圏組合消防本部と能代市総務課防災危機管理室と協議を行った。2019年3月、能代市消防団条例の一部改正（「市内に居住」「市内に勤務」であった機能別団員の任用資格に「市内に通学」を加え、任務に「火災予防」「広報」「救護活動」を加えた）を経て「学生機能別団員」の任命が可能になった。2019年より、この「学生機能別団員」を学生に案内している。通常の消防団員よりも活動内容が限定されるため、学業との両立が可能である。

**取材メモ**　2020年度からは5月に消防団長や市長の来校のもとで入団式が行われ、キャップ、ユニフォーム、ベルトの貸与もあり、学生たちはうれしそうにそれを受け取っているそうです。2021年度卒業生が1期生で、校内で退団式が実施されました。卒後も、消防団活動を深く理解した看護師として、災害発生時にも平時にも活躍する姿が目に浮かびます。

## 協力校・協力者名一覧

※敬称略、協力校・協力者名は本冊子中の事例紹介の順に掲載

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 上尾市医師会上尾看護専門学校 | 副校長 | 五十嵐良子 | 教務主任 | 前田　久恵 |
| 相馬看護専門学校 | 副校長 | 愛澤めぐみ | 事務長 | 紺野　　薫 |
| 泉佐野泉南医師会看護専門学校 | 副学校長 | 西田　好江 | 実習調整者 | 後藤　智子 |
| 福岡水巻看護助産学校 | 教務主任 | 山本　美紀 | 専任教員 | 田中　優子 |
| 松下看護専門学校 | 教務主任 | 大谷　弘恵 | | |
| 日章学園奄美看護福祉専門学校 | 看護学科長 | 大庭　梨香 | 専任教員 | 山城　　歩 |
| 竹田看護専門学校 | 副学校長 | 佐藤　敬子 | | |
| 厚木看護専門学校 | 学科長 | 島田真由美 | 主査 | 古山　由佳 |
| 勤医会東葛看護専門学校 | 校長 | 窪倉みさ江 | | |
| 鹿児島県医療法人協会立看護専門学校 | 副校長 | 小牧　和代 | 専任教員 | 川田　正輝 |
| 獨協医科大学附属看護専門学校三郷校 | 教務主任 | 篠崎まゆみ | 教務副主任 | 岡田　里香 |
| 島田市立看護専門学校 | 教務課長 | 赤堀　夏海 | 教務係長 | 山本　淳子 |
| 京都中部総合医療センター看護専門学校 | 教務主任 | 浅田　美佳 | 専任教員 | 杉本　美恵 |
| 丹波市立看護専門学校 | 副校長 | 林　かおる | 教務主任 | 大槻　弥生 |
| （専）京都中央看護保健大学校 | 副学校長 | 阿形奈津子 | 看護保健副学科長 | 田淵眞由美 |
| 函館看護専門学校 | 副校長 | 太田　希子 | 専任教員 | 蛯名　千昌 |
| 国際ティビィシィ小山看護専門学校 | 教務部長 | 前原　史枝 | 教務科長 | 秋澤きみよ |
| 秋田しらかみ看護学院 | 教務主任 | 中村　陽子 | 専任教員 | 鍋谷久美子 |

## 調査委員会構成

**● 委員長**
水方　智子
一般社団法人日本看護学校協議会　会長／松下看護専門学校

**● 調査班委員長**
恒﨑　康子
一般社団法人日本看護学校協議会　常任理事／八事看護専門学校

**● 調査委員**
石橋　佳子　東京医薬看護専門学校
今田　良子　四国中央医療福祉総合学院
木村　　緑　松下看護専門学校
齋藤　裕子　ポラリス保健看護学院
徳森　朝子　中部地区医師会 ぐしかわ看護専門学校
戸田　悦子　砂川市立病院附属看護専門学校
花田未希子　勤医協札幌看護専門学校
福嶌　松代　関西看護専門学校
増田　信代　茅ヶ崎看護専門学校
山田かおる　勤医会東葛看護専門学校

**● 調査委員（オブザーバー）**
山田　雅子
聖路加国際大学 大学院看護学研究科　教授

**● 調査企画・コーディネート・監修等**
奥田　三奈
一般社団法人日本看護学校協議会　研究顧問／看護学博士

**● 運営・管理事務**
山田百合子
一般社団法人日本看護学校協議会　事務局長

（2023年3月現在）

事例紹介 MAP・本文イラスト／はやしろみ

地域は教育の宝箱！
**地域と学校が共に作る連携教育展開の手引き**

2023年3月発行　第1版第1刷

発　行　一般社団法人日本看護学校協議会
〒104-0033　東京都中央区新川2-22-2　新川佐野ビル5F
TEL　03-3537-7381
URL　http://www.nihonkango.org/

制　作　株式会社メディカ出版

本書の無断複写・転載は禁じます。

本冊子のデジタルデータは
一般社団法人日本看護学校協議会のホームページからご入手いただけます。

**一般社団法人日本看護学校協議会**

http://www.nihonkango.org/

日本看護学校協議会

2023年3月　発行